
B*L*U*E*

五十崎由記

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B*L*U*E*

【Nコード】

N6096G

【作者名】

五十崎由記

【あらすじ】

◇ユカの秘かな楽しみは、こっそりあの人を見つけること。一方うんざりなのは、意地悪なあいつからいじめられること。甘く切なく、恋はゆっくりと深まっていく◇人違いからはじまるLovestoryです。◇更新は週1〜2回の予定。

◇1 ろくでもない男

彼のことを思うたび、いつもふつと浮かぶカラーがある。

それは潮風のふきつける海岸沿いから見た海だったり、競技場のフェンス越しに見る空だったりするんだけど、
或いは

かわらないのは、そこにある彼の立ち姿だ。

日に焼けた、茶色い髪。

二重まぶたのラインが、左右で微妙にちがう瞳。

笑うとき、片一方だけ口の端の上がる口唇。

そして、

「子ブタ」

と呼ぶ、憎たらしいあの声。

ヤツのことをユカはいつもいけすかなく思っていた。

無礼で、いやらしくて、ろくでもない男だ、と。

第1章 1. ろくでもない男

——『各選手、一斉にスタートしました。風は南西よりやや強め、スタートは正常』

真夏の太陽にあぶられるバンクを、視聴覚教室のモニターが映し出していた。

スピーカーからは解説者だかアナウンサーだかの、まのびした声。それに続いてトラックレーサーにまたがった選手たちの風を切る音が流れていく。

もう何度見せられたかわからない飽き度120%のVTRを、今日も変わらずコータは見たいらしい。

しつこいというか、何というか。同じ室内にいるユカにとってはまるでタチの悪い罰ゲームだ。

机たちを拭きながら、ユカは掃除に加わる気のなさそうな背中に眉をひそめた。

さつきから画面を食い入るように見ているのは、ユカの勘違いじゃなければ、このだだっぴろい視聴覚教室と一緒に掃除するはずのパートナー。じゃない、一員だ。

けれど、ヤツにとって掃除中はVTR鑑賞のお時間。

掃除を押し付けていることなんて振り返りもせず、コータはいつも同じところで声をあげるのだった。

400メートルのバンクを1周半しかけるあたりで、必ず。

——『おお？ 西高の2番手、ここで仕掛けてきましたね。いい走りだ』

「やっぱ俺ヤバすぎだよな。カッコよすぎ」

スピーカーから実況が流れたとたん、まるで待っていたかのようなタイミングで自画自賛するこの男は、うぬぼれがすぎるとユカは思う。

モニターが映す自転車競技の団体戦だと、どう見ても須賀君の方がカッコいいし、それはユカだけでなく広く世間の思うところであるはず。

まあ、そんな一般論を口にしたところで仕方がない。

コートみたいなヤツにとっては、顔の造作なんて耳くそみたいに軽い問題なのだ。

だからこうして臆面もなく、俺ヤバすぎとか、カッコよすぎ、とか言えるのだろう。

「な、子ブタ見た？」

雑巾をしばらくおし、ユカはうんざりしながら日々繰り返される質問を無視した。

あたしは真面目に掃除しているんです。

なので、聞こえませんでした、というふりをして。

そもそもなぜ子ブタと呼ばれはじめたのか。それがどうにも思い出せない。いつの間にか名づけられ、当たり前のように呼ばれていたと思う。

——とはいえヤツとはクラスが別だし、ブタ呼ばわりするのもコトだけだから、掃除時間だけ我慢すればいいのだけれど。

それでもやつぱり、ムカつくものはムカつく。

太っているわけじゃあるまいしいい加減やめていただきたいのだが、多分それは口にするだけ無駄な話だ。

コータは一言でいえば、典型的いじめっ子ってヤツで。人が嫌がれば嫌がるほどあげつらい、笑い者にするのをよしとしている。

そこらへんは、ほら。

「なあ、ブー子ちゃんってば」

こういう物言いが象徴していると思います。

「なにそんなムキになって掃除してんだよ」

シカト攻撃にしびれを切らしたのか、掃除時間が半分をまわったころ、コータの近づいてくる気配がした。

本当に迷惑な男だ。

不快にさせることしか言わないくせに、コータはかまってもらわないとすぐちょっかいを出してくるのである。

「あんたがサボるからでしょ？」

「またまたそんな、つれないこと言っちゃって」

「うるさい、ってば。あんたとお喋りしてる暇ないの。ただでさえ負担なのに……」

「はいはい。手伝うから怒るな、って」

だから寄せ、とのびてきた手に雑巾を叩きつけ、ユカはしぶしぶと顔をあげた。そこには、モニターから抜け出してきた自転車好きの男がいる。

日に焼けた茶色い髪。二重瞼のラインが途中で切れた瞳。

頭のとっぺんには、ヤツのトレードマークともいえるぴょんと上を向いた遊び毛。つむじの巻きのせいで、毛が自動的に立つみたいだ。

顔立ちは普通で。始終悪巧みを企んでいるせいか、生意気ざかりの少年みたいな顔をしている。

——とまあ、そんなコータではあるが、たま〜に女子の中でも好きモノがいて。

そういうマニアな人からだけは人気者らしい。

VTRはとっくに動きを止め、モニターには『リプレイする?』のサインが出ていた。

ユカはパソコンの電源を落とし、昼休み中に一度目を通した携帯のメールをふたたびひらく。

送り主は、ユカがこっそりと応募していたモデルオーディションの主催、東京のイベント運営会社。

内容は——わざわざ読み返すまでもない。

“残念ながら今回は”のくだりからはじまる、選考落ちのお知らせである。

コータは知らないだろうが、実のところユカは小学生のころからモデル事務所に所属している。

アイドルに憧れ、それなりにレッスンを積んできたけれど——でも、結果はご覧の通りだ。書類審査だけで落ち、レッスンの成果を発揮する場さえ与えてもらえない、ってわけで。

だから、本当のことを言うと、コータの暴言はしゃれにならない。

ブタだのブー子だのと呼ばれるたびに、真に受ける自分がいて。どこからか忍びこむすきま風が背筋をさらうように、ひやりとさせられるのだ。

ユカは憂鬱なため息をつき、その行方を目で追いかけた。モニターを鏡がわりにして、前から、横からと映る自分をチェックする。

いつまでも赤ちゃんっ気の抜けない残念な丸顔。

愛されモードとは名ばかりの太って見える緩やかパーマ。

このふたつがいけなかったのだろうか。

ストレートの方がスッキリしますよ、と言われたのに、アドバイスを無視したから。

「パーマ落とせば、選考通ったのかな……」

無意識につぶやき、ユカはハッとして振り返った。あまりに静かすぎるから、ひとり言を聞かれたかと思ったのだ。

けれど心配する必要はなかったらしい。

いつの間にか雑巾を投げ出し、コータは掃除などしていやしなかった。

「ちょっと！ 全部拭いてよ。いつつもサボってばっかじゃん」

ヒステリックな声をあげ、ユカはむっと口唇を尖らせた。転がった雑巾を拾いあげ、コータの背中を睨みつける。

が、ヤツは図太いというかなんというか。ユカの説教など聞く耳もたぬといった具合で。

「ちょ、いま話しかけんな」

などとほざき、携帯いじりに精を出すのだった。どうやらゲームにご熱心らしい。

どうせエッチなやつでしょ？ と顔をしかめ、ユカは背後から携帯を盗み見た。

ディスプレイには案の定、シャツのボタンがはちきれそうな巨乳の美少女。

ロン！ というふきだしから察するに、麻雀で勝つたび服を脱がせるゲームだろう。

いかにも、コータらしい好みである。

「やる気がないなら最初から代わってくれなくていいのに」

ユカは聞えよがしの文句を吐き、掃除の続きにとりかかった。

こんな人、いつそ来ないでいてくれる方が楽なくらいだ。

掃除はしない。せっかく拭いた机の上に脚を乗つける。エッチなゲームを臆面もなくやる。

まったく、ろくでもない男である。

◇1 ろくでもない男（後書き）

こんにちは。五十崎由記といいます。

まったりと、週1ペースで更新できればいいななんて思ってます。
宜しければお付き合いください（・∀・）

◇2 残念メール1

「その男子、全然手伝ってくれないの？」

下校時間はとうに過ぎ、人影もまばらになった特別クラス。窓から射すやわらかな西日を受けて笑う萌は親友。そして

「もう……笑いごとじゃないんだってば」

――事務所の同期でもある。

モデル事務所に籍を置いて8年。

ユカが小学生の頃から事務所に所属していることは、まわりでも一部の人しか知らない事実だ。それは必死に隠しているわけではなく、単に、知られる機会がないだけだけれど。

萌はそれを知る者のひとり。

色白の小さな顔に、日本人ばなれした目鼻立ち。エクステの入った長い髪をさらりと背中に流す萌は、週末のローカルTV番組でお天気コーナーをもつ人気モデルだ。テレビ、ラジオ、雑誌と活動の域も幅広く、このあたりの地元では知らない人がいない。

「ユカ、いつもひとりで掃除してるんだ？」

「そういうこと」

「だから遅いのね、来るの」

つまり彼女は事務所きつての稼ぎ頭。落ちこぼれちゃんのユカと比べ、扱いに差があるのは仕方のないこと。

というわけで、萌は知名度の高さに配慮され、スポーツ特待生と同じ特別クラスにふりわけられている。出席日数がたりず、授業のス皮ードについていけない分を、こうやって補習プリントでまかなっているのだ。

掃除を終えたあと、ユカはこのクラスまで萌を迎えに来るのを日課としている。目的は迎えだけではなくて。

補習プリントをとく萌から、ユカは教室のすみにいるあの人の背中へと目を移す。

――須賀君。

そう、須賀。

萌のクラスメイトであるスポーツ特待生の彼に、ユカはこの数ヶ月片思いをしているのだ。

黄昏時が落とす影のたゆたう教室で、仲の良い友人と噂話に花を咲かせながら、あの人の姿を目で追う。

友人の迎えにかこつけて、須賀ウォッチングが楽しめる放課後のこの時間を、ユカは何より愛しているのだった。

頬づえをつきながら、ユカは仲間とたわむれる須賀の背中を見つめた。

他の男子たちとはちがう、クールな立ち居振る舞い。いい感じに盛ってある髪に、スポーツマンらしいスタイル。

金太郎飴みたいに、どこをどう切っても素敵分子しかあらわれない彼は、仲間たちと机に広げた雑誌をかこみ皆で頭をつき合わせていた。

誰かがつぶやいた拍子にどっと笑い声をあげ、盛り上がっている。悲しいことに、この誰か、っていうのがコータだったりするんだけど。

確かに、コータみたいになりアクションが大きく、始終くだらないことばかり言っているようなヤツがいれば、楽しめはするだろう。

でも、あんなのと親しくしていたら彼が汚されてしまう。

同じ部活動なのは仕方ないにしても、もっとふさわしい友人はいるでしょ？ と陰ながら心配しているのに、いまのところユカの念力が伝わった形跡はない。

「つていうかね？ ユカ」

「え、ああ……何？」

急に話しかけられ、ユカは視線を萌に戻した。

彼女はプリントに目を落とし、カリカリとシャーペンを動かしている。

得意な英語だから進むのが早い。設問6まで埋まっているから、もうすこしで終わりそうだな、とユカが思ったその時だった。

「ユカ、最近男子ばかり見てるよね？」

「えっ？」

思いがけない問いかけに、ユカは一瞬意味がわからなかった。けれど直後、

「好きな人いるの？」

更にツツこんだ追及をぶつけられて。

「な……、しーっ」

ユカは慌てふためき萌の口を手で覆いだ。

どストレートに図星をつかれ、とても平然としてはいられない。そのまま手を離さずに、プリントのすみっこに注意書きを走らせる。

“ 声にだしちゃダメ！ 聞こえるじゃん ”

あせって乱れた文字は、やたら子供っぽいものとなった。

それを追う萌のまなざしに興奮は見られない。静かにユカの手をは

がし、萌は注意書きの隣に文字を書き加えていく。

“聞かれたら”

そこまで書いたところで首をかしげ、萌は思い直したように上から塗りつぶした。そうしてその隣に

“ここにいるの？”

と書き改める。

どうしよう——と息をのみ、ユカはスカートのひだを握りしめた。

というのも、片思いをして数ヶ月。その間、萌に隠していたのはわざとなのだ。一応、それにはわけがあつて。

率直にいえば萌は、人の影響を受けやすいところがあるのだ。そういう子って、女の子には珍しくないと思う。

あー、カワイイ！ と一目惚れして買ったワンピースを見せれば、翌週には同じ物を着ていたり。いつの間にか、髪型や言葉づかいまでそっくり同じになっていたり。

そしてとうとう、好きな男子まで——ということが、中学生の頃ふたりの間にあつたわけだ。

その過去の経験が気にかかり、ユカはあえて恋バナをしないでいた。いくら仲のいい友人だからといって、好きな男子までかぶると辛い

し。友情だって壊れかねないし。

だから。

「そんなのどうだっていいじゃん！ それより萌、オーディションの結果どうだった？」

あたしまた書類審査で落ちちゃってさー、と、ユカは少々強引に話をかえ、携帯に届いた残念メールを萌の鼻先にもっていった。

残念メールっていうのは、あれだ。

——『残念ながら今回は……』

というくだりからはじまる、オーディションの選考落ち通知。

これをユカは“残念メール”と命名して、プチコレクションにしている。

それはともかく、どうだった？ なんて口にしながら、本当は聞くまでもないことをユカは知っていた。

メディアでの実績を考慮され、萌が無審査で地方大会を突破するのは間違いないと聞いていたから。

でも、ぎこちなく逸らされる瞳を見れば、わかっているもやっぱり傷つく。

そうか、やっぱりね——と思ってしまう。

「私は、全国大会までは推薦だから……」

「そっか。萌、絶対グランプリ取ってね。あたし応援してるから」

ユカは残念メールを閉じ、なんてことないふりをしつつ携帯をいじった。

こういうシチュエーションでのユカは名女優だ。

だって。平気そうな顔をしていないと萌が気にするだろうし。

それに、話をはぐらかせたただけマシというものだ。かなり自虐的ではあるにせよ、話題がかわったのだから。

そう自分に言い聞かせ、ユカは胸をなでおろしていた。

なのに。

“ユカ、どうして隠すの？”

ニットの袖をぐいと引っ張られて。

目を落とした先には、“私、協力するよ？”の文字があった。

萌はペン先で“協力するよ”の部分指し、返事を急かしている。いぶかしげな瞳が、こちらを窺っている気配がした。

話題はまったくかわってなどいなかったのだ。

それどころか、力技で話をそらせたのが萌を不審がらせたらしい。ユカが言葉を失っている間にも、萌の手はカリカリと進んで。

“友達なのに”

と書き足したあと、ぴったりと止まってしまったのだった。

ひそやかにため息をつく萌の、浮かない表情。

それを見たたん、鉄の味がするスプーンを咥えた時みたいな気まぐさをユカは覚えた。

やばい、こんなはずでは——と携帯をとじ、慌てて弁解を書き散らす。

自分が気をつかわなすぎたんだ。

誰だって、露骨な隠しごとは傷つく。親しければ親しいほど。

秘密にしたいことは誰にでもあるけど、バレないように隠すのと、バレかかったものを必死に隠すのではちがうから。

それに、不信感の裏側にある感情を、ユカはとっくに自覚していた。

真似されたらイヤだから教えなかっただけじゃない。

教えて、また以前のように萌が同じ人を好きになってしまえば、ユカには到底勝ち目がないと思ったからだ。

人気モデルの萌と、さっぱり仕事のない自分。その差は見た目にも十分にあらわれている。

ユカは口唇をかみ、シャーペンを握り直した。

これ以上黙りこんではいられない。あまりに長いと、本格的に萌を傷つけてしまう。

協力してくれると言うのだから、その言葉を信じるしかないだろう。

ユカは、えいと思いきり、プリントのすみっこにシャーペンをはしらせた。小さく、ひっそりと、そこにだけカワイイ花が咲いたみたい。

“須賀君”

喜んで書いたわけでもないのに、名前を書き終えた瞬間、ユカは全身の毛穴から汗がふきでるような気がした。

本人がすぐそこにいるから尚のこと、萌の反応が気にかかる。

なるべくなら、萌の好みじゃなければいい。

ふーん、あの人なんだ、くらいの反応で収まってくれたら——と。

そうやってそわそわしているうちに、萌はやがて彼女らしい疑問を書き綴った。

“ごめん。私、クラスメイトの名前わからないかも”

これは無理もなかった。

萌は新学期早々から撮影だの何だのと飛びまわっていたのだ。クラスメイトの顔と名前が一致するには、まだ時間がかかるだろう。

“どの人？”

続けられた文字に、ユカは彼らの方を振り返った。

いつの間にか彼らは雑誌をとじ、いかにもいまから帰りますといった風情で廊下へ出ていた。がやがやと楽しげな笑い声が、ここにまで響いてくる。

“一番カッコいいのが須賀君”

ジャージ着ているひと、とか。黒のスポーツバッグのひと、とか。他に説明のしようはあった。

けれどこの説明こそが最強で、最高の分別法なのだ。ユカにとっては。

むさくるしい大男ばかりが目立つ特待生の中であって、彼は一番星みたいに輝いて見えた。

どの角度からどう見ても、100人に聞けば99人は彼が須賀だとわかるはず。

はぁーっと、物思いとも、打ち明けたことによる安心感ともつかないため息をつき、ユカは誰もいなくなった廊下の方に目をやった。

まばらに届く足音が、どんどん小さくなっていく。セピアにそまつた教室は、静けさを増して。

きつと彼はもう階段を下りる頃。この音が途切れたら、つぎに会えるのはまた明日。

そんな乙女ちっくな思いをのせて、ふたたびため息をついた時だ。

「ユカ、任せて！ 私が彼を連れてきてあげるから」

萌が、動いた。

「え？」

いきなり何を言い出すのかと振り返った時には、もう遅かった。

すぐさま走り出した萌はスカートの裾をひるがえし、ところどころの机にぶつかりながら一目散に彼らを追いかけていく。

「えーっ！　ちよつと、ちよつと待ってよ！」

取り乱してのぼした指は、もちろん萌に届かない。

ユカは教室にひとり取り残され、あとには萌らしくない足音と、彼女がずらした机たちだけが残った。

◇3 残念メール2

どうしよう、どうしよう、どうしよう。

まずい、まずい、まずい。

突然ひとりぼっちにされた孤独感もあいまって、ユカはいてもたってもいられない。おろおろと腰をあげ、足をもつれさせながら萌の足音を追いかける。

けれど二、三歩行ったあとになって、今後待っているだろうシチュエーションがひらめいて。それを考えたたん、そこから先に進めなくなってしまった。

萌は須賀を連れ戻しに行ったのだ。きっと昇降口のところまで。

ということは、そこには他の男子たちだっているはずで。もし追いついてしまったら、最悪、皆が見ている前でご対面ってことになるでしょう。

そんなの嫌だ。恥ずかしすぎる。

急にこみ上げてきた焦燥に、ユカの鼓動はどくどくと高鳴りだした。目があっただけで死にそうなのに、これから口をきかねばならないのかと思うと、それだけで頭が爆発してしまいそうだ。

「うー」

限られた時間。他に何かするべきことがあるのだろうか、こんな時に限って何も思いつかない。

どうしよう？ どうすれば？ どんなふう？ と気ばかりあせつて。口からは情けない、意味不明な文句がもれるばかりだった。

しばらくの後。結局何もできないままそわそわしているうちに、廊下の先から二種類の足音が帰ってきた。萌らしいローファアの音と、須賀のスニーカーの音だ。それがバラバラに響いて、胸をきゅうつと絞りあげていく。

いよいよだ。

ユカはぎゅっと拳をにぎり、両足をふんばらせて待った。緊張は限界に達し、全身が心臓になったみたいに脈打っている。

喉が渴いて。そして、ふたりの気配が教室のドアのすぐ先にまできたと思った時だ。

「ユカ、連れてきたよ！」

顔をあげた瞬間、ユカの目に満面の笑みを浮かべた萌が映った。

どちらかといえばクールで、あまり感情を表にださない萌だ。

そんな彼女が瞳を輝かせる様子は、あたかも初めてのおつかいをし終えたちびっ子のように。だからこそユカは、ありがとうと口にしたのだが――しかし。

「よう、子ブタ」

続けて入ってきた男を見たたん、ユカは思わず突拍子もない奇声をあげそうになった。

日に焼けた、茶色い髪。

ぴよんと上を向いてはねた遊び毛。

それと、憎たらしいことをいう、あの声。

あろうことか、萌が腕を引いて連れてきたのは須賀ではなく、コータのヤツで。しかも。

「お前、俺のこと好きなんだって？」

どこでそうなったのか知らないが、壮大な勘違いまでしているらしいのだった。

「な……ちっ……」

ちがう。そんなことあるわけがない。

想定外の人物。しかもとんちんかんな発言に動揺し、ユカは壊れた人形みたいに“ち”から先がでてこなかった。

その間にもコータはご機嫌な様子で

「どうした子ブタ。告白しちゃってもいいんだぞ？」 あーそうか。

……どきどきしちゃって言葉になんないブー！　って感じか」

と、ユカの心境を都合よく解釈し、コータ劇場を上演中だ。

これぞ正真正銘の大ピンチ。絶体絶命の危機である。ユカはみつともなくオタオタし、それこそ藁をもすがる思いで萌を窺った。けれど。

——私は一番カッコいい人を連れてきました。任務完了です！

とでも言いたげな表情で、萌は頬を上気させていて。到底フォローなど望めそうになく、ユカの期待は打ち碎かれた。

そもそも、曖昧な説明をした自分にも非があるのだ。

こんなことになるとは思わなかったにしても、なってしまった責任は負わねばならない。

ユカは覚悟を決め、ごくりとつばを飲み下した。

とにかく妙な誤解をとかなければならない。なるべく、波風をたてないように。

——悪いけど、人違いだから。

これじゃダメだ。こちらから呼び出した手前、ふさわしくない。

——人違いです。お手数をおかけして申し訳ありません。

これはどうだろう。硬すぎるかもしれないけど、丁寧ではあると思う。これでいこうか。

ああでもない、こうでもないと考えた末に導き出したセリフ。

それを、さあいまから口にするぞと意気込んだユカよりも先に、コータが口をひらいた。

「まーその。恥ずかしがるところも可愛いね、ってことで。しょうがねーな、つきあってやるよ」

コータの、寝言とも、宇宙語ともとれる一言。

へへとひとり笑いをもらし、鼻の下を照れくさそうにこするサマは、もはや同じ星の人間とは思われない。

そしてこの思いあがった態度が、引き金をひくユカの背中を押すこととなった。

「ちがうから！」

だって、考えてもみてほしい。

自分のことを子ブタ呼ばわりする無礼者に惚れる女がどこに 있을까。世界中さがしたっているわけがない。

「なんであたしが、あんたみたいなの……。ありえないから！」

アドレナリンが全身からふきだしたせいかな、攻撃的にぶちまけたあ

と息があがった。人間怒っても疲れらしい。――と悠長なことを言っている場合ではない。

「はあ？　なんだそりゃ」

笑顔から一転、地獄の小悪魔みたいに目をすがめたコータは、ぐさま不機嫌そうな声をあげて。ユカとの間合いをつめるかのごとく、じりじりと近寄ってくる。

「あんたみたいな、って。てめー何様だっつの。ブタみたいな顔してやがるくせに」

「な……！」

ユカはふるふると口唇をふるわせ、いまの暴言をこらえた。

子ブタとは何度も呼ばれたけど、ブタは初めてだ。子があるのとないのとは、全然ちがう。

「そーいうのやめてよね！　セクハラなんだから」

ぎゅっと拳をかため、ユカは正義をふりかざした。

自分だってひどい物言いをしているのはわかっているが、ブタは聞き捨てならない。が、コータも大したタマで。

「ぶーちゃんがぶーたれましたかー」

反省するどころか余計にエスカレートし、ユカを小バカにするのだった。ブタの鳴き声まで真似して、いたいけな乙女心を傷つける。

こうなったらもう、許してはおけない。

「あたしはね……、ともかくあんた帰っていいから！」

絶交だとばかりに声を荒げ、ユカは言葉から最後の遠慮を取り払わせた。

それはコータの方も同じらしい。ヤツはムツと歪んだ口元をさらに歪ませ、憎々しく言い放つ。

「呼び出したのはそっちだろうが。子ブタが帰れよ」

しかも。ざまーみやがれてんだ、と勝ち誇った様子で。

「え、ユカ？ あの……」

隣で萌が気をもみ、コータとユカを交互に見ていた。

間違いとはいえ、せつかく萌が連れてきたのだ。本当ならもうちょっと大人な対応をして、穏便に済ませたかったけれど。

「ごめん萌、あたし帰る！」

フォローが下手でごめんなさい、ってことで。シャクだけど、ここは萌にまかせて撤退しよう。

ユカは怒りにふるえながら鞆を掴み、コータのわきをすりぬけた。

そのまま勢いに乗って廊下へと飛び出し、足音荒く学校をあとにする――はすが、教室を出たところでぼすつと誰かの胸にぶちあたって。

「おっと」

直後、ユカははじかれたように顔をあげていた。

だって、その声こそはいつも聞き耳をたて、心の引き出しにしまいこんでいた憧れの人の声だったからだ。

「すっ、すっ」

――須賀君。

勢いあまって飛び込んだ胸の主は、待ち望んでいた須賀、その人であつた。

◇4 残念メール3

彼は、仰天し口ごもったユカを一瞥したあと、すぐに教室へ目を移した。

「いいな、コータ。楽しそうで」

どう見ればそう映るのか謎だけど。須賀は開口一番そう言い、すっとユカのわきを抜け、コータへと歩み寄っていく。

「どこがだ。あいにく、全然楽しくねー」

コータは、へっ、と小学生みたいな悪態をつき、手近な机に腰を下ろした。その上あいた椅子を蹴っ飛ばし、がたんと乱暴な音をたてる。

——なんてこれみよがしな男だ。

ユカは対抗心を刺激され、仕返しよろしく、ふんつと明後日の方を向いた。向いただけじゃなく、荒く鼻息をたてたかもしれない。

大体そんなお互いさま、ってヤツだ。というか、最初から人違いなのだし。

そもそも、好かれているだなんて思うのもずうずうしい。あれだけ嫌がらせをしていながら——と、ユカは積もりに積もった掃除の恨みを思い出し、ぷりぷりと腹を立てた。

でも、まったく都合いいことこの上ない話だけど

「えっとさ、あの……別クラの子だよね？」

ふいに須賀から声をかけられて。その拍子に、ユカの怒りは一瞬にしてかすみの中へと消えていった。

まるで五月の風みたいだ。

須賀から寄せられた声は、爽やかな風があたりを払っていくかのように、負の感情を追いやって。ユカはすべてを忘れ、気付けば身体ごと須賀に向き直っていた。

視線の先には、須賀の端正な顔。自分だけに向けられた微笑がある。

「コートと同じ掃除場所、だっけ？」

「え、はい……」

夢にまでみた初会話。しかも、ユカが存在を知ってくれていた事実
に心が浮きたち、ユカはそう返すのが精一杯だった。

春だというのに手のひらに汗がにじむ。

緊張しすぎて敬語になったことにも気付かず、ユカは無意識のうちに、さっきのやりとりを胸に刻んでいた。

——コートと同じ掃除場所、だっけ？ え、はい……

——コートと同じ掃除場所、だっけ？ え、はい……と。

けれど、時として大きすぎる期待は残酷な仕打ちをもたらす。

「こいつ、乱暴で口悪いけどいいヤツだから。可愛がってやってね」
続いてかけられた声に、ユカの復唱モードはぴたりと止められてしまった。

“可愛がってやってね”とは、一体どう受けとればいいのか。
消化できない言葉が、宙をゆらゆらと漂っている。

「え、どういう……」

「良かったな、コータ」

意味がわからないまま戸惑っているユカをよそに、須賀はコータの背後にまわった。

そうしていたずらっぽい笑い声をあげ、ヤツの背中をつきとばす。
まるで、早く行けよと急かすみたいに。

「痛てーよ、押すなっの」

「お前は頑丈だから平気だろう」
バランスを崩し転がり落ちたコータが文句をいい、須賀が囁きたてる。

そんなやりとりを呆然と見ていたユカは、須賀から重大な勘違いをされていることにやっと気づいた。

これじゃまるで、祝福されているみたいだ。

自分が好きなのはコイツじゃないのに。

配役が入れ替わったドラマのように、望まない方向へ勝手にストーリーが紡がれていく。

どうにかしなければ、彼から誤解されたまままで終わってしまう。

「あの……」

何から切り出せばいいのかわからないうちに、ユカは口をひらいた。

「どう言えば角がたたない？ どうすれば丸く収まる？ と必死に考えを巡らせたが、アイデアは浮かばない。周囲の視線が一斉に向いたのもあいまって、ユカの声は喉から出ることなく胸の中だけであふれかえった。

けれど、それも束の間のことだ。

「立ち話もなんだし、4人で飯でも行かない？ ……その、便乗して自分も萌ちゃんと仲良くしたいというか」

須賀がそう切り出した瞬間、ユカの要領をえない言葉たちは意味の

ないものとなった。

身体中から力が抜けて、あとには空虚な思いが横たわる。突然考える必要のなくなった脳に、萌の漏らした驚きの声がしみた。

「私？」

雰囲気にかかせてつい告ってしまっただけの彼は、決まり悪そうな顔をして後ろ頭を撫でた。

ハハ、と照れをごまかすみたいな笑い声。それが逆に、彼の告白が冗談じゃないことを証明しているように聞こえた。

——そっか。

そう思うと、ユカは足元から沈んでいくような気がした。

そうか、と納得することで、ぱんぱんに張りつめていた気持ちが、じわじわとしぼんでいくような。そんな無気力さだった。

照れてうつむく須賀から、ユカは視線を萌に移した。

彼がその気でも、萌は無関心かもしれない、と。卑怯だけど、それを願う気持ちがあったから。

けれど彼女もまた、須賀と同じくつま先に目を落としていた。

所在なく髪先をいじり、長いまつ毛をまたたかせているのが横顔からはっきりと窺える。

何も聞かなくても、萌がまんざらじゃないことはそれらすべてが代弁していた。

景色を失った放課後の廊下で、ユカはひそやかに失恋をのみこんだ。

泣きたいけど泣けない、微妙な感情と戦っている。必死に。

いっそ全部ぶっちゃけてしまいたい、と思わなかったわけじゃない。

あたしが好きなのは須賀君なんです。コートは人違いなんです、と。

でも、それをしたからといってどうなるというのだろう。彼が萌を好きである以上、どうあがいても同じだ。

むしろ、ふたりの間に水をさす嫌な子、という損な役回りになるだけ。

それがわかっているだけに、ユカは物分りのいい人の役を演じることに決めた。

いつだって、こうだ。

諦めなんてちっともよくないくせに、諦めたふりだけなら簡単にできてしまう。

それを処世術みたいにして、いままでやってきたツケかもしれないけれど。

「ユカ、どうする？」

ニットの袖を引っぱられ、ユカは、萌の行きたそうな、でも困っているような瞳を窺った。奥歯をかみ、隣ではじまろうとしている恋の予感をぐっと堪える。

「あたしは遠慮しとく！ あの、ほら、帰ったら店番する約束しちゃったから。せっかくだから萌は行ってきなよ」

そうして口にした強がりには、残念メールと同じく胸の奥にそっとしまつて。ついてない思い出のひとつとして、やがて朽ちるのを待つのだ。

萌の背中を押した直後、ユカは視線を感じてふっとコートを振り返った。

目があわさったとたん、慌ててずらしたのは、なにか嫌な予感があったからだ。

物言いたげなまなざしに、見透かされてはならない気持ちを読まれた気がした。

◇5 雨はやまない1

活発な梅雨前線の影響で愛媛県中予地方の予報はくもりのち雨。

テレビでは主婦たちのハートを鷲掴みにしている地元テレビ局の新人アナウンサーが、熟女キラークリアな笑顔を見せ、雨の日のお役立ちグッズを紹介している。

「ユカ。あんたテレビ愛媛に行くような仕事こないの？」

同じくハートを盗まれ中な母が、うつとりと画面を見たままと言う。それを横目にユカは、どうせサインをねだるのだろう、と思いながら

「ないよ」

とそっけなく返した。

「まったく、もう。あんた、全然そういう仕事こないじゃない。行くならサインもらえるかと思ったのに」

わざとテレビの前を横切り、洗面所へ向かう。

歩みにしたがいみじみしと廊下が軋むのはユカが重いせいじゃない。築20年のせいだ。多分。

ユカの住む家は松山市郊外。港ちかくの海辺の町で両親がコンビニを経営している。

海岸線沿いにはくたびれかけた遊園地と小さな駅があり、その駅が御用達だ。

学校へ着くまでの所要時間は35分。ぎりぎりまで寝ていたいオトメにとってはつらい時間である。

洗面台の鏡を覗き、ユカは一年ぶりに袖を通した夏服の自分をチェックする。

髪は鎖骨のあたりまで伸ばした栗色のセミロング。行きつけの美容室ですすめられたデジタルパーマが耳から下にゆるくかかっている。

この髪型が太って見えることに一役買っているのは知っているけど、もったいないので当分は我慢するつもりだ。

顔は……赤ちゃんのようなほっぺね、と称される丸顔。

身長と体重のバランスはそれなりでも、痩せて見えない損なタイプだ。

モデル事務所に所属した当時、まだ幼かったユカは、パンフレットやポスターなどで活躍する子役モデルだった。

けれど、それも中学にあがった頃にはぷつとり途切れ。いまでは年間数えるほど——しかも大抵は、その他大勢の端役のひとりとしてしか仕事はまわってこない。

つまり、あれだ。子役としてはふくふくとして可愛かったが、成長と共に物足りなくなった。——という、子役にありがちな没落物語である。

いい加減潮時だとわかつてはいるけど、籍を置いていれば就職の役に立つことだってあるかもしれない。

それに、もしかしたらそのうち、とも。

そう思うと諦めきれず、ユカは名ばかりのモデルとして、事務所にしがみついている状態だった。

制服のリボンを整え、ユカは最後にもう一度鏡から離れて自分を見た。

「ダメだ、頑張って痩せないと」

夏服になると身体のラインが外に出やすい。袖から伸びた自分の腕に、思わずつぶやいていた。



放課後の廊下で思いがけない失恋をしたあの日から2ヶ月。変わったことと言えばこの制服と、放課後の過ごし方。そして萌と須賀の関係くらいなものだろうか。

あれからしばらくの後、ユカは萌を迎えにくのをやめた。

それはうらやましいからとか、見ているのが辛いから——はすこしあるけど、そういう理由ばかりではない。

もとより仕事が忙しい萌だ。恋人とすごせる時間は貴重で、そこへ自分がしゃしゃり出て行くのは気がとがめる。

遠慮だ。大人の配慮ってやつだ。そう自分に言い聞かせ、毎日やり過ごしてきた。

電車の窓から見る外の景色は、海以外のすべてが早足で通りすぎる。家々の屋根も、電信柱も、ガソリンスタンドの看板も、近づいたかと思えば一瞬にして後ろに流れ、灰色の雲を映した海だけが変わらずそこにあった。

このくらいで進めれば楽なものにな——と、ユカはため息をついた。

時間はいつだって平等。早送りも、巻戻しもできない。

ユカにできることといえばせいぜい、早送りボタンのかわりに手当たり次第メールを打つことくらいだ。

そして予定を埋め、どうでもいい話に花を咲かせ、面白くなくても笑っておく。そうしている間に、時計の針がまわるのを期待して。

そんな努力の積み重ねを経て、2ヶ月。春の日の失恋はセンチメンタルな思い出にかわり、暦は夏になった。

衣替えしたことだし心機一転。気持ちまで脱皮したつもりでユカは駅の改札をくぐる。



急にあたりが騒がしくなった。と気づいたのは、南口に出る階段をのぼりきる頃のことだった。

通りから向かってくる人は手をかざして早足に、前に行く人々は一旦立ち止まって傘をひろげ、色とりどりの花を咲かせていく。

愛媛県中予地方の予報は、くもりのち雨。のち雨、がもうきちゃったらしい。

「あ……」

ない。

トートバッグの底をさらい、ユカは傘をもち忘れたことに気づいた。出掛けにバタバタとしたせいで、うっかり置いてきちゃったみたいだ。

後ろから階段をのぼってきた人にぶつかられ、階段のはじに寄る。

邪魔くさそうに見る人の目に、思わず苦笑いだ。

本当に運がわるい。いつもは忘れたりしないのに。

「しょうがない、買うか」

ユカはどうするか思案し、もったいないけど傘を買うことに決めた。

高校は歩いて5分ほどのところだが、しかし雨の中の5分は長い。

うすっぺらい夏服では下着まで透けるにちがいないし、風邪だってひきかねない。

そのようなわけで、ユカは地下街のコンビニ目指してきびすを返した。――が、その時である。

「おい」

ふと、下りかけた足元に影がさしたと思ったとたん、ユカの腕はかっさらわれた。こんな場所で聞くはずのない

「子ブタ」

っていう、憎々しい呼び声と共に。

◇6 雨はやまない2

コートについて、この2ヶ月の変化に加えなかったのは何も変わっていないからだった。

あのあとすぐに掃除場所がかわって——というのは建前で。本当は多分、ユカが避けていたせいだと思う。

会いたくないから極力彼らの校舎には近寄らなかったし、掃除場所も無理を言ってクラスメイトにかわってもらった。顔をあわせづらいのはもちろんだけど、それ以外にも理由はあって。

もし、ヤツが妙な勘違いをしたままだったらどうしよう——と思っていたからだった。

だけど、コートの方だってユカに興味などなかったのだろう。

ヤツが接触してくることはなく、せいぜい全校集会やクラス移動の時に目があうくらいの間柄におさまった。

所詮、校舎もちがえばクラスもちがう他人同士。

萌を迎えに行かなくなれば口をきく機会もなくなるし、実際そうだった。

なので、いま呼ばれた呼び名については相変わらずムカつくけれど、ホンのすこしだけ懐かしみを覚えた。

よう、久しぶりじゃん。とヤツは言った。

こんな空模様でも明るく見える髪。そして同じく、こんなにジメジメした湿度の中でも元気にぴょんと上を向いている遊び毛。

以前より薄着になっただけで、コートはどこも変わらない様子だった。

「子ブタ、案外夏服似合うな。冬服よかずっという女に見えるぞ」

「……」

「あ！ 言っとくけど偶然だからな。ヤダ、あたしったら待ち伏せされた？ ストーカーきもしい、とか勘違いしてんなよ」

「……言っていないじゃん、そんなこと。ていうかその呼び方やめて」

ユカはふいっと顔をそむけ、丁度そこにあった、ヤツには似合わない傘をしげしげと見上げた。

赤い傘。ぽつぽつと雨をはじくビニールの際から、紐がたれていた。

その先っちょでピンク色をした子ブタのマスコットが揺れている。
ご丁寧な“B o o”とまでペイントされて。

これは手の込んだ嫌がらせなのか。それとも偶然なのか。

この傘はヤツの持ち物なのか。特待生専用寮に住んでいるはずのコータが、なぜここに現れたのかを考えているうちに、ヤツは行こうぜくと、肩越しに言って歩き出した。

「……は？」

ユカはあ然として立ち止まったきり、先へ進むコータの背中を見ていた。

だって。行こうぜと、ってどういうことだろう。

まさか、一緒に行こうと誘っているのだろうか。全然親しくしているわけじゃない——というかむしろ、気まずい間柄なのに。

それに、その傘ではふたり入りきれない——なんて思った矢先だ。

「傘ねーんだろ？ 入れてやるよ」

引き返してきたコータに傘をさしかけられて。

親切の押し売りと言えばあんまりだけど、つっぱねるのも気が引けて。ユカは、ヤツの傘に入れてもらうことにしたのだった。



国道は朝の通勤ラッシュで、市の中心部へ向かう車線だけが渋滞していた。

歩道だって同じだ。オフィスビルの建ち並ぶ城下方面への道を、皆黙々と急ぎ足にすぎていく。

聞こえる音といえばエンジン音。タイヤが水たまりをはねる音。クラクション。そして

「朝飯食った後さ、糞する順番に乗り遅れて超腹の調子がわり、なんだよな。寮は不便だぜ、まじで」

コートの下品な喋り声、である。

ユカは周囲から寄せられる冷ややかな目に、そそくさと顔を伏せた。まったく、なんでこんなヤツの傘に入ってしまったのか――と、つくづく後悔だ。

コートといてもろくな目に遭わないのは経験上わかっているし、それ以前に、帰り道でどうせ傘が必要になる。

なぜそんなことに気づかなかったのだろう。今日はどうかしている。

「つか、子ブタ大人しいな。悩みごとか？」

自分が肩身の狭い思いをさせているとは、この男にはどうやら思いつかないらしい。

ユカは足元に目を落としたまま、「……別に」と無愛想に返した。けれど。

「なんだよ、ご機嫌ななめだなく。あー！ わかった。わかつちゃったぞ、アレだな？」

そうしたことによってヤツはうざさを増して。いっそう人の目を集める結果になってしまった。

「もう、うるさいなー」

ユカは悪態をつき、足をはやめた。

とにかく、この歩道橋をわたりきれば学校はすぐそこにある。もうすこしの辛抱でコータとうざったい時間はおわるはずだ。

学校に着けばてるてる坊主でも作って、夕方には雨がಾಗるよう神頼みするしかない。それでもって明日からは傘を忘れないようにしなければ――と、ユカがバッグの肩ひもをかけ直した時のことである。

「あのさ……ちょっと話あるんだ」

歩道橋の上。あとは階段を下りるだけになった地点で、唐突にコータは足を止めた。

「はあ？」

ぞんざいに返したのはわざとだ。どうせくだらないことしか言わないくせに、と思っていたから。

けれど。

「あの時、すまん。俺、本当は気づいてたんだ。子ブタが好きなの

は須賀なんだ、ってこと」

「ちょ、何よいきなり」

予想外。しかも、ユカにとって恥部ともいえる話を切り出され、ユカの声はひどく上擦るものとなった。チラ見していく人の群れに、たまらず身体ごとそっぽを向く。

「知らないふりして悪かったよ」

「やめてってば。変なこと蒸し返さないでよ！」

ユカは口をあいたりとしたりしながら、イライラと視線をさまよわせた。

コータが謝ることなんて、なにもないのだ。あのシチュエーションでは、ああするより他なかったのだから。

それに、終わったことをほじくり返さないでほしい。

謝られたからって結果は変わらない。何一つ変わらないのだから。

本当は今日、それを謝りたくて待ってたんだ。とコータは言った。そして、それともうひとつ――と呟き、顔をあげる。

「週末、競技場に来いよ。こっちが本命の用件！ 自転車のレースあるんだ。須賀も一緒だからさ」

古傷をえぐっておいて勝手なものだ。コータは仕切り直しと言わん

ばかりに、はずみをつけて用件を切り出してきた。言い終えた後は「な？」と顔をのぞき込み、ユカの機嫌を取りにかかる。

――週末、競技場。

競技場と呼ばれる場所は市内にいくつかある。

そのうちのひとつは野球の試合をするグラウンド――いわゆるスタジアムってやつだ。

でも、コートがいうところの競技場はきっとそれじゃないだろう。城山公園にある競輪場にちがいない。

そこまで考えたはいいが、それにしてもこの誘いはデリカシーがなさすぎた。

「行かない」

だって、当たり前じゃないだろうか。

「今更須賀君見にいけるわけじゃないじゃん。あんたバカじゃないの？」

ヤツにしてみれば親切のつもりかもしれないけれど、ユカにとっては憐れみでしかない。

「来て下さい、お願いしますって言うなら考えてあげなくもないけど」

同情されたかと思うと反発心が頭をもたげて、口からは喧嘩腰の文

句しか出てきやしなかった。

こんな感情、きつとコータには伝わらないだろう——とユカは思った。

——「せっかく須賀に会えるチャンスを与えてやったのに、なんだその言い草は」

とか言われて、傘の外に追い出されるかもしれない。

でも、そうするならばいいと、ユカはとっくに諦めていた。

学校はすぐそこだし、ここまで来れば楽勝。お情けをかけてもらってまで、雨宿りしなくて平気なのだから——と。

長い沈黙の間があき、ユカは追い出される前のひと時をぼんやり雨だれを見てすごした。

傘の表面をつーっと雫が滑っていく。小さな粒を巻き込み、徐々にふくらんだ雫がやがて、ぽとんと骨の先から落ちて。

それがユカの肩を湿らせたたん、沈黙は破られたのだ。

「さっきの嘘！」

「え？」

ヤツはいきなり切羽詰まった声をあげ、ユカの手を引き寄せてきた。予想していなかった反応に、ユカはあっけにとられるばかりだ。

嘘って、何が嘘なのか。もしやレースなんかないのに呼んだのだろうか。

だとしたら相当嫌なヤツだな——と思った直後、手にごつごつした感触がして。ふと目を落とすと、ユカは傘の柄を握らされている最中であつた。

もちろん雨はやんでなどいない。それどころか、ますます強まっているような気がする。

なのに、傘いらなの？——と訝ったが否や、ヤツは突然ぶちまけるように吠えたのだった。

「須賀じゃなくて、俺のレースを見に来てくれよ！」

「え？」

コートはどこを見ていいかわからないといったそぶり、決まり悪そうに目を逸らした。

横顔のあたりが強張っているのがわかる。けれどそれは一瞬のこと。

「来てくれよな！ 待ってるから」

「ちょっと！ これ、傘……」

次の瞬間には、ヤツは背を向けていて。言い逃げするみたいに階段を駆け下りていったのだった。

「何あいつ」

ユカはみるみる遠ざかっていく後姿をながめ、呆然とつぶやいた。握らされた傘の柄に残るぬくもりが、じわじわと何かを主張している。足下には置き土産ともいえるかすかな振動が続いて。それが妙な感じだった。

「何あれ」

ユカは、ふたたび声に出して訝った。

それは意識的に、さっきの言動を鼻で笑って。なにあいつ、バカじゃないの？ と冗談にかえてしまいたかったからだ。

けれど、それは思うだけで終わった。

そうしてしまうには、コータのまなざしが真摯すぎて。肌の色まで透けきったヤツの左肩が、笑い話にするのをためらわせたのだ。

はずむ背中が風景に溶けこむのを見届けてから、ユカは灰色の雲を見上げた。

雨降りの空が運ぶすずやかな風が、衣替えしたばかりのスカートを
抜け、傘からぶら下がった子ブタのマスコットをゆらゆらと揺らし
ている。

たぶん、雨はやまない。

第1章End.

第2章につづく。

◇7 夢色のビー玉

第2章 夢色のビー玉

プロモーターの安藤から連絡を受けたのは、その週の木曜日のことだった。

TKプロダクションは登録制で、企業からの依頼を事務所が受け、仲介する形をとっている。そういう意味では派遣会社と何ら変わらないシステムだ。

ちがう点といえば、モデルにはそれぞれプロモーターと呼ばれる担当がついていること。

そして企業が、あらかじめ特定のモデルを指名するケースが多いことだろう。

安藤というこのメールの主は、小学生の頃から仕事をまわしてくれる、いわば担当である。

とはいえ、ユカはここ数年めっきり仕事量が減っているから、彼女にとっては数多く抱える落ちぶれモデルのひとり、という認識かもしれない。

それはともかく。安藤から届くメールの大半は、レッスン希望者への案内といった業務連絡である。

それらは該当者に一斉配信されるもので、特別なものでも何でもない。

だからメールを開く前は、どうせいつもの業務連絡でしょ？ とたかをくくっていたのだけれど。件名を目にした瞬間、ユカはヒヤッと声をあげて、文字通り飛びあがりそうになった。

——安藤 順子

——S b 緊急 撮影の依頼について

——今井ユカ様

——お世話になっております、TKプロダクションの安藤です。急な用件で本日はご連絡いたしました。

——今週の土曜日、明後日ですが、今井さんの都合があうようでしたらエミフルの撮影が……

内容は、まぎれもなく仕事の依頼。

しかも、去年近隣にオープンした巨大ショッピングモールの広告モデル——つまり撮影の仕事。

「きた。いいのがもらえた！」

ユカは携帯を抱きしめて、わー、とかきゃーとか叫びながら、その

あたりの地面をごろごろと転がりたくなった。

だって、久しぶりだったのだ。撮影の仕事自体が。

このところの仕事といえば、JRの構内で禁煙PRのティッシュを配るキャンペーンガール、とか。市のお祭り時にハッピーを着てギャル神輿を担ぐ、とか。そういう、およそモデルらしからぬ仕事ばかりだったから。

撮影なんて、1年半ぶり。

これはもう、何が何でも頑張らないと！——と、ユカは早速その日の晩から水分を控え、顔がむくまないように心がけた。

早寝をしようと思うのに、布団に入ってからゴゾゴゾと落ち着かなくて。手鏡を手に必死に笑顔の練習をし、最後は無理やり目をつぶって羊を数えたほどだ。

けれど。

「もう、嫌だ……」

仕事帰り。市の中心部にそびえる城の堀端で、ユカはひとり肩を落とした。

落ち込んでもらした独り言を、心地よい午後の風が連れていく。

減入った気分をよそに、梅雨の晴れ間が広がる空はどこまでもすみ、すがすがしい週末の日だった。

ユカは手すりにもたれかかり、両腕の中に顔をうずめる。

ステンレス板に鼻の先をこすりつければ、ほのかに太陽の香りがあった。

◇

——『ハイ、これ君の衣装……衣装って変だね、あはは』

スタジオでユカを待ちうけていたエミフル担当者は、そう言ってわら半紙の貼り付けられたラックを手渡してきた。

——『まあとにかく、そっちのフィッティングルームで着替えてきてくれるかな？ ああ、大丈夫だよ。下は布で隠すから。いやゝ助かったよ！ 撮影は絶対に若い子で、と念を押されていたからさ』

“今井ユカさん用 A—1面婦人用肌着”と書かれた半紙の下にあるのは、らくだ色をした肌着。

吸水性が売りの綿100%。

触っただけで安物とわかる中国製婦人用肌着、3枚よりどり980円という超特価商品は、来週末の折り込み広告1面に大きく載せられるらしい。

——『はゝい、よろしくお願いしまゝす！』

とその場は笑顔を作り、明るく受け答えしたユカだけれど。内心穏やかでいられようはなかった。

——まさか、下着？

何かの間違いじゃ？　　と思いたくても、手渡されたラックには名前の書かれたわら半紙が貼られている。

何度読んでも、裏返してみても、結果は変わらなかった。

ユカに与えられた仕事は、下着撮影。

現役高校生でありながら、普通は20代後半の主婦がこづかい稼ぎにする仕事をユカはまわされたわけだ。



事務所に入った当初、ユカの目標はアイドルだった。

正確にいえば、とにかくテレビに出る仕事がしたい。

萌のように、本人より親が必死なケースもあるが、プロダクションを訪れる少女たちの目標は似たり寄ったりである。

けれど、もとより狭き門。それに、熱意だけではどうにもならない。

持って生まれた資質が重要なこの業界では、本人の熱意など大した意味はないのだ。

生まれつき特別であること。それが最重要なのだから。

ユカは夢を諦めるため、事務所にしがみついている気がしていた。自分に見込みがないことを確認し、思い知らされるために。

——あたしはアイドルになりたかったんです。だから事務所に所属しました。

——小学生の頃からレッスンを受け、地味な仕事をコツコツとこなし、オーディションにもチャレンジしました。

——でもダメだった。自分には才能がないのだ。

——太りやすい体質。その上、生まれつきの骨格が災いして華奢に見えない。パツと目を引くような魅力もない。

——萌みたいな子には、敵わないのだ、と。

遅れてスタジオ入りした萌が大勢のスタッフに囲まれ、振袖を着付けられているのを見ると、いっそうそんな気持ちになるのだった。



「辞めようかな……」

ユカは身を起こし、堀端通りを県庁へ向けて歩きだした。

こんな休日の過ごし方は非生産的だ。

いっすすっぱりと事務所も辞めて、はじめをつけたほうがいい。いつまでも未練がましく籍を置いていたのが間違いだっただから。

ユカは足を速め、急きたてるように言い聞かせる。

才能もないのに、時間やお金をさいてレッスンを受けるなど無意味だ。そろそろ現実と向き合わないと。

夢は誰にでも叶えられるほど簡単なものではない。

運命の女神に愛された一部の人だけが手に入れるもの。

その他大勢の人たちは、子供の頃宝物だったラムネ瓶のビー玉みたいに、ときどき心の引き出しから取り出して眺め、ため息をつくのがせいぜいなのだ。

城山公園の緑は、皮肉なほど生命力に満ちていた。

昨日までの雨に洗われた木々の葉が、のどかな昼下がりの陽にきらきらと輝いている。

時折吹いてくる風が木の枝をゆらし、やや色味のうすいあじさいや遊歩道の上にまだらな影を落としていた。

一度、辞める方向に心がゆらげば、急に胸の中が空虚になった気がした。

石畳の歩道に、足音がカツカツと鳴る。歩みにあわせて動く影が選挙ポスターの上をゆらめいて、ああ、もう衆議院選挙なんだ、とユカは思った。

また隣の家のおばちゃんが、どこそこ党に入れてよ、と頼みにくるのかな。

そしてうちの両親は乞われるがままに一票入れてくるのだろうか――などなど。

そんなことを思っている間にも、母とのやりとりがずっと頭から離れなかった。

頑張ってね！　って。いつも楽しみにしているイケメンアナウンサーのローカルニュース中だったのに、それを放り出して見送ってくれた母に、帰ってどう話せばいいのだろう――と。

ちょうど、その時だった。

わつとどよめいた歓声に、ユカは思考を中断されて顔をあげた。

「全国高等学校総合体育大会県予選会場……」

選挙ポスターの隣に、もうひとつ真新しい看板が針金でくくりつけられている。

思わず声に出して読んだ文字は、看板にめいっぱい大きく書かれ、赤色の花紙で作られた花がぐるりを彩っていた。

読み終えたあとふたたびあがった歓声は、堀の内側、城山公園の方から流れてくる。

人のたくさんいる空気や、そこにある熱気を風が運んでくる。

瞬間、――『待ってるから』と言った、コートタの声が脳裏に浮かんで。

ああ、そうか。とユカはまなざしをあげた。

◇8 フェンス越しのブルー1

城山公園の敷地にはテニスコートや競輪場などの施設が点在している。

とはいえ、先年、市の郊外に最新設備の中央公園が新設されてからというもの、この利用者は激減中だ。

そういうわけで日頃はひっそりとした佇まいなのだけど、今日は応援にかけつけた生徒や保護者たちによって、期間限定の復活祭みにいに華やいでいた。

通りの右手では、テニスの試合。

ラインの内側にレモン色のボールがつきささるたび、応援席からさまざまな声があがる。その白熱した戦いぶりを金網越しに見ながら、ユカは競輪場へ向かった。

やがて着いた灰色の建物には、来月別の会場であるらしいG1レースのポスターが壁づたいに貼られていた。

さわやかなテニスコートから一転、殺伐としたムードが感じられるのは、ひとえに、燃えよ闘魂！ と殴り書きされたこのキャッチコピーのせいだ。

よく考えてみたら、自転車競技は賭け事の対象にもなるスポーツ。だから独特の雰囲気があるのだろう。応援席はこちらの順に従い狭

い、階段をいくと、のぼりきった先でユカの視界は突然ひらけた。

「まぶし……」

あまりにも空が眩しくて、ユカは手のひらで日差しを遮り、目を細めた。

青空の下、整然と広がるバンクは、内側にむけて深くなるお椀型をしている。

中心部分は、刈り込まれた緑の芝生。

ぐらりと囲むスタンドは、球場よりもコースが近く感じられる。フエンスからユカの立つ出口に向けて穏やかな風が吹いていた。

ユカは通路側のあいた席に腰をおろし、派手な色合いのユニフォームに身をかためた競技中の選手たちを見下ろした。

ヘルメットとサングラスのせいで、どの選手たちが同校なのかわからない。

背中に校名が書かれているのだろうけど、それはフェンスの際まで近寄らないと読めそうになかった。

むしろその方がいい——とユカはいちご飴のフィルムを剥がしだした。

はなから応援する気などなかったのだ。

家に帰りづらいから立ち寄っただけであって、本音を言えば、こんなマイナー競技に興味などないのだから。

——と、そんなことを考えつつ飴玉を口に放り込んだところで、どうやら競技中だったレースが終わったらしい。

「続いて個人男子1kmタイムトライアル最終組を行います」

ばらばらと拍手がおこったのに続き、場内にアナウンスが流れて、つぎの組の準備に入ったバンクは動きがあわただしくなった。

ラインに置かれた器具はスターティングマシンだろうか。コーチらしき人がレーサーに装着しているのが見えた。

選手は手前側にひとり。反対側のセンターラインにもひとり待機している。

どうやら陸上のように並んで競争するのではなく、逆サイドから互いに走りタイムを競うようだ。

そんな様子を、ふくんと見物していたユカは、ふと視界に違和感を覚えて目を凝らした。——と、直後、違和感の正体に気がついて。あつと声をあげそうになり、その拍子に飴玉を飲み込みかけた。

青いレーサー。

掃除時間に飽きるほど見せられたVTRと同じ色のそれは、コートタのもの——のように思える。

ということは——と思いめぐらした時に、折しも選手を紹介するアナウンスが流れだした。

「選手の紹介をいたします。ホーム側、須賀隆弘君」

とたんにわつとあがった歓声に、ユカは、え？　と目を見開いた。

気づかなかったけれど、どうやら反対側のラインに立つ選手は須賀のようだ。

スタンドからの拍手に礼儀正しく会釈する仕草は、言われてみればそんな気がする。

スマートで、落ち着き払った立ち居振る舞い。

教室で目で追っていた姿にユニフォームを着せれば——間違いない。赤いレーサーの隣に立つのは須賀だ。

それにしてもまさか——とユカは唾をのみ、手前のレーサーへと目を移した。

まさか、コータは須賀と対戦するのだろうか。

須賀と当たったかもしれないことを不憫に思うのは、もちろん、須賀が特別だからだ。

自転車部が創設された折、どうしても欲しい人材だ、とスカウトされたのが彼であるのは、同じ高校の子なら誰でも知っていることだったから。

けれど、無情にも予感は的中して。

「続いてバック側、越智康太君」

読みあげられた名前を聞いた瞬間、ユカは、ため息がもれるのを禁じえなかった。

周囲からわいた拍手にあわせて手を打ち合わせるものの、すでにレースは終わったような気分だ。

よりにもよって須賀と競い合うなんて。コートはくじ運が悪すぎる。

観客も似た感情をもっているのか、「おい、頑張れよ!」と、須賀のときにはなかった野次がバラバラとあがっていた。

須賀は将来を嘱望されている選手だ。いくら頑張ったところで勝てるはずがない。

その差はもしかすると、萌とユカの差より大きいかもしれないのに――と、ユカが野次を飛ばす客に目を移した時のことだ。

「子ブター!!」

「え!？」

バンクから吹く風が信じられない呼び声を運び、ユカはぎょっとして振り返った。

目がとらえたのは、青いレーサー。それにまたがり、まっすぐにこちらを見上げるコートだ。

ヤツはサングラスを首までずらし、目があったとたんに顔全体で笑った。周囲の目も顧みず、子ブター！ と繰り返す声を張り上げている。

しかも。よせばいいのに、というかなんというか。

「ぜってー勝つからなーっ！」

コータは手袋をはめた手で口を囲い、しなくてもいい宣言を高らかにのたまって。ユカだけにむけて、めいっばい両手を振ってくるのだった。

「なに言ってるの、あいつ」

コータの派手なアクションに誘われてバラバラと振り返るいくつもの顔があった。

なんで自分が居づらい思いをしなきゃならないのか——とうんざりするが、そうもいってはいられない。

ユカは組んでいた脚を行儀よくなおし、そそくさと顔を伏せて人の目をやり過ごした。なのに。

「あんた、彼女だろ？ 前まで行って応援してやんなよ」

げに恐ろしきは判官^{はんがん}びいき、とでも言おうか。

「……は？」

「相手の選手、どれくらい強いんだよ！ フェンスまで行ってあげな
って。可哀想じゃないか」

須賀が特別な選手であることが、コートに同情票を集めたのだろう。
頑張れよと野次を飛ばしたおじさんから席をたつよう急きたてられ、
ユカは辟易しながら声をだした。

「ちがっ。あ、あたしは……」

けれど、反論すべく顔をあげた時には時すでに遅し。

誤解です！ あの人は他人なんです！ と否定しようにも、そうさ
せない雰囲気ができあがっていて。知るもんかと居直るだなんてこ
と、外面のいいユカにはできそうにないのだった。

まったく、自分のお人好しぶりが嫌になる。

あいつのせいで——とぶつぶつ文句をたれながら席を立ち、ユカは
階段を下りてフェンスのきわに歩み寄った。

間近まで応援にかけつけたユカに、コートも驚いているのだろう。
口をぽかんとあけて、信じられないとでもいった顔をしてこちらを
見ていた。

そりゃそうだ。

応援にいく、と約束したわけじゃない。

それどころか、お願いしますと言うなら考えてやる、だなんて上から目線で言い放ったくらいなのだから。

だから、ついふくれつつらを作ったけれど。でも、直後ばあっと明るくなったヤツの笑顔が、あまりに無邪気だから、なんだか憎めなくなっちゃって。

その笑顔につられて、ユカもフェンス越しにうなずき返したのだった。

やがてスターターの合図がかかり、電光掲示板に刻まれたデジタルが1秒ごとに減りはじめた。

場内は水を打ったような静寂に満ち、否が応にも緊張は高まってく。

ユカはカウントダウンを目で追い、スタート3秒前になったところで、ラインにつくコータの横顔へ視線をずらした。

――3

――2

――1

バーンと号砲が鳴った瞬間、ぎりぎりまでせき止めていた川の流れを放出したかのように選手たちは飛び出した。

ペダルを力いっぱい踏みおろし、200メートルを走ったところでやっとサドルに腰をおろす。そのまま加速をつけてコーナーをまわり、およそ自転車とは思われないスピードで駆け抜けていく。

気がつけばユカはまばたきをするのも忘れ、握りあわせた手を顎に当て、風をつき破っていくコーナーを息つめて見ていた。

フェンスの内側で巻き起こった青い風が、前髪をヒュンとさらっていく。あっという間に直線をすぎ、つぎのコーナーへとまわっていく。

そして1分をほんのすこしまわったところ。上体をかがめた選手たちは怒涛の勢いでフィニッシュになだれこんだ。

——どっち？ どっちが勝ったのだろう。

思わずすがりついたフェンスがカシャンと音をたてる。

レースを追うのに夢中で、須賀との差をつかめなかったユカは、結果を求めて頭上の電光掲示板に目を細めた。

◇9 フェンス越しのブルー2

1' 14" 056.

どっちが？ と目をしばたかせ、掲示板に表示された結果の意味をのみこむよりも先に、応援席からどっと歓声がわきおこった。

掲示板にはレコードの文字。勝ったのはホーム側、大本命の須賀だ。

続いて表示されたデジタルは1' 14" 058.

「あゝ、惜しかったねえ彼氏」

隣に立つ保護者らしい人から親しげに肩を叩かれたけれど。ユカはまだ放心状態から抜け切れず、掲示板のタイムから目を逸らせなかった。

たった、0' 002秒のちがい。

コータは、それだけの差で負けたのだった。

ユカは掲示板から視線をずらし、中央の芝生に寝転んだままのコータを見つめた。

ヤツはヘルメットとサングラスを取り、苦しげに肩で息をしている。頭だけをわずかにあげて、掲示板にともる0' 002秒の差を見つめていた。

「彼氏よく頑張ったじゃないか、え？　順位は負けたけどね、タイムがいいから四国大会確定だよ」

「あ……、そうなんですか」

ふたたび声をかけられ、ユカは曖昧に笑って返した。

そのまま背中を向けてスタンドの階段をのぼる。なんとも形容しがたい感情に、口の中に残っていた飴のかけらをかみ砕く。

ユカは、これは一体どういう気持ちなのだろうか、胸にある思いをたぐりよせた。

自分は、悔しいのだろうか。

わからないけど、なにかずんとした重みがお腹の底にあるような気がした。

勝つといったくせに負けたじゃないか、とあげ足をとりたいわけじゃない。

そうじゃなくて――と、ユカは元いた席につき、改めてバンクへとまなざしを向けた。

中央の芝生では、ようやく起き上ったコートが、仲間たちの待つゲートへと歩きだしていた。

向かう先には一足先にバンクを出た須賀が待っている。互いに距離

をつめ、肩を叩きあって――

「あたし……」

その姿を見てユカは、気持ちの変化にやっと気づいた。

自分は、コータに勝ってほしかったのだ。たとえ相手が須賀であっても。

あれほど好きだった須賀の勝利を願わないなんて、自分でも信じられないけれど。レース中に須賀を一度も見なかったことが、それを証明しているように思えた。

ユカは、コータと健闘を讃えあう須賀に目をとめた。

まぶしい笑顔や、肩から引っ掛けたジャージ。そのどれもに憧れていた。

けれど――と、ユカはポーチの紐をぎゅっと握り、自分の胸にある気持ちが嘘じゃないことを確かめる。

恋は終わったのだ。強がって、とか、無理やりに、ではなく。

いまユカは、須賀への一方的な片思いから卒業できたのを実感していた。

須賀の笑顔を目にしても、レースがはじまっても、以前のようにときめかない。そんな自分を今日見つけたのだった。



競技場の外は帰り支度に追われる選手たちでごった返していた。

分解された自転車を運ぶワゴンが大きく口をあけて、だだっぴろい車の中をさらしている。そこへ選手たちが、軽々と抱えた自転車を積んでいる。

こうして大柄な選手の中にまじると、須賀もコートも標準サイズだ。彼らは重たげなバッグを担ぎ、トランクの隙間に荷物を詰め込んでいた。

このまま何も告げず帰ろうかとも思ったけれど、やっぱり一言声をかけたくてユカは足を止めた。

せっかく観戦したのだ。それに、一応は誘われてきたのだし。

勝ち負けはともかく、つぎの大会へコマをすすめたのだからおめでとうとねぎらっても変じゃないと思う。

おめでとう、格好良かったよ。

このくらいが当たり障りなくていい。

ユカは作業にいそしむ彼らの手があくタイミングを見計らい、いまだ、と一歩前へでた。

けれど。

「須賀君！」

ツイてない日は、とことんこんなものだ。

中途半端に足を踏み出したとたん、別の誰かの声が響いて。その声に行く手を阻まれ、ユカはふたたび足を止めることとなった。

え？　と思わず目をみはり、声の方を振り返ってすぐ見えたのは手を振る萌。テニスコートの前を駆け抜けて、萌が、須賀めがけて飛び込んできたのだった。

まさか、本町のスタジオからここまで走ってきたのだろうか。ユカは、頬を上気させた萌の横顔をあ然として見た。

額に汗をびっしりと浮かばせて、萌は肩を大きく喘がせている。須賀のユニフォームをつかみ、うつむいて荒い息を整えていた。

「ごめんなさい……撮影が、長引いちゃって」

苦しい声であっても、萌は季節はずれの春風みたいな甘やかさだった。

いたいけなヒロインの登場に、空気の色合いが変わっていくような華やかな雰囲気、灰色の競輪場までもピンク色に塗るかえっていくように思えた。

「うぜー、あっちでやれよ！」

ドラマのワンシーンみたいな光景に、不意をつかれたチームメイトたちがやがて口々に冷やかしの声をあげはじめた。

やっかみ混じりの祝福は、言葉ほど荒っぽくはない。

受け流す須賀も嬉しそうだ。頬をほころばせ、冗談を冗談でやり返している。

場は完全に萌と須賀を中心に、わきあいあいとした明るいムードに満たされていた。

こうなると、ユカとしてはかけるべき声を飲み下すしかない。

お似合いなふたりの姿を見てしまったから、というわけじゃないのだ。

声をかければせつかくのムードを壊してしまいそうだし。タイミングを失ったことでもあるから、引き返す方が無難に思えたわけだ。

けれど。

「あら？ ユカ来てたの？」

「え、ああ……。うん、すこし寄っただけ」

話しかけるつもりで前へでていたことが、ここにきて裏目にでる。

人知れず姿をくramsすつもりでいたのに、見咎められて。ユカは返答に困って、愛想笑いを顔に貼りつかせた。

2ヶ月前のあの日。

あの場では完全に人違いしていた萌だけれど、いまは多分誤解に気づいているだろう、とユカは思っていた。

多分、というのは、お互いその件には触れないでいたからだ。終わったことをほじくりかえして、友情を壊したくなかったから。

でも、その思いやりが災いしたのだろう。

須賀のユニフォームを掴む指に、萌が力を込めたのが皺の寄り具合からわかった。

パツと見はいつもとかわらなく見えるけれど、気持ちちは別のようなうだ。

“何しに来たの？”と言いたげなまなざしが、暗に警戒しているのを知らせていた。

萌の様子を不審に感じたのか、須賀もこっちに顔を向ける。

一瞬だけ目があつた彼はふいつと視線を逸らし、しがみつく萌の頭に手のひらを置く。そのまま彼女の髪を愛しげに撫でていつて。

これではまるで——とユカは居心地の悪さに苦笑するしかなかった。

まるで、萌がいないのを見計らって須賀の応援をしにきたと疑われているみたいだ。

そんなつもりじゃなかったのに。

帰るタイミングを失って、ユカはどうしたらいいかわからなくな
った。

ちょっと考えれば、萌が応援に来るかもしれないことくらいわかっ
たのに。バカだ。わざわざ誤解を招いて、身の置き所をなくしてし
まうなんて。

今更後悔しても遅いけれど、それでも後悔せずにはいられずユカは
口唇をかんだ。

とにかく、とにかくこの場を切り抜きたい。

なにか適当な嘘でもついて退散できないものか。

そのきっかけを探してユカが辺りを見回したのと、奥から声が聞こ
えたのがほぼ同時だった。

「子ブタ！」

瞬間、え？ と顔を戻したユカの視線は、こちらを直視する視線に
絡めとられた。

「子ブタ、帰ろうぜー」

繰り返し呼ぶ声は、驚き顔した萌のわきをすりぬけてくる。まるで
約束でもしていたかのようなそぶり、ユカをうながして。

このあたりで、どうやら助け舟をだされたらしいことに気づいたの

だけど。

「お？ 今日はいつもあり痩せて見えるじゃん」

ブタ、ブタ、と連呼する呼び声や軽口のせいで、ユカはその場を離れたあとも素直になれず、ありがとうとは言えなかったのだった。

◇10 幸せの黄色い風船1

土曜日の夕方とあって、地元の最寄り駅周辺は人通りが多かった。

ちょうど近所の遊園地が閉園時間を迎えたから、中から吐き出された人々が家路に向かうのとバッティングしたのだろう。過ぎゆく人々の顔は一樣に幸せそうで、足取りも軽やかである。

そういった人の波に逆らって、ふたりは海岸沿いの道を歩いていた。ふたり、というのはつまり、競技場をでたあとコータが家まで送ってくれているわけだが。

しかし、やはりコータはコータである。

競技場から連れ出してくれた時は、ヤツが天使のように見えたものだが、それは一瞬の幻。

下品、かつ自己中心的な話にうんざりするユカの隣で、コータは相変わらずわが道を爆走中なのだった。

「ペダリングがどうたらこうたら、アタリがでてなんちゃらんちゃらん……って、子ブタも思うだろ?」

思うだろ? なんて同意を求められても、専門的すぎてわかるわけがない。

とはいえ、面倒くさがって無視していると一層うつとうしい結果になる。

「シカトかよ、ブー子。それともアレか？ ……やだ。ユニフォーム姿のコータ君はカッコいいブー、って照れてんのか？」

いっそ遊園地から流れるほたるの光の曲にあわせて追いかえせたらいいのに——と、願わずにはいられない。ユカはため息をつき口をひらいた。

「そんなわけないじゃん。っていうか、自転車の話されてもわからないし」

「ああそうか、そりゃ失敬」

どうせ口で言うほど反省していないに違いない——と、思ったら案の定だ。コータは口の端をニヤニヤとあげ両手を頭の後ろで組んでいる。放っておけば口笛でも吹きだしかねない機嫌の良さで、それが余計に腹立たしいのだった。

ユカは眉間にしわをよせ、コータを下から上へぎろりと睨んだ。

スクールカラーでもある、青のユニフォーム。

ぴったりと身体にはりつくラインは、風の抵抗を抑えるためだろうか。競技場で見れば違和感がないのに、こうして外を歩くとやはり目立つ。

「あんたさ、もう帰れば？ その格好浮きまくりじゃん。体型がモ

口わかりで気持ち悪い」

ユカは仕返しとばかりに嫌味な言い方をし、ふふんと鼻を鳴らした。さつきから道行く人がちらちら見ているのを、本人だってわかっているはず。気持ち悪いと断じてしまうことで、ヤツが引き返せばいい——と思っていたのだ。

なのに。

「うお、じろじろ見てんじゃねーよ。スケベブー子め！」

ヤツは引き返すどころか、立ち止まって悪目立ちをし、しかも

「やっべー、焦った。ピー！ の形が浮き出てんのかと思ったじゃねーかよ」

セキララな禁止ワードを口にして、レーザーパンツの股のあたりをこそそこそとまさぐりだしたのだった。

「やめてよ、バカ！ あんた道端で何言ってるのよ」

「あ？ だってお前。これ、下ふるちんだから気になるじゃねーか」

「なんでパンツ穿かないのよ！ いやらしい」

「そういうユニフォームなんだよ！ 穿いちゃいけねーんだからしようがないだろが」

「じゃあさっさと着替えればいいじゃん」

なんて破廉恥なヤツ——と、ユカは目をすがめ、口をゆがめた。

通行人の目もわきまえず恥ずかしい言動をして。これではまるで、一緒にいるユカまで同類だと思われそうじゃないか。

ユカはきりきりと目をつりあげ、尚もユニフォームを気にしているコータにからむような口ぶりで言った。

「あたし、もう帰るから！ 家そこだし。じゃーね！」

「え！？ おい、ちょ……」

コータはまだなにか言っていたけど、そんなの、知ったことではない。

これ以上一緒にいるのはごめんだ——とばかりに手を振り、家へと続く海岸沿いの道をひとり歩きだした。



視界は、眩しいばかりのオレンジだった。

沈みかけの太陽が海岸沿いの道の先までを染めて、建ち並ぶ家々の窓ガラスをめいっばいに輝かせている。

取り込み忘れのシートが風にゆれて。落ちた影がゆるやかに波打っていた。

ユカは、風にさらわれた髪を耳にかけた。

するとどこかの家の布団を叩く音や、切れ切れに流れてくる選挙カーの宣伝マイクが、急にボリュームをあげた気がした。

何でもない、ありふれた日常。

そのかけらが、そこかしこに転がっていた。

ユカはふうつと黄昏の息をつき、これから先のことを思った。

現実逃避の時間は終わったのだ。

家には報告を楽しみに待っている母がいて、撮影を終えた自分のために食卓には好物が並んでいるのだろう。

どんな広告に、どんな服を着て、いつ載るの？ とか。きっと、そんな当たり前の好奇心を抱きしめて待っている。

その母をどうやって――

「どうやってはぐらかそうかな……」

ユカはつぶやき声を追いかけて顔をあげた。

遠くに見えている24Hの灯り。ユカの両親が経営しているコンビニは、すぐそこまで迫っている。

いっそ何も告げないで、事務所を辞めてから事後報告しちゃいけないだろうか。

どうせ来週末には新聞にチラシが入るのだ。

そこに載った肌着姿のユカを見れば、母だってわかってくれるのではないか。

そんなことを考えていたユカの頭には、もうすっかりコータのことなどなくて。無防備だった腕を突然掴まれた衝撃で、中途半端に足をあげていたユカは、のけぞってすっ転びそうになった。

反射的に体勢を整えたものの、危ないかぎりだ。

「何すんの、あんた……」

びっくりさせないでよ、もう！ とぐちぐち言い、ユカはキッと振り仰いだ。

西日が眩しすぎるせいで、自然と眉間に皺が寄る。コータの顔と、腕を掴んでいるずうずうしい手を交互にながめ、ユカはふんつと自分の腕を取り戻した。

手を額にかざし、「何か用〜？」と、わざとふてぶてしく言い放つ。

陽射しをさえぎれば、目に入る風景は急にやさしいものとなった。

紅茶色に染まる横長の世界。

右手には夕陽を照りかえす海が広がり、左手には一車線の道路。そ

の奥に民家が建ち並んでいる。そして――ユカはコータの肩越しに見える集団に目を凝らした。

なんだろう、あの人だかりは。

「あのさ、今日、来てくれてありがとな」

やっと口を開いたコータの物言いは、いつになく謙虚で落ち着いていた。

珍しい。こいつでも感謝することがあったなんて。

「ふんふん」

ユカは内心、そういう話はさっきしてほしかったです、と思いながらいい加減に返事し、奥の集団を注視した。どうやら彼らは、こちらへ近づいてくるみたいだ。

――『……は民……党公認……赤……郎でござ……す』

「来てくれないだろうと思ってたから、ホント、嬉しかった」

「あっそ」

コータのまどろっこしい話し方に、ユカはそっけなく返した。

ヤツは考えながら話しているのか、それとも言葉を選んでいるのか、途中で何度も間を置いて。そのせいで一言が長引き、聞き役のユカとしては余計に面倒くさくなるのだ。

だって、それどころじゃない。

向かってくる一団は動物の着ぐるみを着た人や風船を手にした人などもいて。パツと見、パレードみたいな華やかさなのだから。

——『松山市の皆……ま！ 最後の、最後のお願いにやって……ました』

やっとわかった。選挙だ——と、ユカは身を乗り出し、近づいてくる集団をつぶさに見た。

候補者はTシャツにハーフパンツという軽装で、肩からタスキのようなものを掛けている。

それに添う選挙カーは、人の走るスピードにあわせてゆっくりと走行しているようだ。

「子ブタが……たお陰で、自己ベ……トでたんだ」

——『赤松……郎でございます！ 民主自由党公認、赤松を、何卒よろしくお願い……ます！』

「そっか」

ところどころ声をひっくり返しながら、悲痛なばかりのアナウンスが続いている。

近づくにつれ識別できるようになったタスキには、民主自由党公認
赤松一郎 と大きく書かれていて。タスキの上下を彩る黄色の花
飾りが、足取りにあわせてゆれていた。

——『どうか、どうか、皆様』

「……さ、……ブタが、もし来て……れたら……ようと思……」

——『松山市の皆様！ 赤松を男にしてやってください！！ この
通り、この通りでございます！』

「へえ」

一団が、いよいよふたりのすぐ傍まで近づいていた。

マイクを数本まとめて握るウグイス嬢の懇願が、耳をつんざくよう
な音量でスピーカーから流れている。

候補者の赤松氏はマラソンの息苦しさを顔には出さず、にこやかに
手を振って。エネルギーな若さを、そうすることでアピールし
ているのかもしれない。

——どうしよう、手を振ったほうがいいのだろうか。投票できる年
齢じゃないけれど。

八方美人ならお手の物だ。

ユカは営業用の愛想笑いを浮かべ、赤松氏に向かって手をあげた。

——『皆様のご支援、赤松、決して無駄にはいたしませんっ』

「……きだ！」

——『ふんどしをひき締めなおし、日々精進、日々精進を重ねていく所存にございますっ！』

「つき……って……！」

——『男一匹赤松でございます！ 赤松一郎、地方の声をきつと中央に届けてみせます！』

ふたりのわきを、選挙カーが通りすぎていく。

一瞬だけ立ち止まった赤松氏が、お願いします！ と両手を差し出し、ユカの手を力強く握っていった。

更に、背後をかためるジャージ姿の若い女性から、よろしくお願いしま〜す！ と黄色の風船を手渡されて。ユカはちよつと興奮してしまった。

風船なんでもらったの、久しぶりだ。応援してよかった。

選挙カーの窓から身を乗り出したウグイス嬢が、こちらに頭を下げている。つられてユカも頭をさげ、小さく手を振り返した。

——『民主……由党公認、赤……郎に、清き一票……お願い……ま

す
』

やがて選挙カーから手を振る人も遠ざかり、ユカは手を振るのをやめ、風船の糸を指に巻いた。

空中にぽっかりと浮いた風船は、何やらしあわせな気持ちを運んでくる。

ユカは頬をゆるませ、黄色の風船からようやくコートへと視線を戻した。

◇11 幸せの黄色い風船2

盛大な夕陽を背負い、ヤツはそこで棒立ちになっていた。

いつものごとく遊び毛がぴょんと上を向いているから、間抜け面でつつ立っていると余計にバカっぽく見える。

でも、正直にそれを口にすればきつと怒るだろうから、ユカは黙ったまま、ふたたび風船に視線を戻した。

糸を手繰り、顔の高さまで風船を下ろす。

表面に頬を寄せればつんとゴムの臭いが鼻について。その臭いが遠い日のことをユカに思い出させた。

夏の縁日。母にねだって買ってもらった風船は、ユカの手を離れ天高くのぼっていった。

大切なものは手を離しちゃダメよ。よそ見しているうちに、どこかへ飛んでいってしまうよ、とその時教えられたのを覚えている。

あの風船はどこへ飛んでいったのか。

「あゝーっ、くそ」

「……！」

いきなりだった。

ノスタルジックな思い出に浸っていたユカは、突然の獣じみた咆哮に不意をつかれ身をすくめた。一体何だというのだこの男は。

コータは尚も「あゝっ」とか「もーっ」などと雄叫びをあげ、両手でガシガシと髪をかき混ぜている。

そのせいでヤツのヘアスタイルは台風10号でも通りすぎてったかのようにぼっさぼさだ。あっちこっちにはねた髪がまともに西日を食らい、髪全体が発火しそうなオレンジ色に――まさしく燃えあがったように見えた。

「なんでだよっ！」

全身から搾りだすみたいにして吠え、コータは荒い息をついた。身体全体に尖ったオーラをみなぎらせ、ちよつと触れれば怪我しそうなくらいにいきり立っている。

それを、目をまん丸にしてユカは見ていた。なに怒ってんの？　この人、といった具合で。

「なに……」

「選挙どーだっていいじゃんかよ！　てめー選挙権ねーだろが。あゝ？」

「だって」

「アホ面さげて手振り返しやがって。シカトしてんじゃねーぞ、このぶたぶた子ブタめがっ」

一体何をそんなに激昂しているんだか、と反論しようにも、ヤツは暇を与えない。らりるろろはレロレロ口調だし、眉間にぶっとい縦皺は入っているしで、ひどく野蠻だ。

ユカがちょっと口を挟もうものなら、即座に上からかぶせてがなり、一方的にいじめ倒すのだった。

またブタって言われた。しかもいっぱい。風船もらっただけなのに。

ユカはふるふると口唇をふるわせ、風船の糸をぎゅっと握りしめる。さっきまで心にあった優しい、懐かしい感傷は、コータのせいで木っ端微塵に砕け散った。

「ちょっと、ブタって大声で言わないでよ！　なんで怒鳴るの？」

「てめーが話そっちのけで手振ってるからだが」

「そんなの、あんたの声が小さいからじゃん。選挙カーに負けない大声で話せば良かったのに」

「はあ？　なんだと？　お前」

コータは目をすがめ、チンピラみたいにすごむ。

事情を知らない人が見れば、いたいけなユカが町のごろつきに脅されている、と99.9%勘違いするだろう。通報されかねないあや

うさである。

ユカは目を逸らしてそっぽを向き、夕空に点滅する飛行機のライトを眺めた。

飛行機は北の方向へと強い光をチカチカ放ちながら飛んでいく。

昼と夜が入れ替わるこの時間は、一番星と飛行機の灯りが、どっちがどっちなのかわかりづらい。

それを見上げるユカのそばで、コータがへっと舌打ちするのが聞こえた。

とことん、これみよがしな男だ。

ちょっとばかり話を聞き損ねたくらいでわざとらしい。——そう、心の中でユカがぼやいた時だった。

「すううきいいD A A A A！」

ユカの耳を乱暴に引っ張って、鼓膜がわれるかと思うほどの大声を
はりあげコータが叫んだ。

ユカは目をばってんにさせて、キーンと脳天までゆれる衝撃に身を
すくませる。

耳を手のひらでこすり、どうやら壊れていないらしいことを確かめ、ホッとした矢先。

「聞こえたか？」

腕組みしたコータは、鬼の首でもとったみたいに小鼻をふくらませて。ざまーみろバーカ、とのたまったのだった。

◇

風が吹いていた。

夏を予感させる海風がコータのぼさぼさの髪をさらい、片側に撫でている。

飛行機のチカチカがふたりの上空を抜けて。その一瞬だけ、地を震わせるような轟音が響いた。

さっきまで威勢よく悪態をついていたコータは、いまでは視線を逸らしたいのを意地だけで堪えているような顔をして。口で言うほど自信満々じゃないらしいのが、見上げているユカにもひしひしと伝わっていた。

小学生レベルの告白だった。

けれどそれだけに衝撃は大きく、コータの告白はユカの胸のど真ん中をストレートに刺し貫いた。

ヤツのせいでいろんなものが一気に変わったように見えるのに。どうやらそれは気のせいみたいだ、とユカは思った。

海岸沿いの道には相変わらず車が行きかい、取り込み忘れのシートもかわらず同じ場所ではためいている。

変化したことといえば、夕闇の深さと風の温度。

そしてふたりの間に横たわる空気くらいなものだ。

「うそ」

ユカはそう口にしたつきり、あとの言葉が続かなかった。

嘘ばかり、あんなにけなしていたくせに。そう言おうにも、なんだか茶化せない雰囲気があるにはあった。

息苦しい、というか。どこか狭い場所へと追い込まれたような気持ちになる。

それはひとえに、無礼で、いけすかないこの男が、いつになく真剣そうな顔つきをしていたからだ。

「嘘なわけねーよ」

ふたたび訪れた沈黙を、先に破ったのはコータの方だった。

ヤツは余裕なさそうに眉を寄せ、必死な目でユカを見ていた。

冗談がふくまれていない分だけ、口調もやたらぶっきらぼうだ。その様子はあの雨の日、赤い傘を握らせてきた時とだぶって見えた。

「今日、もし子ブタが来てくれたら。そしてもしも記録が出せたら、告るつもりだったんだ」

コータは一言ずつ、区切るようにして声をだす。

それがやたらと言葉の重みを強調しているようで。ユカはコータが射る矢の、的にでもなっているような気がした。

「ヒトメ惚れでした！」

とコータは言った。

「たとえば子ブタが須賀を好きでも、聞いてほしかったんだ」

遠い海岸線から射す最後の陽が、ヤツのこわばった頬を染めている。

下の喉ぼとけが、ゆっくりと上下して。首からぶら下げたサンングラスの角がきらりと光線を反射させ、まぶしさをどこかへ散らばらせていた。

◇12 幸せの黄色い風船3

ユカはコータから目を逸らし、砂浜と歩道を隔てるテトラポッドを見つめた。

なんだか目をあわせていられなくて、目のやり場に困り、つい逸らした先にあるのがそれだったからだ。

何か言わなきゃ、と思えば思うほど返す言葉が思いつかない。

急に耳のふちがちりちりと熱くなって。恥ずかしいような、いたたまれないような気持ちになる。

コータの告白が、じりっと、心の繊細な部分に踏み込んでいる。

目に見えない距離を、いま一気につめられた気がした。

「記録をだせたら、って。負けたくせに」

ユカは見えない何かをぶち壊したくて、話をはぐらかした。

言ったあとになって、しまった、と後悔したけど。会話が途切れるのが怖くて、更に余計なことを口走っていた。

「それに応援なんて行く気なかったんだから。たまたま近くに用事があっただけで」

コータが困っているだろうことは、そっぽを向いていてもユカにはわかった。

地面に長くのびたコータの影がゆらめいている。

手を片頬に当てているから、ポリポリ掻いているのかもしれない。ヤツの、困ったときの癖みたいなものだ。

そんな変化をチラ見し、いまのうちにこの場を切り抜けようとユカは考えていた。

コータが返答につまっている隙に。適当なことを言って逃げちゃいたい、と。

だから、じゃあね、と口にしかけたのだけど。

「自己ベスト、だったんだ」

「え？」

一瞬早く落ちたつぶやきに、不意をつかれて。顔を向けたとたんに、頬のあたりを掻いているコータと目があってしまった。

「1'14"058. 俺、1分15秒切ったの初でさ。競輪学校の願書、1分15秒を切る記録なしじゃもらえない場合もあるんだ。やっと切れた」

ヤツは困ったような、それでいてうれしそうな顔をしていた。

「それに、どんな理由であれ来てくれたことがうれしかったんだ。スタンドに子ブタを見つけたとき、俺は世界最速の男になった気がした！ 子ブタパワーでタイムが縮んだんだ」

ニシシ、と歯を見せる冗談めかした笑い顔は、似てないルパン三世のモノマネみたいだ。

なにかといえばビッグマウスで、子供みたいな口をきく男。無邪気で、前向きな。

でも、そんなヤツらしい口ぶりに、いまは助けられた気がした。

ユカは呆れまじりの息をもらし、肩の力を抜いた。

なんだか、おバカな悪がきみたいだ。

喧嘩自慢のガキ大将がおおげさに武勇伝を語り、笑っているのと似ていた。

コータのバカが伝染したのか、こっちまでおかしい気分になって。普段は不快でしかない子ブタという呼ばれ方にも、ユカは不思議と腹が立たなかった。

「そっか。ベストタイムだったんだ」

「ああ。すげーだろ？ 本番につえー男とは俺のことだろ」

さっきまで殊勝だったのに、もうこれだ。

「負けたくせに」

ユカはちよっぴり意地悪をしたくなり、ふたたび冷や水を浴びせかけた。

それはもちろん、冗談で。『うるせー』とか、きつと、そんな返事がかえってくるだろうと予想していたからだ。

けれど。

「バカめ。競争相手は他人より自分だ、つつーの。昨日より今日、前へすすめたかどうか問題なんじゃねーか」

コータが返したのは、思ったような言葉ではなかった。

うわ、俺カッコよすぎ、と鼻の下をこするコータは、相変わらずうぬぼれがすぎる。

いつものユカなら、うざいと思いこそすれ、決して感心などしない。しかし、この時はなぜか虚をつかれて。ユカは、知らぬ間に糸を握る手の力をゆるめていた。

瞬間、するりと指の間をすり抜け、風船は空中へと放たれた。

ふうわり、ふうわりと、藍色に染まりはじめた空へ、たよりなくのぼっていく。

「あつぶねえ」

あ、と思った時には目の前の影がかぶさるように動いていた。

とっさに飛び上がったコートが糸の端を掴んでいる。派手なモーシヨンで着地して、ホラよっと差しだしてくる。

「ぼやっとしてんなよ。飛ばねーようにガッツリ握っとけ」

そう言いながら背をかがめ、コートは糸を何重にもユカの指に巻きつけはじめた。

ぽっかり浮いていた風船がみるみる下がって、まるで大きすぎる水風船みたいに糸が短くなっていく。

ユカはされるがままになりながら、コートのつむじに憎まれ口を叩いた。

そんなに巻いたら風船が可愛くなくなるじゃん、とか。

コート、結構世話焼きだね、とか。頭に浮かんだ文句を、適当につぶやいていたと思う。

だけど、そうしながら胸の中では別のことを考えていた。

競争相手は他人より自分だ、と。

昨日より今日、前へすすめたかどうかが問題だ、という言葉に、心の中で耳を傾けていた。

コートらしい、粋がったセリフ。

使い古された、人を励ますための名文句と一蹴することもできた。

なのに、なぜだろう。

競争相手は他人より自分だというありきたりな言葉が、ユカにとってはまさしく衝撃の一言だった。

いままで考えたこともなかった自分に対する疑問が、そのセリフによってこみあげてきたのだ。

——自分は、いまの自分を越えようとしたことが一度でもあっただろうか。

いつだって誰かと比べ、負ければ言い訳をし、なんでも素質のせいにしていたんじゃないだろうか。

そうやって諦めるための努力だけを重ね、そろそろ夢を手放してもいいかな、と思っていたはずだ。

大切な物は、手を離しちゃダメよ。

よそ見している間に飛んでいってしまうよ、と知っているのに——



「子ブタ？」

呼びかけられてハッとした時には、さっきより闇が深くなっていた。ユカは目をしばたかせ、変わらず自分の前に立つコータを見上げた。青いユニフォームの、いけすかない男を。

ヤツはいぶかしげに眉をひそめ、やや首をかしげてこちらを見下ろしている。

二重瞼の切れたラインが、夕闇のせいでぼやけていて。何か、物言いたげに口があいていた。

「あのさ」

コータはつぶやいて、一旦言葉を切った。

そのまましばらく時は過ぎて。やがて、大人しくつぎの言葉を待っていたユカに、ヤツはさっきと変わらないほどの大声を張り上げて言ったのだった。

「今井ユカ様！ 越智康太に清き一票をよろしくお願いします！」

ニツと笑って後ろ頭を掻いているのは、きっとヤツなりの照れ隠しなのだろう。

バカみたいだ。

恥ずかしいなら言わなきゃいいのに。そう、からかおうとしたユカよりも先に、コータは続けた。

「子ブタ。片思いに飽きたら俺と恋愛しよーぜ！」

じゃーな！ と背を向けたコータが夕闇に消えるのを待ち、ユカは糸でぐるぐる巻きにされた指をぎゅっと握った。

そのまま目の高さまで持ち上げて、糸の短くなった風船を見る。

「どうしようかな？」

勝手につぶやきが口をついて出たあと、ユカは「なに言ってるの、あたし」と自分で自分をツツこんだ。

どちらにせよ、黄色の風船が応えることはない。

でも、不思議なことに。どこかしあわせな香りを乗せた風が、胸の中をすーっと吹き抜けたような気がしたのだった。

◇13 子ブタの日記帳1

夏めいた風がシャツの半そでをゆらし、雲は流れる。

衆議院選挙は終わり、黄色い風船はちよつとしぼみ、木陰のあじさいが盛りをすぎた午後。ユカは学校の非常階段に腰掛け、携帯とにらめっこしていた。

アドレスの相手は安藤。TKプロダクションのプロモーターである。さつきから安藤に送るメールの文面について、ユカは頭を悩ませているのだ。

下着の撮影を終えたあの日から9日。ユカは一度は諦め、辞めようとしたモデル事務所に、いまだ籍を置いたままだった。

諦めが悪い、と言われればその通りである。

けれど、それまでとはちがう前向きな何かが心の中に芽生えていて。ユカは、もう一度頑張ってみようか、と思いはじめていたのだった。

いままでユカは、何かと受身に構えていた。

先に待っているかもしれない悪い結果を恐れて、須賀に告白ひとつできなかったのがいい例だ。こちらから当たらなければ、叶うはずがないと知っていたのに。

事務所の件だって、そう。

ユカがしたことといえばオーディションに登録し、結果を待っていただけ。

積極的に働きかけ、仕事をくださいと持ちかけたことはない。

いつだって誰かがチャンスを与えてくれるのを待ち、結果に不満をもらし、全部素質のせいにしていたはずだ。

それではいけない、と前向き思考のコータを見ていて、改めて考えさせられたのだった。

本当にこの仕事が好きなら、簡単に手放してはいけない。

もつとがむしゃらに頑張らなければ。

ユカは必死に文章をまとめ、安藤へのメールを作成する。

文末に一応、「下着以外がいいです（＊＾▽＾＊）」とひそかな自己主張も添えて。

そして最後にもう一度読み返し、えいっと送信ボタンを押す。

送信中のマークがディスプレイにおどり、やがてそれが「送信しました」に変わるのを見届けると、ユカは思わず、ふうっと大きな息をついていた。

ただか仕事を求めるメールを送っただけなのに、ユカの胸にはかすかな充実感がわきおこっていた。

携帯から階下の中庭へと視線を移せば、日当たりがいいとはお世辞にもいえない庭の一角に、ざくろの木が伸びやかに枝を広げているのが見えた。

若々しい葉の間からのぞく赤色は蕾だろうか。指でつつけば、ぽんと音をたててほころびそうなほどふくらんでいる。

その丸みに気をとられていたとき、手の中の携帯がふるえて。

——もう断られたのだろうか？

とネガティブな予想を抱きつつユカは携帯に視線を戻した。

ディスプレイに表示された名前は

「……なぐんだ」

コータだ。



夕暮れの海岸沿いで突然告られた日を境に、ふたりがどうなったかという――

なんと、メル友になっていた。

とはいえ、劇的な変化があったわけじゃない。

そもそも、あの告白自体困りモノだったのだ。その気がないのだから。

それに、器用に立ち回れる性格でもないから、コータにどう接していいのかわからなくて。いっそなかったことにしてしまえたらさえユカは思っていたのだが。

けれど告白の翌日、急にヤツがユカのクラスを訪れてきて。

——『おい子ブタ、文通しよーぜー。昔っから男女交際の基本は文通だしな』

などと物知り顔で講釈をたれ、男女交際する気のないユカから奪い取った携帯で勝手に赤外線通信をし、挙句

——『よーし、これでOK！　じゃ、そーゆーことでっ』

と勝手に決めていったのである。

こういうのは趣味じゃない。

そもそも答えをだす権利はユカがもっているはずなのに、なぜ言いなりにならなきゃいけないのか。シャクにさわる、ったらない。

なので、メールを送りつけてきても無視してやろうと思っていたのだけど。コータからのメールは意外にも面白いことが多く、気づけばつい、ユカは返信しちゃっているのだった。

最近では……本人には絶対に言わないつもりでいるが、実のところ楽しみにしている。

――S b 力作

早速あげたフォルダには意味不明なタイトルがあった。ユカは首をかしげ、添付画像をクリックする。

けれど。

「……」

そこにあったのは、めいっぱい大きく描かれた子ブタのイラストで。ユカは見た瞬間眉をひそめ、口唇を尖らせた。

子ブタはビキニの水着を着て、にっこりとスマイルを浮かべている。

お腹には浮き輪がはまっており、口から出たふきだしには『コータ君、プールに連れてってほしいブー』と書かれてあった。

ムカつく。

ユカは画像を戻し、メールの本文へと移る。

――現国の授業中、ずっとこれ描いてた。うまいだろ？

――プール連れてってやるよ！（・∀・）

全然面白くないメールにすっかりどころか腹を立てながら、ユカはのろのろと腰をあげ、ざくろの木に近づいた。

パシヤリ、と、いまにもほころびそうな赤い蕾を画面におさめる。そして返信の本文を打ち始める。

——こんにちは。

——プールの件ですが遠慮したいと思います。当方、日焼けは好ましくありませんので。

——お絵かきお上手ですね。わたくし画才はございませんので、代わりに可愛らしいお花の画像を添付いたしました。

——ではでは、失礼いたします。

送信！

安藤の時とは大違いの勢いでメールを送り、乱暴に携帯のスライドをとじる。

そのまま足音荒く、呼び出しを受けている職員室へとユカは中庭を突っ切っていった。

◇14 子ブタの日記帳2

ユカたちの通う私立高校は明治34年開設で、地元ではスポーツの名門校として名が知られている。

元々は女子高だったものを10年前に共学化し、以後一学年500人以上というマンモス校に生まれ変わった。

そんなわけで学内には古式ゆかしき建物と、最新設備つきの近代建築が同居している。

いまユカのいる校舎は、歴史を感じるひび割れがそこかしこにある、学内でも一、二を争う古代建築物である。

「失礼します」

ガラガラと職員室のドアを開けると、内側からムツとこもった空気が流れ出てきた。

私立校なのだからエアコンくらい入れればいいのに、エコという名のもとに扇風機数台だけで空調をまかなっているのだ。

そのせいで職員室はぬるい空気にはのかな加齢臭が加わり、ラッシュ時の電車みたいな臭いが漂っている。

ユカは職員室を見回し、呼び出した主である担任教師、加藤の姿をさがした。

いた。

窓際の席。

広げた新聞の上からトレードマークの薄い頭がのぞいている。

雑然と積み上げられたプリントのわきには一輪挿しの陶器。残念ながら花はないらしい。

「先生」

難しい顔をして新聞に目を通す加藤に声をかけると、彼は目だけを動かし、新聞をたたんだ。

「今井か。そうだ、呼んだんだったな」

忘れていたよ、と口にしてゴゾゴゾとデスク下の鞆をあさる姿に、ユカは内心しまった、と苦虫をかみつぶす。

呼んだことも忘れるくらいの用なら、こっちも忘れていればよかった。

貴重な昼休みだったのに。

とその時。

「あのね、越智クン。キミは自転車だけ乗ってりゃいいと思ってる

のかもしれないけどね、高校生である以上は――」

知っている名が聞こえて。もしやと思いながらユカは声の方に目をやった。

そこには――日に透けた茶色い髪、ぴよんとはねた遊び毛。

シャツのボタンを上からふたつあけて、腰パンにした制服のズボンに両手を突っ込んでいる男子生徒と、声の主である特別クラスの女担任教師がいる。

男子生徒の方はどこからどう見ても、やっぱりコータだ。

目があった瞬間、コータはおっという顔をしてニヤリと口の端をあげた。

ついさっきユカを怒らせた絵のことなど、ちっとも悪く思っていない顔つきをしている。

コータのことだから、どうせろくでもないことで呼ばれているはず。

サボったとか。プリントを出していないとか、そんなところだろう。

ユカはそう予想し、女教師の動向を窺っていた。

――と思ったら案の定だ。

女教師はメガネのブリッジを指で押し上げ、いまいましそうに口元を歪めた。プリント片手にヒステリックな声をあげる。

「プリントは落書き帳じゃないのよ！ 本当に情けない」

ヒラヒラと振りまわしているプリントには、さっき写メで送られた子ブタのイラストがあった。

しかもひとつやふたつではなく、練習作と思われるブタたちがプリントの余白を埋めている。

バカだ。あんなに練習していたなんて。

たしかに力作だったのかもしれないけれど――とユカは苦笑して叱られ中のコータをみる。

ヤツはまったく反省していないのか、ぎゃあぎゃあと目くらをたてる女教師のそばで耳の穴をほじくっている。

そして時折ハイ、ハイ、と投げやりな返事をしつつ

「センサー知ってる？ 実はセンサー、ソソる女教師第1位なんだよな」

などと正体不明のランキングを持ち出したり。かと思えば

「センサー誰かに似てると思ったらアノ人に似てるよね。元宝塚の女優の……」

「黒木瞳さん？」

「そうだ！ 黒木瞳。似てるって言われるっしょ？」

と信じられないヨイショを口にして、アラフォーの女教師を煙に巻いていた。

女教師の方も悪い気はしないのだろう。最初こそ声を荒げていたものの、次第に軟化して。

「んもう……。言われないわよ」

いまでは手のひらで口元を隠し、笑っている。

まったく——と、ユカは呆れて息をついた。

大した処世術だ。

一体どこからそんなお世辞がでてくるのか。ぺらぺらとまわる舌には感心するより他ない。

そう思う一方で、

——もしかしたら、あいつは真性の女好きかも？ だとしたら自分に対する態度も。

と邪推する気持ちがふとこみあげてきて。その直後、ユカはそんなことを気にかけた自分にハッとさせられていた。

なぜだろう。

コートが女好きだろうがなんだろうが、別に、どうだってかまわないのに。

「おお、これだ。今井ちよつと見てくれ」

「え?」

そうこうしているうちに机下から加藤が顔をあげ、ユカは考えを中断するべく頭を振った。

「ええつと……ここらへんに挟んだはずなんだが」

加藤はバインダーの表紙をあげ、中の書類をぺらりとめくった。一枚、二枚と順にめくる指先が、ある場所にきてぴたりと止まる。

「あった、あった。これ、今井じゃないか?」

やがて中から抜き出し、ガサガサとデスクに広げられたそれは――

どくん、と心臓が嫌な音をたてた。

その音を合図にさっきまでの浮ついた気持ちは一瞬にして消え、サツと空気の温度が下がった気がした。

のびた指先は、多色刷り広告の上段。ひととき大きく載った肌着姿の女を指している。

ノースリーブの薄っぺらい肌着をきて、身体を斜めにひねっている

若い女は、顔だけ正面を向け微笑んでいる。

「今井だろう、この——ええと？　　980円のやつは」

ユカは、すぐには返す言葉がでてこなかった。

体中の血が頭にのぼっていくのがわかる。やっと返せたと思えば、声はひどく掠れたものとなった。

「え……はい……」

目の前に広げられたのは、先週の土曜日、新聞に入った折り込み広告。

エミフルの超目玉商品、婦人用肌着を着て笑顔をつくった自分だ。

ユカはぎゅっと拳をかため、チラシから目を逸らした。

見るのは初めてだった。

見たくないから見なかったし、その日の広告は朝のうちから回収ボックスに捨てられていたから、母が気をきかせてくれたのだと思う。

でも、こうして見せられてしまうと目に焼きついて離れない。

一瞬裸と見まがうほど、肌の色と似通った色の肌着。

胸の形まではっきりと浮き出たライン。そして、楽しそうに笑って

いる自分。

こんなしみったれたチラシ、絶対気づかれないうちで思っていた。

いや、気づかないでほしいと願っていた。なのに。

思わずユカは、ほんの数メートル先に立つコートを窺っていた。

運良くヤツはこっちを向いてはおらず、女教師の説教をからかいながら聞いているふうだ。たまに笑ったり、頭を掻いたりしながら、プリントの言い訳を口に出している。

ユカは内心ホッとしながら、その一方、胸の中で手をあわせ必死に祈っていた。

お願いだから気づかないで。

こっちを見ないで。聞き耳をたてないで——と。

知られたくない。

こんな姿、これ以上誰にも見られたくない。

「あー、やっぱりそうか。そうじゃないかと思っていたんだが。そうか、今井だったか」

加藤は何度もそうか、そうか、とつぶやき、クラス名簿をひらく。そしてユカの欄にあるプロダクション所属の文字を指でさし、

「なるほど。今井は一応、学外活動の届出は出してあるんだな。ほく、そうか。お前もモデルだったのか」

と意外そうな表情を見せた。

悪気はないのだろうけど、オマエモデルダッタノカ、の一言が胸にささる。

「はい……」

「でもなあ、こういうのはちょっと感心できんぞ？　これ下着だろう」

もういやだ。

来るんじゃないかった。

このままでは、コータの耳に入るのも時間の問題だ。

チラシを広げているだけでも目立つのに、その上遠慮のない声で話されたら、人の目を集めたがっているようなもの。

いますぐ広告を奪い取って、ぐじゃぐじゃに丸めて、誰にも見られないところへ捨ててしまいたい。

「あの……、つぎから気をつけますから！」

ユカは説教にけりをつけたくて、デスクの広告に手をのばした。け

れど。

「どうしたんです？ 加藤先生」

急に、背後から別の教師がのぞき込んできて。

その不審そうな声音に、ふたつ先のデスクからコータの担任教師までもが連鎖して、またたく間にユカの周囲は教師たちによって囲まれた。

◇15 子ブタの日記帳3

まず、最初に不快感をあらわにしたのは女教師だった。

彼女は、んまあ、と声をあげメガネのブリッジを指であげる。

そのまま指をこめかみにあて、汚らしいものでも見るかのように広告のユカを顎でしゃくった。

「こういうのはどうなんです？　うちのクラスにもひとり芸能活動をしている生徒がおりますけど、こういった活動はいままでないですよ」

女教師のいう生徒とは、きっと萌のことだろう。

彼女は萌の活動例をあげ、口々に広告とのちがいをあげつらう。知名度によって仕事の質に差があることを、まったく無視した素人の見解を。

それらを得意げに並べ立てたあとで、眉をひそめ、畳み掛けた。

「いくら折り込み広告とはいえ、これ下着ですし？　保護者会の目にとまれば問題になりかねません」

「ですよね」

加藤は繰り返しうなずいてみせ、渋面をつくる。そうしてユカの方を向き直り、

「お前これだけか？ 他にも似たようなのがあるんじゃないか？」

と厳しく追及してきた。

その口ぶりといえは、あたかもユカを下着専門と疑っているような様子だ。

声に誘われてバラバラとこちらを振り返った視線の中には、好奇心を隠さないものもあって。そういった目に晒されたとたんに、ユカは、声を荒げて反論しそうになった。

想像だけで勝手に決めつけないでよ！ と。

だって、確かに露出度は高いけれど、わいせつ目的で撮られた物ではないのだ。そこを混同されたくはない。

でも、それを口にしたところで下着である事実がかわるわけでもなく、疑われても仕方がない理由はきえないのだ。

それに――とユカは、視界のすみにちらりと入るコータのシルエットに気をまわした。

反抗的に切り返して時間を長引かせたくない。

素直に叱られるだけ叱られて、さっさとここから逃げ出してしまいたい。

だからユカは、言い返さないでぐっと堪えた。

握りしめた拳に悔しさを封じ込め、気にしたらダメ、と心の中で言い聞かせて。

ただひたすら一秒でも早く、彼らの興味が他へ移るのを願いながらけれど。

「今井さん？ どうせ載るならもつとマシなのにしてはどうかしら？ あなた恥ずかしくないの？ 平気なの？ お母様は何もおっしゃらないの？」

ふたたび口を開いた女教師に、立て続けにデリケートなところをつかれて。

瞬間、喉元までつきあげた怒りにユカの呼吸はさまたげられた。

我慢しようと踏ん張っても、熱はじりじりとこみあげ、目元まで熱くさせる。

悔しかった。

何も知らないくせに、簡単に物をいう教師たちにも。

それに対し、一言も言い返せない自分自身にも。ユカは悔しくて、情けなくて仕方なかった。

いっそ役に立たないプライドなど、捨ててしまえばいいのに。

そうしたらヘラヘラ笑って

『それあたしなんです。先生も良かったら買ってくださいね。』

と、この女教師をおちよくってやれるのに。

ユカは奥歯をかみ締め、こちらを見下ろす女教師の、レンズに映った自分の顔を睨みつける。

しかしそんな強がりを思っているうちにも悔しさはつのり、鼻の奥がツンとしたあとはもうダメで。

「今井さん？ 先生、責めてるんじゃないのよ？」

「ん？ なんだ今井。先生は心配しているだけなんだぞ」

変化を察した教師たちがざわめきだった頃には、ユカは歪む口唇を横につっぱらせることさえままなくなっていた。

下まぶたに盛り上がった涙が、視界をぼやけさせる。

それがふとした拍子に、ぼた、と落ちて。その後はとめどなくあふれ出て、広告の端っこをじつとりとデスクに貼りつかせた。

ユカは濡れたまぶたを拭い、そのまま両手で顔を覆った。

こんなに騒がれば、もうコートだって気づいているにちがいない。

目ざといヤツだから、きっと泣き顔だって見られちゃっただろう。

でも、人垣のお陰で広告は見られていないはずだ。

それだけが救い。それだけは良かった——とユカが思った時である。

「な……、お前何してんだ！」

ユカの真後ろに立つ教師が怒鳴り声をあげると同時に、ベリツと紙の破ける音が鳴った。

びっくりして顔から手を離すと、そこには人と人の隙間から身体を割り込ませたコータの怒った顔があった。

ヤツはユカとは目をあわさずに、広告の——かつて肌着姿のユカが載っていた部分を引きちぎっている。

「コラ！ 越智君やめなさい」

慌てて取り返そうとするいくつもの手がのび、コータはまたたく間に揉みくちやにされた。

それをヤツはうるせーだの、離せだのとわめきながら振り払い、広告の切れ端を握りしめていた。

そして何がなんだかわからなくなったつぎの瞬間。どっとあたりがざわめいたかと思うと、女教師は目を見開いて絶句した。

加藤も、他の教師も同じだ。ヤツに掴みかかっていた手を宙に浮かせ、声を失っている。まるで、一時停止ボタンを押されてしまった

かのように。

その静止画の中で、ヤツだけがもぞもぞと動いていた。

いぶかって目を凝らしたユカの瞳に、教師の手を払いのけたコータが映る。

ヤツは立ち上がりざま

「うまー！」

と言って。見せつけるように、行儀悪く口の中を見せた。

中には、小さく丸められた広告の切れ端。

ヤツは――ちぎり取った紙片を食べてしまったのだった。

ユカは驚愕してその一部始終を見ていた。

ごっくん。と動くヤツの喉ぼとけにあわせて、頭が動いたかもしれない。

あまりに衝撃的映像すぎて目が離せず、気がつけばいつの間にか涙は引っ込んでいた。

コータはすげーだろ、とでも言いたげな表情を見せて。

「子ブタ、逃げるぞ！」

とデスクから身を乗り出し、こちらに手を差しのべてくる。

止まっていたかのような時間はその声で息を吹き返し、モノクロームの世界に色を取り戻させた。

こわごわ手を重ねたとたん、ユカは痛いほど強く手を引っ張られた。掴まれた場所から、得体の知れないパワーがじんじんと流れこむ。

やがて。

「おい！」

我に返った教師たちの怒号が飛び交いはじめた頃には、ふたりは積み上げられたわら半紙や机の間を縫って、古ぼけた職員室の外へと走り出ていた。

手首をしならせ、荒く引き戸を閉める。

ピシヤリと音がしたあと、すぐに反動でガラガラと戻っていくのが背中に聞こえた。

コータは校舎と校舎をつなぐ渡り廊下で、右を見、左を見、そして右へとユカの手を引いていった。

人気のない裏庭のじゃり道を、ふたりぶんの足音が駆け抜けていく。その音をかき消すかのように、スピーカーからチャイムが流れはじめた。

まるで、0時の鐘みたいだった。

ユカは舞踏会の大階段を駆け下りていくシンデレラのように、前を行くヤツの背中を追いかけていた。

はずむ肩。トレードマークの遊び毛が、足取りにあわせてぴよんぴよんはねている。ぐいぐいと引かれる手の内側に、熱がこもっている。

それらに励まされ、はやく、はやく、と自分をせきたてている。

駐輪場へ出たコートは、一番手前にあったオンボロの、用務員さん専用ママチャリを引きずり出して、

「子ブタ、後ろに乗ってろよ」

とそれにまたがって言った。

ポンポンと叩かれた荷台に腰を下ろした瞬間、視界の高さがかわった。ふわりと景色が流れ、髪が横になびいていく。

ふたつの影が校門の外へ飛び出したとほぼ同時に、昼休みの終わりを告げるチャイムの、最後の音が響き渡った。

忘れ物は教室に置きっぱなしの鞆だけ。

ユカはかぼちゃの馬車ならぬオンボロママチャリの荷台に乗り、コ

「タという操縦者につれられて、昼下がりの学校を脱出した。

◇16 子ブタの日記帳4

平日昼間の住宅街はあまりにものどかでまぶしかった。

母親に手を引かれスキップをする子供や、懸命ににおいを嗅いでいる散歩中のわんこ。

保育園から聴こえてくるオルガンの音や、オルガンにあわせて歌う調子のはずれた園児たちの合唱。

たった一歩外へ出ただけで世界はこんなにも穏やかなのか。

そう思うとささくれ立った気持ちが徐々にやわらぐような気がした。

ユカは荷台をぎゅっと掴み、ママチャリを漕ぐコータを見上げた。

斜め上にあるヤツの頭は、まっすぐ前を向いている。

茶色の髪はモザイクっぽい木漏れ日のせいで、ちらちらと色合いがかわって。トレードマークの遊び毛が、風にそよいでいる。

その遊び毛の揺れをながめているうちに、いまならコータに話しかけられるような気がした。

ありがとう、とか。そういうことを。

でも、もしかしたらヤツだって、簡単に脱ぐバカな女だと呆れたか

もしれないし。結局ユカは口をつぐみ、視線を戻した。

そんなわけだから、国道へ出た後もただ時間と風景だけがすぎいていた。

聞こえるのは自動車のエンジン音と、シャカシャカとペダルを踏む音。そして頭上を流れる街路樹のざわめきだけ。

いまふたりの間にある気詰まりは、そのまま、必死に掴んでいるこの荷台と同じ距離感だった。

潮の匂いに気づいて顔をあげると、さっき通りすぎたTSUTAYAの看板はもう見えなくなっていた。

海が近いせいか、ガードレールも錆が目立つのが多い。このあたりから道が悪くなるから、お尻に響く振動が大きくなるのだ。

ユカは歩道のアップダウンにあわせてお尻を浮かせ、衝撃をやりすごす。

というか、コータはこのママチャリでどこへ行くつもりなのだろう。

こっち方面は市街から離れていくだけなのに、とユカが首をかしげたのとはほぼ同時に沈黙は破られた。

「子ブタ、しっかり掴まってるよ！」

「え？」

いきなり肩越しにコートが瞳を輝かせた。

掴まってるよ、の声じゃなくて、意外なほど明るい笑い顔に声をあげただけど。コートは聞こえなかったと勘違いしたのか、更にボリュームをあげて言った。

「だーから、掴まってるって！ こっから下り坂だぞ」

ひゃっほーい、と楽しそうに雄叫びをあげ、コートは両脚を広げる。

「く、下り坂？」

こわごわ背中越しにのぞけば、先は本当に急勾配で。ユカはその長い下り坂を見たたん、とっさに身体をちぢこませ、荷台を掴む指に力を込めた。背筋がぞくつとする。

車輪は次第に、カラカラと鳴る音の間隔を速めていった。

それにあわせてユカの鼓動も高鳴っていく。

扇風機の風量を突然「強」にされたみたいに、髪の毛が根元から逆立ち、後ろへ流されていく。

たよりない荷台はぎしぎしと振動を増して。ひよっとしたら、ぽーんと遠くへ放り出されちゃいそうな浮遊感をユカは覚えた。

「いやー！」

たまらずコータの腰に腕をまわし、ユカはぎゅっとしがみつく。即座に。

「おお？ 子ブタがとうとう根負けした！」

あーっはっはっは、とうざい大笑いが返ってきたけれど、いまはそれどころじゃない。

オンボロのママチャリはふたりを乗せ、猛スピードで風の中へとつつこんでいく。

耳元でコータのシャツがバタバタとはためき、ふくらんだシャツの背中が全開になったユカのおでこを撫でていく。

ふたたび顔をのぞかせた瞬間。空はこわいくらい青く、その先に広がる海との境界線があいまいで。

ユカはまるで、この自転車ごとコータとふたり、あの空のど真ん中へと飛んでいくような気持ちになった。



下り坂をおりて15分。

結局コータはユカの住む町までママチャリを走らせ、海岸沿いの道でユカを降ろした。

コンビニで買ったパックのジュースにストローをつきたて、ユカはテトラポッドに腰を下ろす。

正面には見慣れた、でもいつもより時間の早い海が広がっていて、健康的な日差しが海面を照らし、水平線を白くきらめかせていた。

ヤツはユカのわきにコンビニ袋を放り、チャリンコのスタンドを立てた。がちゃんと油の足りない音が鳴る。

「どーよ？ あの下り坂気持ちよかったろ？ いま走った道、うちの部のトレーニングコースなんだ」

「うん」

ユカはわざとコートの方を見ないまま、ちゅーつとジュースを吸い上げた。

そっけない返事は、気まずさの裏返しだ。

本当は、ものすごく気持ちよかった。

最初はこわかったけれど、気づけばスリルごと楽しんでいる自分がいた。

それは幼い日、緑の土手を段ボールにまたがって滑り落ちた時みたいに。かっ飛ばしたあとは、もう笑うしかないような爽快感で。職員室のうざったい空気が1ミクロンも残らないほど、ユカは夢中になってコートにしがみついていたのだった。

「だろー？」

コータはさも当然といった具合に、げらげらと笑った。テトラポッドをまたいで座り、結露の浮いたペプシのタブをプシュッとあける。その音がやけにすがすがしくて、ユカはストローを咥えたまま、ごくごくと音をたてて飲むコータの横顔を窺った。

まぶしそうに目を細め、ヤツは空をあおいでいる。

ぽっこりと突き出た喉ぼとけが上下に動いて。それが肌着姿のユカともども、ヤツが広告を飲み下したことを思いださせた。

「あ……」

「あ？」

思わず声をもらしたユカの方を、コータは不思議そうに振り返った。その表情から顔をそむけ、「なんでもない」とごまかしてジュースをすする。でも。

「だーいじょうぶだって！」

急にコータが肩でどついてきて、ふたたび顔を向けると、ヤツはいたずらっぽく目をすがめていた。

「子ブタ、俺の胃袋なめんなよ！ なんせ俺はいちご味の歯磨き粉を吐かずにそのまま飲み込んでたんだぞ」

「え!？」

衝撃の告白というか何というか。

コータは自慢にならない武勇伝を語り、わざとらしくお腹をさすっている。その横顔を、ユカは目をまん丸にして見ていた。

「楽勝だ、つつの。まー、ホントはちょっと惜しいけどな。子ブタのお宝画像を手に入れるチャンスだったのに」

あいつら取り上げようとしやがってーと、本当に惜しそうな口ぶりと言う。

それがおかしくて。

「バカ」

ユカは両腕で膝をかかえ、膝の中に顔をうずめて笑った。

この男と話していると調子が狂う。

あんな安っぽい、恥ずかしい広告が、アイドルのポスターと同じ値打ちみたいに思えてくる。

ババシャツ姿で3回ストロボを焚かれただけの、しょうもないカットなのに。

「あんな物のどこがいいの？」

口にしたあとになって、ユカはしまったと思った。

こんなふてくされた言い方をされても、コートは困るだけだ。

それに。あんな物、と呼ぶことによって、そんなふうになうなよ、と慰めの言葉を期待しているみたいだし。

どのみち失言だった、とユカが思うよりも早く、コートが返した。

「はあ？ そりゃお前、子ブタが載ってるっつーだけで激レアじゃん。広告に載るなんて、普通は一生ないぞ！」

それに、と思いのほかムキになって続けるコートの声が、語調とは裏腹に、あたりをふわふわと漂っていた。甘やかすようなやわらかみを乗せて。

ユカは意識してそんな感覚に逆らい、きつく膝をかかえ直した。いっそう身体をちぢこませ、自分の殻に閉じこもろうとする。

けれど、どうしたことだろうか。

ヤツの声音は春風みたいに、はねのけようとしても、切り捨てようとしても、かまわずユカの身体を包みこんで。

温かく、まわりついてくるのだった。

やがて。

「子ブタ？」

コータの怪訝そうな声に気づいた時には、ユカはもう涙を流していた。

あんな広告、自分でさえ避けて見ないようにしていたのに。

あなた恥ずかしくないの？ と侮蔑の目をむけた女教師の意見こそが当然なのに。

でも、優しい言葉をかけられると胸が詰まって。堪えきれない思いが、奥底からつきあげてくるのを止められなかった。

やっとわかった——と、ユカは涙をすすり、喉を鳴らした。そうしてスカートのひだに顔をうずめ、こみあげる嗚咽を押し殺す。

——自分は、ずっと誰かに認められたかったのだ。

——たとえちっぽけな、くだらない仕事しかもらえなくても。

——それでも、良く頑張ったと、誰かに言って欲しかったのだ。

「あたし……あんな仕事しかもらえないの」

鼻がつまって声はひどくみっともないものとなった。ユカは涙声のまま先を続ける。

「広告の撮影、だまされたようなもんだよ。本当は高校生にあんな仕事させない。あたしがへばいから、どんな仕事でもやるだろうって足元見られただけ」

いままで誰にも口を割らなかった本音が、つい口をついて出た時。コートの手ひらが、うずくまったユカの頭にぼんと置かれたのがわかった。

傘を握らせた時と同じこわごわとした手つきで、ヤツの手はゆっくりと上から下におりていく。

そんなに優しくされると余計に泣いちゃうじゃない。って言うつもりだったのに。

ユカの喉は、思ったのとはちがう声をふりしぼっていた。

「あたしバカなのかな？ それでも辞めないって、おかしいかな？ 誰からも期待されてないのに、あたし」

そこまで激白したところで、ユカはぐいと強く引き寄せられた。その拍子に上がった顔を、ななめからヤツがのぞきこんでくる。

「誰からもなんてあるわけねーだろうが！」

コートはそう怒鳴りつけ、まっすぐこちらを見据えてきた。ややトーンを落とした声で、俺がみてるってば、と言う。

一点の曇りもない、肩の向こう側にある青空とかわらない瞳に、ぐしゃぐしゃになった自分が映っている。

「あゝ、子ブタぼろぼろじゃねーか」

コートは着ているシャツの胸元を掴んで、そこでユカの顔をこしこ

しと拭きはじめた。

力加減が強すぎるから、痛くて顔をそらしたけれど。そこまで手が追いかけてきて、頬や目のまわりを擦ってくる。

「ホラ、可愛くなった」

拭いたくらいで可愛くなんかなるはずがないのに、ヤツはそう言っ
て目を細めた。

すっかり制服のズボンからはみだしたシャツが、だらしくよれて
いる。

皺くちやになった部分に、溶けたファンデーションや、今日たまた
まつけていたマスカラの色がこびりついて。

そんな――くたびれたシャツを見るうちに、ヤツは無理やりストロ
ーを咥えさせてきた。そうして

「子ブタ泣くなよ！ これでも飲んで落ち着け」

と、まるで泣く子に手を焼く父親みたいに、ユカをあやそうとする
のだった。

ユカは、必死に機嫌をとろうとするコータの顔をじっと見ていた。

練習焼けした頬が、口を動かすたびにラインを柔軟にかえていく。

夏空のような瞳は、ユカを笑わせようとしているのかくると変

化して。

その表情を見ている間に、息がつまるような、でも心地いいような、不思議な気持ちか胸をかすめた。

昼下がりの日にきらめく海岸、テトラポッドの上で。

それが何なのかは言葉にできないけれど。

しいて言えば、いま手の中にあるオレンジジュースと同じ、ほのかに甘い感情だった。



そのままふたりは黙って海を見ていた。

いつもならこんな状況は苦手分野だ。

なにか話さなきゃと焦ってばかりで、そのくせ気の利いたことが浮かばなかったり。

なのになぜだろう。ユカには、会話のないこの空気がまったく気にならなかった。

ふたりの間にある沈黙は、優しく、居心地良くて。だから携帯の着メールが急に割り込んできた時は、音の方がわずらわしいとさえ思えた。

R r r r ……

まさか——と、ユカはぶるぶる震える制服のポケットに目を落とした。学校を抜け出したのがもうバレて、家に連絡でも入ったのだろうか。こんな時間にメールが届くことなんてないから、きっとそうだ。

そういう用件ならシカトに限るでしょ、ってことで。ユカは無視を決め込んで、そのままストローを咥え直そうとしていた。

でも、そういう態度はコータにとって、気に入らないものであるらしい。

「シカトしてんなよ！　ちゃんと見ろよ」

隣から、まるで保護者のような声が飛んできて。顎をしゃくって命令するコータの指示通りに、ユカはしぶしぶ携帯をあけた。

すると。

——安藤　順子

——Sb　ご連絡　撮影の依頼について

そこにあったのは、プロモーターの安藤から届いた返信メールだった。

しかも件名にあるタイトルは、また撮影の依頼だ。前の撮影から9日しか経っていないというのに。

ユカは息をのみ、ディスプレイをじっと見つめた。

いくらなんでも話が良すぎる。

一年半も撮影から干されていたのに、いきなり運気が急上昇するなんてあるわけがないのだから。

だとしたら——と、ユカは眉間にしわを寄せ、口唇をかんだ。

やはり、また下着なのだろうか。それ以外考えられない。

ユカはさんざんためらった挙句、断るなら早い方がいいのだからと自分をなだめ、ボタンを押した。

でも。待っていたのは予想とはちがう文面で。

読み進むにつれ、ユカは一気に憑き物がとれた気がした。

——お世話になっております。TKプロダクションの安藤です。

——先日は急な依頼をお引き受け下さりありがとうございました。

——早速ですが、先日と同じくショッピングモール・エミフルから今井さん指名で撮影の依頼を承っております。

——来週末の折込用、こちら浴衣の撮影になっておりますので、手足の爪にはくれぐれもご注意ください。

——P.S. 良かったですね。

「うお！ どうしたんだ？」

読み終えた瞬間ユカは声にならない悲鳴をあげ、たまたまそこにあったコータの首にしがみついていた。

コータが慌てているのはわかっているけど、いまはそれどころじゃない。

だって、感激で、胸いっぱい、言葉にならないのだから。

——きた！ やつときた！

下着撮影は無駄じゃなかったのだ。あの仕事を受けたからこそ、この依頼があるのだ。

そう思うと、味わってきた屈辱や苦悩が、いっぺんに報われたような気がした。

「なんだ？ このスペシャルサービス」

説明もないまま抱きつかれ、ヤツはさぞ仰天したにちがいない。

コータは上擦った声をもらし、顔をのけぞらせて。けれどされるがままにユカを受け止めている。

「コータ来た！ いま依頼が」

思う存分幸せをかみしめたあと、ユカは首根っこをほどきコータを見上げた。

ヤツの瞳の中に、さっきまでとはちがう晴れやかな笑顔の自分が映っている。

事情を知らないコータに、いきなりまくしたててもわかりっこないのに。メールのことしか頭がないユカは気がまわらなくて、あのね、それでね、とひたすら早口で興奮を口にしていた。

その隙について。

「チャンス！」

「えっ？」

いきなり何かと思えば、コータは、ユカの手ごとジュースのパックをひったくってきた。

え？ と目をしばたかせるうちにストローは咥えられて、ユカのオレンジジュースは猛烈な勢いで吸い上げられていった。みるみるしぼんでいく手の中のパックと、ヤツを交互に見る。

コータは最後にじゅるるっと下品な音をたてて、ストローを咥えたまま片眉をあげ、ニヤリと不敵に笑った。

そして直後、

「間接ちゅーを奪ってやったぜ！」

意味不明な雄叫びをあげて。と同時に、ユカはどっと体温が急上昇するのがわかった。

「なっ……!!」

コータの冗談めかした口ぶりがいつそう胸のざわめきを煽り、鼓動の速さをエスカレートさせていく。

さっきまで抱きついてても平気だったのに、どうして。

いまはもう、メールのことさえ吹っ飛んでしまっただけ。

バカじゃない？とか。また小学生みたいなこと言って、とか色々つつ込みたかったのに。

ユカは何ひとつ返せないまま、離されたあとに残るコータの温度にばかり気を取られていた。



その日、ユカは生まれてはじめて日記帳を買った。

家に帰ったら連絡すると約束したから、部屋のベッドに飛び乗って、早速コータへメールを打とうとしたのだ。

でも。家に着いた――のあと、なんて打てばいいのかわからなくて。

何度も入力しては消すを繰り返して、結局

——家に着きました。

という、愛想のかけらもないメールしか送れなかったのだ。本当は、お礼を告げたかったのに。

そんな気持ちを書きとめたくて、ユカは日記をつけようと思った。

1時間もかけて書いた、「コート、今日はありがとう」からはじまるその日記は、まるっきりコートへの手紙みたいになった。

見せることは決してない。

ただの自己満足だけだ。

読み返して日記を閉じたあとも、ユカは不思議なときめきにしばらく悩まされた。

デートしたわけでもないのに、くすぐったい思いが胸を駆け巡っていた。

第2章END. 第3章へつづく。

◇17 セブンティーン

第3章 17・セブンティーン

例年よりも早い梅雨明け宣言のあった今日7月10日、ユカは17歳になった。

17歳という響きが、なんだか特別な感じに思えるのは自分だけだろうか。

歌や映画のタイトルになったり。永遠の17歳、なんてフレーズもあるくらいだし。

16歳とはちがって、どこかわくわくするというか、楽しいことがたくさん待っているような気がユカにはするのだ。

たった1歳ちがうだけなのに、と笑うなら笑っていただきたい。

これからの1年間は、アンケートに答えるときage17と書けるんだ！なんて。ささやかなことでさえ、胸がはずむような気持ちになるのだった。

そんな他愛もない話をコータに打ち明けたのは先週のこと。

ヤツは同調こそしてくれなかったものの、祝ってやるよと言ってくれて。たまたま試験明けで学校が休みだから、待ち合わせて映画でも行こうか、という話になったのだ。

そういうのって、らしいでしょ。

スペシャルな日を過ごす相手がコートしかない、という淋しい現実には目をつむるとしても、家でしょんぼりしているよりはマシというもの。

というわけで。それなりにユカはお出かけを楽しみにして、着ていく服のコーディネートまで決めていたのだった。

なのに。

——『忙しさに追われ、夢中で駆け抜けてきた日々でございましたが、お陰様で我がTKプロダクションは今年ではや設立15周年を迎えました。ひとえに皆様方からのご支援——』

華やかな季節の花々に彩られた会場。社長の晴れやかなスピーチを聞く間にも、ユカのため息は深まるばかりである。

まさか事務所の設立記念パーティとブッキングしていたなんて。

普段ならご馳走が食べられる場は大歓迎だ。でも、何も今日じゃなくたっていいのに。

スケジュールを覚えていなかった自分も悪いが、それにしても運が悪すぎる。

昨夜安藤からのメールで確認させられた今日の予定は、コートとの

約束をドタキャンせざるをえないスケジュールだった。

おまけになんの手配もしていなかったから、朝から準備に追われるはめになって。コータへは、メールで予定変更を告げるしかなかったのだ。

それがまずかったのかもしれないけれど。ヤツは

——そっか。まー頑張れよ（・ω・）

という無愛想なメールを返しただけで。

その後はへそを曲げたのか、ユカの方からメールを送っても返事をよこさないのだった。

事務所の設立15周年パーティが催されているこの会場は、一昨年オープンしたばかりのホテルで、白い大理石を基調にしたギリシャ風建築と、テラスに設けられた観賞用のプールが美しく、結婚式場としても人気が高い。

艶消しの金であつらわれたオブジェや、ライトアップされた噴水がとてもロマンティックだ。

プールに面したメインホールには、マスコミ関係者をはじめ各方面からの招待客がそれぞれの人脈を求めて集まっている。

ひそやかな話し声やクリスタルの重なり合う音がさざなみのように聞こえ、大人の社交場そのものであった。

もちろん事務所のモデルたちにとっても、このような場は顔を売る絶好の機会だ。愛敬をふりまき、スポンサーの獲得に精を出さねばならない。

わかってはいるけど、でも気になって。ユカはパーティどころではなく、さっきから何度も携帯を気にしているのだった。

本日通算4回目。

わざわざセンターに問い合わせてみたものの、無駄な努力である。

新着メールはありません――らしい。

携帯をドレスの内側につっこんで、ユカはいよいよふてくされた。

わざとドタキャンしたわけでもあるまいし、返信くらいしてくれてもいいのに。

器が小さいというか、精神年齢が低いというか。まったく腹立たしいことこの上ない。

「ユカ？」

「え」

いきなりかけられた声に、ユカはびくりと身をすくませた。

自分のことを呼び捨てにするのは事務所で萌だけだから、声の主はわかっていたけれど。振り返れば、そこにはやはり氣遣わしげな萌の顔があった。

「前向いてないと怖いわよ？ 今日事務所スタッフ、すごく気合い入ってるんだから」

萌が表紙をつとめる情報誌にタイアップページをもつメーカーのパーティドレス。

蜂蜜のような光沢を放つシルクに身を包んだ萌は、同年とは思えないほど大人びて見える。

膝丈のカジュアルなラインが身動きするたびに揺れ、華奢さを強調している。

「ああ、うん」

ユカは壁際にならぶプロモーターらをちらりと見やり、ちゃんと背筋をのばした。

こういう場での立ち居振る舞いに安藤は厳しいのだ。

うっかりすると、よそ見しているのを見とがめられる。そうならば携帯を取り上げられるのは必然だし、お小言も避けられない。

とは言うものの――内心では、早く終わってくれればいいのにとため息しきりである。

だから。

「ねえ、ユカ」

と萌が話しかけてきたときは、なんだかんだ言っ、萌だっこの長いスピーチにうんざりしているのだろうと思ったのだが。

しかし。

「ユカ、コータ君のことどう思ってるの？」

萌が喋ったのは、スピーチの長さに対する不満ではなかった。

「え？」

予想だになかった問いに、ユカは我を忘れて振り返るはめになった。かろうじて息だけの声に抑えたものの、危ない限りだ。

「どう、って……」

どう思っている、とはどういう意味だろうか。

それ以前に、なぜそんなことを聞くのか。

浮かなさそうな横顔の萌を、見るともなしに見る間にも、声はさらに続く。

「競技場から一緒に帰っていたから。もしかしたらユカは――」

――コータ君を好きなんじゃないか、って。

ひそやかに声のトーンを落とした萌は、言い終えたあと、こちらにまなざしを向けた。

さぐるような視線が、わずかな変化も見逃すまいとしているように感じられる。それが、身体のあちこちを熱くさせて。

「あ、あたしは別に」

ユカは怒りとも、恥ずかしさともつかない感情に押し出され、反射的に強い語調で吐いていた。

無意識にぎゅっと握っていた手の内がねばっている。

その不快な手触りが、自分の動揺っぷりをしらしめているようだった。

これじゃまるで――とユカは意識して顔をしかめ、息をついた。

これじゃまるで、凶星みたいじゃないか。

そんなことあるはずがない。

だって、好きだの何だのといっているのはコータの方で、ユカ自身には、これっぽっちも特別な感情などないのだから。

「好き、ってそんな。あいつ、あたしのことブタだなんて呼ぶんだよ？」

いらいらと視線をさまよわせ、ユカは思いつくまま悪口を並べた。
た。

「あんなガキンちょ、対象外に決まってるじゃん」

バカだし、偉そうだし、髪型変だし、とさんざんに言う。

でも、そうやってコータをけなす間にも、本当に？ と疑問符を投げかける別の自分がいて。

ユカはそんな自分にうんざりし、行儀悪く舌打ちすることとなった。

そんなユカの反応は、逆に怪しまれてもおかしくない。対象外のわりには、反論が必死すぎたから。

けれど、萌の目にもコータは異質に映っていたのだろう。そうね、と萌は苦笑いをもらして。

「彼、ちょっと口が悪すぎるわよね。小学生みたいだもの」

それ以上追及することはなく、彼女はステージに視線を戻したのだ。
った。

ユカはホッと息をつき、「でしょ？」と小鼻をふくらませた。

そうだ。萌の指摘は正しい。

コータみたいなタイプは、もともとユカの好みではないのだ。とい

うか、うざい、に当てはまる。

好きだなんて言語道断。血迷っているとしたか思えない。

ユカは背筋をのばし、顎をあげてステージを見た。

ステージのそでに花束を抱えたスタッフが控えているから、そろそろスピーチが終わるのだろう。テーブルには乾杯用のシャンパンがセッティングされ、ユカたちの手にもグラスが手渡された。

それを目の高さまで持ち上げ、軽くゆする。

金色の中に、しゅわしゅわと弾ける細かい泡たち。パツと見、色つきのサイダーとかわからなく見えるそれは、上から覗き込むと嗅いだことのない香りが鼻をついた。

飲んでみたい、気もする。

今日は誕生日だし、むしろくしゃしていることでもあるし。ちょっとくらい――なんて。つい自分を甘やかしてしまいそうだ。

「ねえ、萌。これ飲む？」

そんな悪い企みごとを共有したくて、萌に声をかけたのだけど。

返ってきた言葉は、ぜんぜんちがう。ユカの予想からかけ離れた、不意をつく二つ目の問いであった。

「私のことはどう思ってるの？」

「え？」

ユカは質問の意味をのみこめず、目をしばたかせた。

考えてみれば、いたってシンプルな問いだ。

好きか、嫌いかを選べばいいのだし、そうすると自然、答えは決まっている。

なのになぜ戸惑ったかというと、それは、さっきコータへの気持ちを探られたせいで。Aが嫌いならBは？　とでもいうみたいにな、コータと並べて萌への気持ちを聞かれたかのごとく錯覚したからだっ

た。

折よく終わったスピーチと、乾杯のムードに流されて、ユカは手にしたグラスを目の前に掲げた。わっと拍手がわきおこり、ホールはざわめきに満たされる。

すっかり話の腰を折られてしまったが、とにかくフォローはしておかねばならない。

そう思っすぐさま身体ごと振り返ると、そこにはシャンパンを飲みほす萌のそらせた喉があった。

「あっ、それ……」

あまりにも堂々とした飲みっぷりに、思わずユカは周囲の目を憚っ

た。

それをよそに萌は「平気よ、このくらい」と大胆に言い、指先で口の端を拭う。そうして空になったグラスをテーブルに置き、こちらに向き直った。

「私、ユカに嫌われたんじゃないかって。ずっと気にしてたのよ」

「え？」

「悪気はなかったのに、須賀君を取り上げたみたいになったから……。あの時のこと、本当にごめんなさいね。それと、いままで謝れなかったことも」

ユカはぽかんと口をあけ、苦しい胸の内をあかす萌の表情を窺った。

正直、拍子抜けした気分だった。

うやむやにしていた須賀との件を、突然蒸し返されたことへの驚きもある。が、それよりもずっと、なんだ、そんなことか——と。

聞いた瞬間、“そんなこと”で済ませられている自分にも驚いていた。

「ああ、あの時の……」

ユカは言葉を濁し、真似してグラスを傾けた。

シャンパンは温く、想像していたよりも美味しくはない。結局飲み

干さないまま戻し、こちらを窺っている萌に顔だけを向けた。

「あたしすっかり忘れてたよ。なくんだ、いきなりシリアスになるから、びっくりしたじゃん」

「本当に……？」

「本当だ、って」

強がりもまじっている。まったく気にしてないといえば、そんなの嘘だ。

けれど、あの成り行きは萌のせいじゃない。――と、ユカは若干やわらいだ萌の表情を眺めた。

あの日、仮に萌が人違いをしていなくても、須賀が萌に恋していた以上結果は同じことだ。

むしろ、連れてこられたのが須賀だったら、もっと後味が悪くなっていたかもしれない。

それに、ユカは萌のいいところをたくさん知っている。

萌は真面目で、努力家で、その上こんなに美しいのだ。

男の子たちが憧れるのは当然。同じクラスなら尚更のことだろう。

ユカだって男子に生まれていれば、萌に恋をしたかもしれないのだ。

「いまのあたしは恋どころじゃないんだって。やっと撮影の仕事をもらえるようになったから、当分はそっちを頑張らないと！」

おどけて作った表情に、萌はぎこちない笑みを浮かべた。長いまつ毛を瞬かせ、よかった、と安堵した様子だ。

「須賀君は萌に優しくしてくれる？」

「ええ」

「そう。良かったじゃん」

我ながら、ちょっと損な役回りだと思う。ユカは苦笑いをし、さりげなくため息をつく。

けれど、それで丸く収まるのなら十分。

萌は大切な友達。わだかまりなんてないほうがいいのだから。

やがて、会場は人の動きがあわただしくなり、あちらこちらで名刺を取り交わす姿が見られるようになった。

ふたりは目配せしあって別れ、ユカは人ごみにまぎれる萌の後姿に大きく息をついた。

須賀の件があって以降、どうしたって萌との間には溝ができた。

彼女の過密なスケジュールのせいもあるけど、ユカのほうも避けていなかったわけではないから。

けれど。ややこしく纏れた関係を、今日やっと修復することができたのだ。

そう考えると、このパーティーは良いきっかけ。ある意味、最高の誕生日プレゼントになったのかもしれない。

――映画に行けなくなったのは残念だけれど。

「ま、いっか。あんなヤツ」

ユカはしかめ面でぼやき、壁沿いを足早に歩いた。ふくらんだドレスの中に忍ばせた携帯が、歩くたび腿にあたる。

その感触がいらだちを再燃させて。

あんなヤツからのメールを気にして携帯を持ち歩くなどするんじゃない。――と、ユカは苦虫をかみつぶした。

大体、あれほどいい加減な男はいない。

返信は30分以内厳守、っていうルールを作った張本人のくせに、約束を破るのだから。

「邪魔だし、控え室に携帯を置いてこようかな」

勝手に口をついてでた独り言は、ユカの背中を押すきっかけになった。

持っていても鳴らないのだから、手元にない方が身軽でいい。

手に届くところにあれば、気になってしまうのも確かだし。

そう思うと急に踏ん切りがつき、ユカはＵターンして控え室を目指した。

なのに。タイミングが悪い、とはまさにこのこと。

まるでいまの独り言に聞き耳をたてていたかのごとく、絶妙な間の取りかたで携帯が震えて。

「あいつめ。なによ、今更」

ユカはわざと舌打ちをし、憎々しくつぶやいた。

——遅すぎだ。一体何時間たっていると思ってるんだか。

こんなに待たされたのだから、絶対返信なんてしてやらない。

そんなことを考えながらホールを離れ、物陰に身をひそめて携帯をひらく。

切り替わったディスプレイには、見慣れたコータのメールアドレス。まぎれもなくヤツの携帯から送られたメールがそこにはあった。

けれど、どうしたことだろうか。

——S b 緊急、須賀です

「須賀君……？」

件名には思いがけないタイトルがついていて。

さらにジャンプした先の文面に目を落としたとたん、ユカはぐっと息をつまらせていた。

◇18 あたし恋した

「うそ……」

——非常時につき、コータの携帯でメールを打つことにしました。

——今日夕方、コータが転倒事故を起こしました。現在診察中ですが、状態はあまりよくありません。お節介かと思っただけ一応連絡まで。

——尚、病院なので一時的に携帯の電源は落とします。須賀。

うそ、とつぶやいたけれど。

絵文字もない。軽さもない。ずらりと並んだ礼儀正しい文字列は、このメールの送り主がコータではないことを証明しているように思えた。

冗談、と思いたい気持ちとは裏腹に、しのびよる不安は影を濃くするばかりだ。

だって。冗談を言い合うような間柄じゃない須賀が、ユカにうそのメールを送るとは考えられない。

急ぎの用じゃないなら、萌を介して知らせるに決まっているし。それに——と、ユカは携帯を持つ手をだらりと落とした。

思えばいつだってコートは返信をくれていたのだ。

そっけない、短いメールは多々あったにせよ、今日のように無視されたことは一度もなかった。

一度もなかったのだから。

ユカはへたりこみそうになって、壁の鏡に寄りかかった。

艶消しの金で縁取られた鏡に、顔色を失った自分が映っている。

今日のためにあつらわれた衣装は、肩のストラップがビーズの黒いミニドレスで。華奢に見えるようにと、髪は頭のとっぺんで全部まとめ、一輪だけ飾りにオレンジ色のガーベラを挿してある。

控え室で見たときはとても気に入っていたのに、いまは顔色の悪さを衣装が際立たせているように思えた。

その鏡がいけなかったのかもしれない。直後通路の先から、あつ！と空気を裂く声が聞こえて。

「今井さん！ やっと見つけたわ。何やってるの、こんな所で」
ハッと顔をあげた時にはもう遅く、居場所をつきとめたとばかりの呼び声が通路の先から響いてきた。

きびきびとしたアルト。プロモーターの安藤である。

「安藤さん……」

背中を気にしつつこちらへ向かってくる安藤は、専属マネージャーにはならないまま、数多くのモデルをプロモートしている。

世話をみているモデルの数は片手じゃ足りず、ユカはそのうちのひとりにすぎない。

だから、しばらく席を外しても大丈夫と高をくくっていたのに。

まさか探しにくるなんて——と、ユカは頬をこわばらせ、携帯を隠した。

「今井さん、早く!」

安藤は足早に寄るやいなや、サッとユカの手首を掴み、有無を言わせぬ勢いで来た道を引き返していく。

「観光協会の会長さんがみえられてるのよ。お名前は佐々木あきらさんです、覚えてくださいね? ミスコンでは審査委員長も……」

ただでさえ仕事のないユカだ。

どんなチャンスも無駄にはできない。わかっているのに。

無視してやろうと、決めていたはずのメールだった。

コータはただのメル友で、どちらかといえば迷惑なヤツで、怪我をしようが入院しようが、ユカには関係なんてないのだ。でも。

転倒事故ってまさか、トレーニングコースだと言っていたあの下り坂で？　とか。

状態はあまりよくありません、ってどういうこと？　とか。

考えれば考えるほど嫌な想像ばかりがわいてでて。頭の中をメールの文字が占領し、どうにもコントロールがきかないのだった。

――あたし、恋したのかも。

ユカはまつ毛を伏せ、口唇をかんだ。

そんなはずはない、と否定しようにも、うまくいかない。

いま身を置いている現実から離れて、ユカのまぶたの裏にはいろんなコータが浮かび、消えていく。

日に透けた、茶色い髪。ぴよんとはねた遊び毛。

赤い傘を握らせた、肌の色まで透けきった左肩。

一目惚れでした！　と叫んだときの余裕のない瞳の色や、子ブタと呼ぶ生意気そうな声も。

それらがしゃぼん玉のように生まれてははじけ、胸をぎゅっと締め付けてくる。

――あたし、恋しちゃったんだ。

悔しいけれど、嘘や自己暗示では誤魔化しようがない。

コータが怪我したのかと思うと何も手につかないほど、好きになつてしまっていたのだ。

自覚してしまえば、あとはもう迷わなかった。

急いだところで怪我が治るわけじゃない、とか。大きなチャンスが無駄にする、とか。そういう、引きとめようとするすべてを捨てて、ユカはコータの状態を確かめるために、ここから抜け出そうと決めた。

17歳の恋心が、走りだした瞬間であった。



挨拶を終えたユカのわきでは佐々木と安藤が景気の話で盛り上がっていた。

どこそこの旅館が店じまいしたとか、世界的金融危機がどうだとか。その会話に耳を傾けながら、ユカは抜け出すためのきっかけを探していた。

多少、無茶でもいい。

なんでもいいから中座するチャンスを作りたい——と、神経を集中させ、あたりを窺う。

ホールには200名を超す招待客がいくつものグループを成し、立ち話に花を咲かせている。

食器のふれあう音や談笑の聲が飛びかっけていて、コンパニオンがせわしなく間を縫い、空いたグラスを引き下げている。

その手にある銀色のトレイが会場の照明を受けてキラリと光って――ユカは、これだ！　と息をのんだ。

中途半端に中身の残ったビールグラス。

あれを引っ掛けられればいい。

佐々木氏からの印象は台無しになるに決まっているが、幸い、床はふかふかの絨毯敷きだ。

ユカさえ声をあげなければ、大きな物音はたたないだろうと思った。

そんなこととは知らないコンパニオンは、トレイを手のひらに載せこちらに歩み寄ってくる。

テーブルに忙しなく目を配っているのが、却って好都合だ。

その足取りを横目で窺う。

もう少し。あとすこし。

息をひそめてタイミングをはかり、ユカは心の中でカウントダウン

を唱えた。

――あと3歩。

――2歩。

――1歩。

カウントゼロ。

ユカは思い切って一歩後ろに退いた。背中ではトレイを押しやった直後、強い手ごたえを感じた。

――倒れろ！ と念じたグラスはユカの目論見どおりに倒れ、ぴしやりと中のものを散らしながら落ちていく。

「あっ」

瞬間、コンパニオンが小さな叫び声をあげ、手からトレイが転がり落ちた。

トレイは思いのほか大きな音をたて、わんわんとふるえながら動きを止める。

「す……すみません！」

「いえ」

慌てふためいたコンパニオンがユカと絨毯とを交互に眺めた。

その青ざめた表情と、集まった周囲の目に罪悪感を覚えて。転がったトレイを拾おうとユカが腰を屈めた時、安藤が割って入った。

「あらあら」

安藤はユカのドレスを見やり、おしぼりで叩くようにして拭った。

騒ぎにしたいくないのだろう。手を挙げただけでコンパニオンを制したあとは、すぐさま佐々木に粗相をわびて、

「さ、ユカちゃん。佐々木さんにご挨拶してさがりましょうね」

ユカの背に手を当て、早々と切り上げを促してきた。

作戦は成功だった。

かなり強引ではあったにせよ計画どおりに事は運び、良かった——と、ユカは胸をなでおろした。

挨拶をすませ人気のない通路へでたあとは、足が勝手に走りだして。それは控え室のまえを素通りしたのち、いっそうスピードを増した。

影のように追ってくる不安に、早く、早く、と急きたてられる。

一秒さえもどかしく、ユカはちらちらと背後を振り返りながらエントランスへと飛びだした。

視線をわきにそらせば、広く取られたガラス窓の外は闇が広がって

いた。

テラスのプールが波立っている。ゆらゆらと漂う青い波間には、月。

たぶん風がでている。

◇19 風に押されて

ホテルのエントランスから飛び出したとたん、荒れた風がユカの頬をなぶっていった。

思った通り、風が強い。

ユカは携帯を取り出すと同時に、そのままタクシーに転がり込んだ。バタム、とドアが勢いよくしまり、空車の赤ランプが緑色にかわる。

「どちらまで？」

バックミラー越しに聞く運転手に、ユカは思いめぐらしたあと、コータの住む学生寮の名を告げた。

正直、どこまでだなんてわからない。そもそも入院なんてことになったとしたら、思いっきり無駄足に終わる。

でも、他にどこも思いつかなくて、ユカは学生寮の前で待ち伏せすることに決めた。

滑り出した車の中、ユカはアドレスをひらきコータの番号を探した。押し間違いがあせりを誘い、シートの窓から遠のくホテルを振り返る。

追いかけてくる影は、ない。

まだ気付かれてはいないものの、それも時間の問題である。

早くコータと連絡をとって電源を落とさなければ、安藤から怒りの電話が入ることは間違いない。

ユカはシートに身をひそめ、出たアドレスのボタンを押した。

ぷつぷつと途切れる電子音のあと、やっと切り替わった携帯は、

——『お客様のおかげになった電話番号は、現在電波の……』

という、聞きなれた女声のアナウンスで。

そういえば須賀からのメールに電源を落とすと書いてあった——と思ひ直し、ユカは時刻を確認した。

ディスプレイの時計はP.M. 8:45

とつくに夜間外来しかあいていない時間なのに、まだ病院にいるのだろうか。

ユカは「切」ボタンを連打し、メールフォームを出す。

そこへ文字を打ち込むのにも高まった気持ちが邪魔をして。

コータが無事でいますように、とか。須賀が携帯の電源を入れてくれますように、と思うごとに誤字を出し、その都度書き直すはめになった。

やつのことで「連絡待ってます」とだけ打ち込んだメールを送信する。そして携帯を胸に押し当て、ユカは窓ガラス越しに街並みを見た。

流れゆく夜の繁華街は色とりどりのネオンカラーをきらめかせ、すこし尾を引いて滲んでいく。

その上に思いつめた顔の自分がかぶさっていた。



コートたちの住む学生寮は、市街からやや外れた古い住宅街にあった。

暗い夜道は家々の灯りと電信柱にくくりつけられた照明、それと自動販売機だけが頼りで。薄暗さに木々のざわめきがあいまって、気味悪さを募らせた。

風が強すぎるせいで、ドレスの裾がひざにまとわりつく。

ユカは自動販売機を風除けにし、両腕で自分を抱きしめ細さをまぎらわせた。

ディスプレイの時計は、P M 9 .. 20

隣の電池マークは二本だけだ。いつもなら余裕って思うのに、今夜はそれが心もとない。

——まだ、帰っていないのだろうか。

ユカは学生寮の閉め切られた表玄関から、首を伸ばし、寮の小部屋らしき窓を見上げた。

マッチ箱を横に倒した形の寮は、白い鉄筋コンクリートの3階建てで、横に7つの窓が並んでいる。

その下にはエアコンの室外機がすえられ、それぞれがブンと勢いよくまわっていた。

閉めた窓の向こう側は、ハンガーを引っ掛けてある部屋、遮光カーテンで何も見えない部屋、さまざまだ。

あの中のどれかがコータの部屋。

まだ病院にいるなら、電気のもっていない部屋のどれかだろうか。

そんなことを思う間にも不安は色を増して、ユカはたまらなくなつて携帯のスライドをずらした。

——どうか、つながりますように。

心の中で祈り、ユカは自動販売機の灯りに携帯をかざした。

むやみに電池を消耗させるだけかも——という悪い想像を追い払い、リダイヤルを試みる。

出た表示は090から始まる不規則な数列。

お願い、と念をこめてユカはボタンを押した。けれど。

「え？」

R r r r …

ユカが押すよりも一瞬早く、携帯が鳴り始めて。闇に浮き出た名前に目をとめた直後、ユカは勢い込んで携帯を耳に押し当てていた。

「もしもしっ!？」

回線の向こうから、がやがやした、人のたくさんいる気配がした。

スリッパのぱたぱた鳴る音や、TVのコマーシャルみたいな音。そういった雑音ばかりが響く携帯に、ユカは繰り返し「もしもし?」と声をかける。

でも返事はなくて。

やがてドアを開け閉めする音が聴こえ、潮が引くように物音が静まったあとで、のん気な、でも待っていた声が届いてきた。

——『よう、子ブタ』と。

それだけで苦しくなり、ユカは心臓のあたりを強く押さえた。

コートだ! 良かった! とあふれる思いが喉をせきとめ、言葉にならない。

なのに、どうしたことか。切羽詰まったユカとは違い、コータはあまりにも平常通りであった。

『お前、俺から連絡なくて淋しかったんだろ？　へっへっへ』

ヤツはだしぬけにおちよくるようなことを言った。

あゝ暑いなここ、という独り言にまじって、なにか食べているのか、むしゃむしゃと食む音まで聞こえてくる。

それだけでも十分無神経であり、ユカを怒らせるフラグはたつていたのだが、その上

『ぶーちゃん、パーティは楽しかったでちゅか？』

どうだっていい、しょうもないことを訊ねて。心配していたユカの神経を逆なでするのだった。

「コータのバカ！」

ユカはふるふると口唇を震わせ、自販機に映る自分を睨んだ。

住宅街をわたる風が、ユカの怒鳴り声を遠くまで運んでいく。

湿った夏の夜闇に、ヒステリックな声がバカ、バカ、とエコーして。そのせいでか、どこかの家の窓ガラスが、ずっと開けられたのがわかった。

苦情一步手前の大音響を、でもユカはちつとも後悔なんてしていなかった。

こっちの気も知らないで、肝心なことを口にしないあいつが悪いんだ。

こんなに差し迫っているというのに。必死なのに。

全部、ぜーんぶコートアのせいだ——と、ユカは携帯に向かって更に吠えた。

「パーティなんかどうだっていいじゃん！ コート怪我してんのに、なんで黙ってるの？」

思いつくままめきちらすうちに、なぜだか、ユカはどんどん悲しくなっていた。

「バカみたいにヘラヘラして！」

ヤツのことだ。

どうせ格好つけて、やせ我慢をして、わざと口に出さないでいるのだ。心配させる、と気をつかっているのかもしれない。

でも——と、ユカは奥歯をかみしめ、眉間にしわを寄せた。

その距離感が腹立たしいのだ。

他人行儀に隠し事をされるのが、ユカにとってどれほどこたえることか、あいつはわかってない。全然。

ユカはうんともすんとも言わなくなった携帯を握りしめ、叱り足りない胸のうずきを持て余した。

つぎはなんて言ってやろうか。

いっそのこと刑事ドラマに出てくる無線機みたいに、口に拡声器をあてがって思う存分悪態をついてやろうか。

そんなことを思いめぐらし、イライラとつぎの罵声を口にしかけたときのことだ。

『……なんで知ってんの？ つーか、なんでここにいんだよ子ブタ』

ふいに、ユカは二重の声を聴いた。

ひとつ目は携帯から。

もうひとつは――背中を向けていた寮の方から。

ユカは携帯を耳に当てたまま、ゆっくりと振り返った。

闇にひっそりと佇む三階建ての寮。その一階のサッシに手をついた姿勢で、ヤツはこっちを見ていた。

青いTシャツ。携帯を握る手は包帯だらけだ。

絆創膏を貼り付けた右の頬も痛々しく、右眉の上を腫らしているの

がここからでもわかる。

コータは状況をのみこめないでいるのか、目を見開いていて。言葉を失ったかのごとく口をぽかんとひらいていた。

「コータ！」

もつれそうになる足が齒痒い。

ユカは呼ぶよりも先に駆けだし、途中、道路の際に生えていた草を踏んづけて、すべて転びかけたところをなんとかこらえた。

勢い込んで駆け寄ったあとは、めいっぱい手をのばして。窓際に立つコータの頬から肩、腕へと順にさわり、最後に窓枠から身を乗り出して脚を調べた。

ハーフパンツからのびた素足はところどころ薄汚れているものの、せいぜい包帯を巻いている程度だ。

ヤツはちゃんと両脚で立ち、想像していたギプスなどはそこになかった。

ユカは深く息をつき、それで自分が息を止めていたらしいことに気づいた。

顔をあげて、窓越しに目をあわせる。

コータは、ぼやっとしちやって。携帯を持ったままの手をだらりとさげ、こちらを見下ろしていた。

その表情はどこか、叱られるのを待っている少年のようで。部屋を照らす蛍光灯の灯りを背負っているせいか、怯えているようにも見えたと。

ユカは喉をつきあげる憤りを、いまから思う存分ぶちまけてやるつもりだった。

近所迷惑も上等。そんなこと、ユカの知ったことではない。

目の前にいるこのバカ男に暴言をぶちまけ、けちよんけちよんに言いあげてやるんだ、と意気込みも十分だったのだ。

なのに。

「良かった……」

思う気持ちとは裏腹に、張りつめていた糸が急に千切れて。ユカはくしゃっと顔をゆがませ、コータを睨むのが精一杯だった。

まるで悔し泣きしているみたいだ。

あっという間にかすんだ視界は、コータの驚き顔をもぼやけさせて。顔を伏せたとたん、涙はぼたぼたとサッシのさんに落ちていった。

「ごめん、子ブタ。悪かったって」

肩を震わせ泣きじゃくるユカに、ヤツもどうやらてんぱったようだ。

コートはあたふたと無駄に動きまわった挙句、すぐそばに転がっていたティッシュを掴み取り、繰り返して謝りながらユカにあてがってくる。

そしてユカを安心させようとしてか

「大丈夫だからな」

「見た目がひどいだけで骨はどこも折れてないんだって」

「だから泣くなよ！」

と、言い聞かせるみたいに力強い文句を吐いて。

自分の方がずっと痛そうなりをしているくせに、泣いているユカの方が重症でもあるかのように、目線をあわせてなだめてくるのだった。

ユカはされるがままになり、かいがいしく世話を焼くコートをじっと見つめた。

二重とも、奥二重ともいえる微妙な瞳は、表情次第でころころと色合いをかえる。

蛍光灯に照らされ、茶色に透けた髪は、元気にぴょんと遊び毛が立っている。

無骨な、包帯だらけの指も。こわごわとした手つきも。年中日焼けしている肌の色も。だいぶ傷ついてはいるけれど、どれもがユカの

好きなコートだった。

きいと音がなった時、ユカは心の扉が開いたのかと思った。

実際には行き場をなくしていた風が、コートの部屋のドアをちよつと押し開けただけで。その音を合図に、窓から一直線に抜けたドアへと、風が吹き抜けるようになった。

窓の外に立つユカの背中を、夏風が押してくる。

呼び込まれるままに、強く、強く。

これ以上は行き止まりで進めやしないのに、あんまり押してくるものだから。

ユカはいまこの瞬間に、降服宣言をしたくなった。

「コート、好き」

風の威力を借りての告白は、ヤツの住む4畳半の部屋に流されていた。

踏ん張った足元からこみ上げる熱が、身体中をめぐっていく。

あまやかな、ときめきを乗せて。

◇20 LOVE*TUNE

その後どのくらいの時間が流れただろうか。

5分かもしれないし、30秒かもしれない間、ふたりは言葉をかわさないで向きあっていた。

窓から入る風が、床に放り出された雑誌のページをめくり、ぱらりと爪弾くような音をたてる。

そんなかすかな音さえも、ハツとするほど大きく聞こえた。

せわしなく叩く鼓動にたえられず、ユカは逃げ出したいような気持ちに駆られた。

自分から切り出したくせに。って、つつこみたくなるけど。コータが何も言わないから尚のこと、追いつめられた気分になるのだ。

ぎゅっと手のひらをにぎり、よし、と思い切る。

深く息を吸い込み、ユカは退散すべく、窓越しに立つコータの青いTシャツめがけて声をだした。けれど。

「じゃあ……」

帰るね。と口にしたはずのさよならは、それが声になる前に後半部分をもみ消された。

唐突に覆ってきた包帯だらけの手によって、出しかけたものを無理に潰されるかたちになったわけだ。

——なに？

驚きに目を見開き、ユカは手を、続いてコータの顔を見上げる。

が、そうしたのも束の間、いきなりヤツがかぶさってきて。

「……ちょ！」

え？ なに？ と戸惑っているうちに両脇を掴まれ、ユカはあれよあれよという間に持ち上げられた。

宙に浮いた両足がぶらぶらとゆれ、まるでクレーンで吊るされた気分になる。

「ちょっと！ 下ろしてよ」

そんな突拍子もない状況にうろたえ、ユカは打って変わって非難の目をコータに向けた。

けれども、そこには歯を食いしばり、痛みにゆがんだ顔があった。直後ユカは、——やばい。と反射的にヤツの両肩に手についていた。

だって、コータは手に怪我をしているのだ。

体重を分散させなければ、手にかかる負担が重すぎて怪我が悪化し

かねない。

乱暴を責めるより先に、ヤツをいたわらなければ。——と、そう判断したのはもちろん、コートへの恋心ゆえのことだったのだが。

が、どうやらそれは大間違いだったらしい。

「——！ イヤだ、怖い」

つぎの瞬間、コートはこれ幸いともいった具合に抱え直してきて。ユカは、まるで大きめな荷物みたいに、よいしょと肩に担ぎ上げられたのだった。

その後は言うまでもない。

荷物よろしく担がれたユカは身体がぐにゃつと折れ曲がり、頭から落下しそうな恐怖に目を開けてはいられなかった。

おまけに脱げてしまったミユールが窓の外にころんと落ちて。あつと声をあげる間もなく、窓ガラスと部屋の扉がたて続けに閉めきられ、狭い寮の一室に閉じ込められてしまったのだった。

コートはゆるゆると膝をつき、ユカを畳に下ろした。

手つきからは一応、落とすまいとする気づかいが感じられる。

でも、そんな優しさにはだまされないぞ！ ——とユカは体勢を立て直すがいなや、キツとコートを睨みあげた。

「イヤだって言ったのに！　落ちるかと思ったじゃん。コートのカ！」

さっきまでの、うれしはずかし甘い気分はどこへやら、である。

乙女心はうつろいゆく空のようになるとかわって。狼藉を働かれたショックと、与えられた恐怖で、いまやユカの感情の針は大きく怒りへふれているのだ。

なのに。

「しーっ！　大きな声出すな、って。ここ女子禁制！　寮則破ったら退学になっちまうだろうがよっ」

ヤツはずうずうしくも自分の都合を押しつけてきて。これ見よがしに人差し指をたて、黙れの合図を送ってきた。

それに納得がいかず、ユカはぷいっとそっぽを向いた。

なんて勝手な言い草だ。無理に連れ込んでおいて、喋るな、だなんてと。

その一方で初めて入るコータの部屋にどきどきしたりもして。

ユカはふくれっ面のまま目を動かし、生活のあとがそこかしこにある部屋をまじまじとながめた。

畳敷きの床には無造作に雑誌が投げ散らからされており、コートが直前まで食べていたとおぼしきスナック菓子の袋が口をあけて転が

っていた。

壁には練習のメニュー表や、寮内で決められているのか風呂の時間割が貼ってあって。それでいえばコートは、1日200回腹筋をし、お風呂は8時に済ませているらしい。

——のわりに薄汚れているのは、病院へ行っていたため入れなかったのだろうか。

広さは4畳半で、エリアの大半をパイプベッドが占めている。

畳の上に座ってふたりで話し込むには、かなり窮屈な感じだった。

そんなふうにユカがお宅拝見していた時の事だ。「だって」とヤツが言った。

「ああでもしなけりゃ子ブタ、帰るつもりだっただろ？」

——なんだ、わかってたんじゃん。

そう思って振り返った先には、気恥ずかしそうなコートの顔があった。

ヤツは絆創膏に皺を寄せ、にやつく顔を必死で抑えているような、微妙な表情をしていた。そうして、視線が合わさったとたん咳ばらいをし

「これさ、今日中に渡したかったんだ」

と引き出しから取りだした箱を、手の中で落ち着きなく転がしだした。

本当はこの時、箱の大きさから中身は想像がついていた。

撮影でスタイリストさんが持ってくるのと形が似ているし、かけられたリボンに、そういうショップの店名が書かれていたから。

けれど、うれしくて。さっきの無礼など宇宙のかなたまで飛んでっ
てしまっ。ユカは胸をはずませ、中身がわからないふりをしながら、手の中の箱を覗き込んだのだった。

ヤツは口元をほころばせ、ネックレス、だとはにかみながら言った。

その、普段ふてぶてしいコートからは想像もできない照れた笑い声
までがときめきを運んできて、ユカは

「つけてよ」

と背中を向け、心もち頭を下げた。

おかしいのはコートだけじゃない。自分もだ、とユカは口をすぼめ
た。

いつもならきつと、こんなに素直にはなれない。つけて、だなんて
甘えたことは絶対に言わないはずだ。

それゆえにユカは、浮かれた自分を意識していた。

なんだかもう、細胞のひとつまでわくわくしちゃっているのだ。

コータが“あれ!?”とか、“これどうなってんだ”などと悪戦苦闘しているのも気にならない。それどころか、くすぐったくさえある。

細いチェーンが後ろでプチと留められた頃には、夢心地はてっぺんを極め、うなじに触れた指のときどきする感触もあいまって、ユカはそのへんのクッションでも抱きしめ、ぎゅうっとつぶしたくなるくらい幸せ気分になったのだった。

ネックレスは、ハートのペンダントトップがふたつ付いていて、それぞれが擦れあい可愛い音を立てるデザインだった。

ちりちりと、ユカの恋と似た音が鳴る。

それに耳をすませ、ユカは喜びをかみしめてから身体の向きをかえた。

「ありがと、コータ」

柄にもなく照れて口にした言葉は、うまく伝わっただろうか。

そうだったらいいな――なんて思いつつまなざしを上げると、ヤツも自分とかわらない表情をしていた。

なんとなく、だけれど。目があったと同時にお互いふきだしてしまいうような、秘密めいた空気が漂っていた。

そんなラブ度の濃い空気が、ひょっとしたら部屋の外までにじみ出たのかもしれない。

「おい、コート。入るぞ？」

てへへ、と照れ笑いしていたふたりは、突然外野からかけられた声に、我を忘れて飛び上がりかけた。

ドアの外には、いつの間にか人の気配。コンコンとドアをノックし、いまにも乗り込んできそうな雰囲気とする。

と、その直後だった。

「！」

声にならない悲鳴をあげ、ユカは引きつかまれた腕に目を落とした。そうこうしているうちに突き飛ばされて、瞬く間にパイプベツトへと寝転がされる。

ヤツは自身も隣に寝そべり、上から掛け布団を引きかぶっている。薄い夏布団にくるまれて、ふたりは身体を寄り添わせる形となった。

薄暗い視界の中。ユカは全身を脈打たせ、息を殺した。

精一杯縮めた身体のそばには、同じくらい身をかたくしたはやい鼓動があった。

◇21 恋の感触

頭っから被せられた夏布団は、コートと同じにおいがした。

意識している余裕などありやしないのに、ユカは密着する別の体温が気になって、痛いくらいつきあげる鼓動をしずめることができなかった。

狭いパイプベッドでは、どうしても避けられない。

無理に離れば、それこそ大変な事態を招くかもしれないし。

そんなギリギリの緊張感が漂う中、ドアのあけられる音が聞こえた。

「……はいるぞー？」

怪訝そうな物言いのあと、みし、と畳のきしむ音が鳴る。

爆発しそうな鼓動がうるさくて、外にまで響きそうだ。

うすっぺらい夏布団は、注意深く観察されれば膨らみの違和感にすぐ気づかれてしまうだろう。

そんなことを考えれば考えるほど気持ちが高まって。

「あれ？」

と、気配の主が不審そうな声をあげた時には、ユカの寿命は30年くらい縮まった気がした。

「コート、寝るのか？」

侵入者はほんの数歩入ったところで足を止め、こちらを窺っているようだった。

「寮長がよ、全員風呂済んだから怪我が平気そうなら入っていいぞ、って言っただけだ。どうする？」

彼は最後に風呂をつかった寮生なのだろう。

心配しているのが伝わってくる声音に、不審がられたわけじゃないのだとホッとしつつも、まだピンチが過ぎ去ったわけではない。ユカは息を殺し、改めて身を引き締める。

「あー、もう寝る。痛むから風呂は止めとくわ」

コートはそう口にして、これで話は終わりだと告げるかのごとくユカの方へ寝返りをうった。

「そうか……、大丈夫か？」

「うん」

たった一言返事をしただけで、身体越しに振動が伝わってくる。

それっぽっちのことさえわかるのだから、きっとユカの異常な心拍数などとお見通しだろう。

そう思うだけで恥ずかしくて、ユカは状況からも、コートからも、尻尾を巻いて逃げ出したいくらいだった。

やがて寮生は

「あんま痛むなら呼べよ」

と言いつ残し、そのままきびすを返した。畳のすれる音が鳴る。

遠ざかる気配に、――良かった、とユカは安堵の息をついた。

たまらない緊張感から解放され、無事を確かめあうつもりでコートを見やると、ヤツもこちらを見ていた。

ほの暗い布団の中でかわす視線に、お互い苦笑いだ。

秘密を共有した仲間同士というか、戦いを勝ち抜いた戦友みたいな、妙な連帯感をこの時は感じた。

――この時は、だ。

「じゃ、電気消すぞ？ お休み」

神様のイタズラか、それとも当然の成り行きなのか。

寮生はそれが迷惑とも知らないで、無情にもぱちりと部屋の電気を落とした。当たり前のようにドアを閉め、鼻歌まじりに部屋を過ぎ

去っていく。

真っ暗闇に閉ざされたパイプベッドに、密度の濃い空気がこもる。

1ミリだって身じろぎできない緊張感を、スリッパの遠ざかる気配が高まらせた。

「コート、電気つけようよ」

息づかいまで感じ取れる距離に気が気ではなく、かといって、急激な明暗の移り変わりにまだ目が慣れなくて。ユカはそわそわしながら声をだした。

自分の位置からはコートをまたがないとおりられない。

それに、コートなら目が慣れなくても自分の部屋。

この状況を打破するには、コートが動くのがてっとりばやいに決まっている。

けれど、ヤツはなんの反応も起こさなかった。

——まさか、寝た？　と一瞬いぶかったが、よく考えてみればそんなわけがない。

ついさっきまで寮生と話していたのだ。さすがに10秒で寝るなんてことは現実的じゃない。

ということは——と想像をめぐらせ、ユカはごくりと唾をのんだ。

考えたはいいけれど、そうするべきではなかったかもしれない。

思いつくのはピンク色の展開ばかりで、ユカは自分で自分をツツこまずにはいられなかった。

「コータ、なにやってんの？　はやく電気つけてってばー」

ふたたびユカは、今度はおどけた調子で言った。

それはもちろん、なんだかヤバイ気がしたからだ。

ヤツが返事をしないことで濃くなった気がする微妙なムードを、鬼は外よろしく追い払わなければ、と。妙な使命感でもって、健全で明るい空気を呼び込もうとしたのだった。

でも、返事を待つユカの耳に届いたのは、健全どころか、いつそうあやしげな雰囲気をもす反応だった。

「あのさ、さっきお前、好きって言ったよな？」

聞いた瞬間、ユカは身体中の血という血が、一滴残らず頭にのぼった気がした。

なんでいまこのシチュエーションで蒸し返すかな？　――と、ぶり返された羞恥に怒りさえ覚えそうだ。

そのうちにもどくどくと鼓動は高鳴り、生え際のあたりがじつとりと汗ばんでいく。

言ったよ、と答えたらどうなるのだろう。——とユカは思った。

逆に、——さあ？ そんなこと言ったっけ？ と、とぼけたらどうなるのか。

いろいろな妄想が脳内をめぐり、ユカはあれもダメ、これもダメ、とシミュレーションを繰り返した。

けれど、コータは返事しないことが返事、と受け取ったみたいで

「そのネックレスは首輪だからな！」

ユカの返事を待たないで、そうすっぱりと言い放ったのだった。

「え！？」

実のところ、ユカにとってこの一言は予想外だった。

コータをみくびっていたわけじゃないけど、てっきり——

“じゅるる。うまそうな子ブタちゃんだ。さくて、いただきちゃおうかな”

——って感じの、スケベコータが頭をもたげるだろうと思っていたのだ。

「飼いブタの印だ。おいしそうだからな、間違えて食べられないよ

うにしとかないと」

続けて聞こえた声は笑いをふくんで、どこかすがすがしくさえある。はつきりと顔が見えたわけではもちろんないけど。でも、きつといまこんな顔をしているのだろう——と、ユカにはわかった気がした。その、目に浮かぶコータがあまりに無邪気すぎるから、ユカは警戒していた自分がバカみたいな気分になった。

「そっか。これ首輪なんだ」

おいしそうだという言い回しは氣に入らないけど、まあいいか、と聞き流せてしまう自分は甘すぎるだろうか。

どうせならうさぎちゃんの方がうれしいのに——と苦笑いし、そろそろとネックレスに手を当てれば、ハートのふれあうささやかな音が鳴った。

その音色に耳を傾けていた時である。

「そう、首輪」とコータが言った。

「つまり食うのは俺だ。ピンチはチャンス！」

これぞ時間差攻撃。

ユカが油断をした隙に、はじき出したシミュレーションに近い展開が、不意について襲ってきたのだ。

その後のことは、いきなりすぎてユカには対処する間もなかった。

ようやく目が慣れはじめた闇の中、すぐそばにあったコータの口唇が一瞬だけふれた。

ああ、あたしキスされた！——と驚いているうちにもう一度かぶさってきて。今度は、なかなか離れていかなかった。

挟んだり、なめたり、噛んだりが果てしなく続いたかと思えば奥深く入ってくる。

意外なほど優しく、あまやかな感触を、ユカはひたすら受け止めるしかなかった。

遠ざかったあとは、目をあわせてはいられなかった。

ユカはコータの頬にあるよれよれの絆創膏に視線を逸らし、神経が焼き切れそうなきめきをこらえていた。

映画やドラマなら、ロマンティックに見つめあったりするんだろうけど、そんなこと無理。

息苦しいまでの幸福感に、それどころじゃないのだ。

我慢くらべのような甘い時間はしばらく続いて、結局、この状況に耐えられなかったコータが先にふきだしてしまった。

それが呼び水となって笑いがこみあげ、ベッドの中はムードもへつたくれもない有様となった。

「やべえ、スイッチ入りかけた」

冗談めかして一方的に終わりを告げたコータの、ベッドからおりる背中を見送りながら、ユカはそっと口唇を手で押さえた。

残り火のごとく、じんじんとした感触がくすぶっている。

はやく消えてほしいようで、永遠に消えないでいてほしい、恋の感触だった。



夜の小道。

送ってくれなくていいと言ったのに、寮を抜け出し、コータは付き添ってくれた。

一歩踏み出すたびに、踵を踏みつぶしたスニーカーの音と、ミュール、そして首輪についたペンダントトップがちりちりと鳴る。

最初は普通に歩いていたはずの歩幅は、タクシーを拾う国道が近づくにつれて狭まり、最後はのろのろとスローテンポの帰り道になった。

点滅している黄色信号の下を、タクシーが抜けていく。

さっきから何台も空車のサインを見つけるのに、もう一台、あと一台と言っては見送りっぱなしだ。

その合間に左右を窺い、タイミングを見計らって覚えたてのちゅーを交わしたり、意味もなくとび跳ねたりした。

そんなふうにして別れの時間を引き延ばし、これじゃダメと結論を出したのはしばらくしてからのことだった。

タクシーに乗り込んだあとも、ユカは後部シートの窓から、いつまでも動かないでいるコータの姿を見えなくなるまで見ていた。

家には、帰りが遅すぎるとガミガミ言う母がコンビニの店番をしながら待っていた。

それを適当にあしらって自分の部屋に駆け上がったユカは、背中でドアを閉めたとたんにはずるずるとうずくまった。

小さく身体を折りたたみ、手のひらで耳をふさぐ。

そうやって、嘘みたいなのこの幸せが外に漏れ出さないように、胸の中だけに閉じ込めようとしていた。

マナーモードの携帯には、きっと安藤からの不在着信が入っている。ちかちか光るサブディスプレイを、けれどユカは気づかないふりをしてまぶたをとじた。

心はちきれそうなほど、いっぱい。

他のことなんて、いまは持ち込みたくないのだ。

第3章END・WEB版最終章へつづく。

◇22 ストロベリーシェイク

WEB版最終章

22. ストロベリーシェイク

真夏のぎらつく太陽が足もとに濃い影を落としていた。

目をあけていられないほど白い輝きの正体は、海から照り返される暴力的な太陽光だ。

ユカは海岸沿いの道を歩きながら、あわただしくコンビニの青いシヤツを脱ぎ、キャミソール一枚になった。

向こう側から歩いてくるおばさんが日傘の下で眉をひそめているのは知っているけど、そんなの無視。

急がなきゃ遅れてしまう。そっちの方が断然大事。

夏休みに入ってからというもの、会える時間が激減したふたりは、コータのトレーニングが終わる時間にあわせて会う約束をしていた。時間はPM・6..30 場所も決まっている。コータたち自転車競技部のトレーニングコースでもあり、ユカの家からもほど近い遊園地の見える海岸沿いだ。

手のひらで陽射しを遮り、ユカは待ち合わせ場所に人影をさがした。

歩道と砂浜をへだてる堤防。そのわきに自転車をとめて、テトラポッドをまたいで座る後姿が見えた。コートだ。

「コート！」

手をメガホンがわりにして呼びかけると、白いTシャツの背中が振り返るのがわかった。

日に透けた茶色い髪。

夏休みにはいつていつそう日に焼けたコートに、ユカは立ち止まって手を振り、一目散に駆け出す。

はずむ視界の中、次第に鮮明になる顔は、頬にある治りかけの擦り傷がわらい皺を濃くさせていた。

まぶしそうに細めた瞳。その首根っこにしがみつけばゴールである。

ユカはご主人さまに飛びつくわんこさながらに、テトラポッドからおりたコートの胸元に飛び込んだ。

「お。子ブタは今日も元気そうだなー」

うんーと、Tシャツに頬をうずめ、コートのおいをかぐこの瞬間がいちばん好き。

わしわしと頭をなでられて胸一杯になる。と同時に、砂時計をひっくり返されたみたいな焦燥感を覚える。

もっと楽しまなきゃ。時間が切れる前に、と。

ふたりは小指をつなぎ、堤防から階段をおりた。

相合傘と悪口だらけのテトラポッドを右手に眺め、朽ちた流木や花火の燃えカスが散らばる砂浜を行き、目指すのはこれまたお決まりの場所だ。

人目につかず無料ですごせる日陰が他になくて。ふたりは隅っここの岩場で涼みながら、お喋りをしたり、いちゃいちゃしたりして過ごすのが日常化している。

「溶けてなければいいけどなー」

壁にもたれてしゃがんだあと、マクドナルドの紙袋をこそこそとあさり、コータは紙のカップをほい、とつきだした。

いちご味のマックシェイクだ。

ちょっとかたい中身をかきまぜながら吸い、目をあわせて笑いあう。

はたから見れば暑苦しい絵にちがいないが、どうかお許し願いたい。

つきあい始めて2週間しかたたない、らぶらぶのユカたちにとっては、どんな些細なことでも楽しいのだった。

岩場には、どこかに風の通り道があるのか、時折心地よい風が吹いた。

乾いた南風が火照った肌をなでていく。ひんやりとした岩肌の温度とあいまって、ずっと汗の引いていく感じがした。

「あのさー」

「ん？」

隣からした声にめいっばい首をひねって振り返ると、コートは明後日のほうを向いて喋っていた。

鼻の頭が赤い。連日の部活動でまた日焼けしたようだ。

「しまなみ海道って知ってる？」

しまなみ海道とは、愛媛と広島を結ぶ、瀬戸内海にかかる橋である。

景色がよいことで知られ、観光客や写真愛好家に人気らしい。

けど、それがなんだというのか——と、ユカは首をかしげた。

「知ってるけど。突然なに？」

「そっか。いや、さ……、あの」

コートはいつになく歯切れの悪い口調だ。

海や岩場などをきよろきよろと見回し、ユカのほうを見ようとはしない。

それが気にかかり、ユカは眉をひそめた。

「なによ？」

「いや、あのな？ えーっと。いつもここで会うばかりだと物足りないだろう？」

「……ぜんぜん」

というか、それとしまなみ海道との接点がわからない。

いぶかって目を逸らさないと、心なしかコータの耳あたりが赤くなった気がした。

ヤツは、あー、もうっ！ と焦れた様子で頭をかき、もともと整ってもしなかったヘアスタイルをいっそう破壊させる。

何かもどかしいのか知らないが、もっとわかりやすく言えばいいのに。——とユカがマックスシェイクを手の中で転がした時だ。ようやく、コータが口を割った。

「しまなみ海道をチャリンコで走ってみたいなく、なんて……」

だんだんと尻すばみに語気を落とすコータは、そこまでする口にする、ユカの顔色を窺うようにチラ見した。

どうやら断られるのを気にしているみたいだ。

そういえば、プールに誘われたのも断ったわけ——と、ユカは記憶の糸をたぐる。

あの時は、ブタの絵に腹をたてたのが大きかったのだけど。

それにしても、正直日焼けしそうな場所には行きたくなかった。

もしかしたら撮影の仕事もらえるかもしれないし。日焼けがマイナスに働くことも多いし。

でも、せつかくの夏休みである。

毎日コンビニの店番をしているだけ、というのは、高校2年生にもなってあまりに淋しい。

どこか出かけてみたい気持ちもあるし。まあいいか——とユカは、コータの鼻の頭に浮いた汗を指でちょいちょいとこすった。

「いいよ。でもちょっとだけだよ？」

「えっ！ まじで」

とたんに瞳を輝かせるコータは、なんて無邪気なのだろう。

たったそれだけのことでヤツは両腕を高くつきあげ、治りきっていない頬のかさぶたがぴりっと破れそうなほど大口をあけている。

そんなコータの浮かれっぷりにつられ、ユカもちょっとばかしテンションがあがった。

なのに。

「じゃあ、一番短いコースだと大島までだから、そのあたりで民宿でも予約しようかな〜と」

数秒後にはさっきとちがう話になっていて。ユカはストローをぷつと吐き出し、あせって聞き返すこととなった。

「はあ？ 予約って、なに言ってるの？ コータ」

だっておかしい。

大島という島は、ユカたちの住む市から見れば、ちょっとした遠足にしかない距離にあるのだ。

民宿だなんて、とる必要がないのである。

「大島なんてすぐそこじゃん！ 余裕で日帰りできるんだよ？」

それに、しまなみ海道を走ると泊まるのでは大違いだ。

大違いというか、無関係すぎる。

「いいじゃん、ついでに泊まっちゃえば。泊まらなきゃ損だって」

が、コータはしゃあしゃあとそう言い放って。無理すぎる理屈を並べ、ごり押ししてくるのだった。

「ちーっとも、ついで、じゃないって。意味わかんないよ」

とはいえ、ユカだとして引くわけにはいかない。

ユカの家は、外泊どころか外出だって厳しいのである。

簡単に通らない話を勝手に決められても困るし、それに——と、ユカはそこまで考えたところで中断し、ハッと目をみはった。

「コータ、まさか……」

続く言葉をのみこみ、目があったとたんやましそうにストローを咥えるヤツの横顔を観察する。

微妙な表情だ。

ばつが悪そうでもあり、笑いをこらえているようでもある。ぴくりと痙攣する頬のあたりが、怪しいことこの上ない。

この表情は——と、ユカは目をつりあげ、ふきだすのを我慢しているような瞳をキッと睨んだ。

コータのことだ。どうせエッチなことを企んでいるにちがいない。

「コータの嘘つき。しまなみ海道なんて、どうせこじつけなんですよ？ 本当はいやらしいことが目的なんだ！」

「あっはっは」

断言した直後、コータはたまりかねた様子でふきだした。

ホラ、見たことか——と口唇を尖らせ、ユカは爆笑するコータの横顔を見据える。

ぶっちゃけると、表情ほど怒っているわけではない。

そうやって無理にしかめっ面を作っておかないと、スピードを増す鼓動が勝手に頬を赤らめてしまう。

照れていると勘違いされたら大変だからだ。

「ちげーよ！ いや、全然ちがわなくもないけど。我慢はできる…
…多分」

ヤツはようやく画策を認め、ポテトの箱を傾けると流し込むようにして頬張った。

「本当はさ、ちゃんと紙に書いてセリフ暗記してたんだけど。セリフの順番間違えちゃったから、もう正直に言うわ」

むしゃむしゃと噛みながらぬけぬけと言うコータは、一体どこまで図太いヤツなのだろう。

完全にひらきなおったのか、ヤツはコーラの力を借りて飲み下すと、いきなりユカに向かって居住まいを正して。

「アレはナシで構わないんで。ユカちゃん…一緒に旅行へ！ どうか！」

なんと、恥も外聞もかきすてて、土下座するみたいに這いつくばったのだった。

「ちょっと、なにそれ。こんな時ばかりユカちゃんなんて呼ぶの

ずるいよ！」

まったく、その通りだ。

ぶたぶたブー子と好き放題に呼びながら、なにを今更——と思う。

けれど、そんなことくらいで諦めるようなヤツでもなくて。

「重要な話だから名前で呼んでんじゃねーか。じゃなくて、呼んでるんです。この通りお願いします！ 武士の情けと思って！」

コータは地面におでこをすりつけるくらいかしこまり、繰り返し乞い願って、決定権を握るユカの乙女心——もとい、同情に訴える作戦をやめないのだった。

「もう！」

ユカは頬をふくらませ、土下座するコータから身体ごとそっぽを向いた。

腹立たしくて、返事なんかする気にならない。

みつともなく頭なんか下げちゃって。こういうのはもっと、ロマンティックに誘ってほしかったのに。

ヤツの頭からぴょんと生えている遊び毛を、思いっきり引っ張ってやりたいくらいにムカついているのだ。

でも、その一方で体感温度がじりじりと上がっていてもいて。

「……だめ？」

やがて、返事をしないユカに焦れたのか、コートあの情けない声が耳を掠めた。

叱られるのを待っているような視線が、横顔にぴりぴりと感じられる。

そのまなざしがもたらす胸苦しさに耐えかねて、ユカはじつとりと汗をかいたスキニーの膝を、腕で抱えるようにして縮まった。

「絶対アレはなしだからね！」

つぎからはもっと乙女心に配慮してほしいです、とか。嘘をつくのはやめましょう、とか。用意していた文句はたくさんあった。

けれど、それを口にするよりも先にめいっばい強く抱きしめられて。

「やったー！」

手加減なしにぎゅうぎゅうと締め付けてくる腕の中、ユカはいちごシェイクごと自分まで溶けていくような気がした。

清水の舞台からダイブするつもりで吐いた承諾の言葉が、音速ロケットなみの速さで体温を急上昇させていく。

「今回だけだからね。もう土下座しても聞かないんだから」

顔をしかめても、怒鳴っても、手遅れ。

一泊なんてすれば、きっとムードに流され、約束はなしくずしになるだろう。

ポーカーフエイスを気取れるのは最初だけで、熱くなった頬をごまかすことはできない。

◇23 言えずじまい

8月半ば。まだ早朝といえる時間帯なのに、家から出た瞬間にわつとセミの声が降り注いだ。

競うように鳴くセミの声にまぎれて、近所の公園からラジオ体操の曲が流れてくる。夏、本番である。

ユカはななめがけにした旅行バッグをゆすり、まなざしを駅のホームに向けた。

ちつとも眠れなかったせいで、太陽が目にしみる。

昨夜は撮影の前日なんて比べ物にならないほどの緊張で、何度も目がさめてしまつて。結局まとまった睡眠はとれないまま、朝を迎えてしまったのだった。

こんなに落ち着かないのは、緊張のせいだけではないかもしれない。

たとえば、親に嘘をついたことによる不安とか。それと、萌のことも――。

ホームにゆるゆると到着した快速電車に乗り込み、ユカはあいたシートに腰をおろした。

背中側の窓からは今日の晴天を約束する陽がまぶしく射して、板張りの床に等身大の影をゆらめかせている。

壁のポスターに頭をもたせかければ、寝不足の瞼は、振動に誘われすぐ閉じていった。



——『もしもし？ ユカ？』

先週末、萌からかかってきた一本の電話は、ちょうど相談事を持ちかけたかったユカにとって絶好のタイミングだった。

なにせ、夏休み中ずっと東京でレッスンを受けている萌だ。旅行のარიбай作りを頼むにはまさにうってつけの存在である。

萌と一緒にだと知れば親だって安心するにちがいないし、スタジオに行くだけでも言うっておけば、電話がつかなくても不審がられず一石二鳥。

ユカの中では、協力を頼むには萌をおいて他にない——というつもりだった。

——「萌、良かった！ 連絡こないかな〜と思ってたところだったんだ」

何から話すべきか。

冷静に順番をつければ、第一にコートのことだろう。

萌は東京にいる間中、ステージママの母親に携帯電話を預けっぱなしだから、こちらからかけるのは気が引けて。一方的に連絡を待つ

ていた結果、いままで報告がのびのびになってしまっていたのだ。

とはいえ、萌は須賀とつき合っているわけだから、とつくに又聞きしているだろうけど。

それでも一応、自分の口から伝えておいて。その上で本命である二番目の相談――旅行の計画を打ち明け、初エッチとアリバイ工作の相談をするのがベストだ、と考えていた。

萌とそんな話なんてしたことないけど。彼女は、そういうことも経験済みなのでは？　と思うから。

けれど。

――『そうなの？　何かあったの？』

――「あとでいいや。萌はなんだったの？」

このあと続いた些細なやりとりをきっかけに、浮足立った気持ちに影がさして。ユカは、足踏みしてしまったのだった。

――『あのね……里山さんていたでしょ？』

萌は電話越しからも機嫌の悪さが伝わるほど、いつになく、つんけんとした口ぶりで言った。

急に持ち出してきた懐かしい名前は、ユカや萌にとって事務所の元先輩。一昨年だったか、受験を理由に事務所をやめ、いまは関東の大学に進学しているはずの女性である。

なんにしても名前を聞くのでさえ久々で、その里山がどうしたというのだろう——と、ユカは首をかしげた。

——「里山先輩だね？　どうかしたの？」

——『そう、その里山さんなんだけど……』

萌の話は、かいつまんで説明すると、つまりこういうことだった。

オーディション専門誌に掲載された、全国大会エントリー者のプロフィール。

その中に萌の名を見つけた里山が、懐かしさに駆られて、事務所にアポをとってきたらしいのである。

折しも萌は10月に迫った大会を前に、上京して強化レッスンに明け暮れている——というわけで。

里山としては、後輩を激励したかったのだろう。萌が滞在するマンションに訪ねてきたのだそうだ。

ここまでなら、なんら問題はないのだが。

たまたま同伴していた里山の彼氏が、萌に熱をあげてしまい——案の定、ごたごたした人間関係へと巻き込まれていった、という流れだった。

——『私、本当にそんなつもりなかったのよ?』

いまは大会が近くてそれどころじゃないし、私には須賀君だっているのに——と息巻く萌は、よほどむしゃくしゃしているのだろう。回線の向こう側から、机か何かをコツコツ叩く音が絶え間なく聴こえていた。

正直なところ、萌をめぐるこの手の話は珍しくともなんともない。

萌はあの通り、特別恵まれた容姿だし。

それに。身近な人の影響を受けて、友達の友達は自分にとっても友達——とばかりに親しくするものだから、勘違いする人が多いのである。

だからユカにとってみれば、またか、という気ではあったのだけど。

でも、なんとなく引つかかって。

——「萌、里山先輩の彼氏に誤解されるようなことをしたの?」

つい、萌の非を勘ぐってしまったのだった。

——『ちがう! 私はまだ、先輩の彼氏だから仲良くしたただけなの。……まさか、ユカも疑ってるの?』

それが萌の逆鱗にふれたらしい。

ユカが口をきいた直後、萌は語気を強め感情をあらわにした。

——「え！？　ごめん、そんなつもりじゃ……」

慌てて謝ったけれど。

でも、その一方でユカは、別の感情がじりじりとこみあげてくるのを自覚していた。ずっと背のあたりをなでられたような、悪寒にも似た気持ちだ。

なぜかはうまく説明できない。

ただしいて言えば、萌よりも——ユカは里山に同情してしまったのだ。

それはユカに同じ経験があるからだろうか。

中学生のころ好きだったクラスメイト。そして須賀の件を彷彿とさせられて。里山の悲しみが、シンクロしたのかもしれない。

ユカにだってわかっているのだ。萌に悪意がないことくらいは。

萌にしてみれば単に、知人の彼氏と打ち解ける努力をした結果、相手が好意をはきちがえてしまっただけ。

自分は被害者だ、とさえ思うだろう。

でも——と、ユカは生唾をのむ。

だからこそ、持っていき場のない怒りや、どうしようもない敗北感

を相手に与えるのだ。

——『ごめんね、愚痴ばかりで。私ちょっと疲れてるのよ。母が口うるさいから電話だってできないし』

——「仕方ないよ。知らない場所で気を張っているんだし……」

憂鬱そうなため息をつく萌に、ユカは気を取り直し、励ますように言った。

——『そうね、はやく帰りたい。で、ユカはなんの話だったの？』
けれど。会話のバトンを渡されたあとは、なんだか気がつまって。

“もし、萌がコータと仲良くし始めたなら？”

“もし、コータまで萌を好きになってしまったら？”

そう考えると怖くて。

——「萌が帰ってきたら、一緒に見たい映画があってね。ハリウッドの……」

打ち明ける順番まで決めていたはずの言葉は、伝えられないままで終わり。ユカは口からでまかせを吐き続けて、電話を終えたのだった。

◇

——『つぎは、終点松山市駅。下り口は左側。お荷物、お忘れ物の駅についていた。』

ガタンとひととき大きな揺れでまぶたをあければ、電車はもう目的の駅についていた。

寝覚めの悪い夢のせいかな、ひたいの生え際に汗が滲んでいる。

はりついた髪をかきあげて、思わず苦笑いだ。夢に見るほど気にしているなら、言っちゃえば良かったのに。どうしてあの時言いよんだのか——と、情けなくてならない。

自分は心が弱すぎるのだ。萌がどうこうという問題じゃない。

自分に自信がもてなくて、余計なことに気をまわすからだ。

そもそも、萌には須賀という恋人がいる。以前とは状況がちがうし、コータのことを隠したところで須賀の口からとくに伝わっているかもしれないのに。

足早に歩く人波にまぎれ、ユカは改札を目指した。

週末の早朝は、さすがに駅の利用者が少なめである。そのせいで改札のゲートから身を乗り出すコータの姿は、ホームの端からでもはっきりとわかった。

黄色いTシャツに、はちきれんばかりの笑顔。

「子ブタ！」

人前で呼ばれるのはちょっと不本意だけれど、耳ざわりのいい声。

肩に乗っかるブルーな気持ちを一瞬で払いのけてくれる魔法の手が、ユカを待ちかまえていた。

◇24 青空へこぐ自転車

しまなみ海道は愛媛県今治市から、途中いくつもの島々を渡り、広島県尾道市をつなぐ全長約60kmの道路である。

“売り”は、本州へのルートが最短になったこと。

それと、徒歩や自転車といった通常では考えられない手段で海を渡れることだろう。

海上にのびる一本道をチャリンコですつとばす。なんて爽快なんでしょう、ってことで。

ふたりは愛媛県側のサイクリングターミナルでレンタサイクルを求め、瀬戸内海へといざ出発したのだった。

海をわたる橋に自転車をこぎだしたとたん、8月の風が頬をなぶった。

ターミナルで聞いたラジオによると、本日の最高気温は32℃

もうちょっと手加減してほしいところだけど、お天道様は容赦ないらしい。

狙い定めたかのような日差しが、ハンドルを握る腕をジリジリとあぶって。コータの悪口じゃないけど、これじゃ本当に焼き豚になってしまいそうだ——とユカは肩をすくめた。

絶え間なく吹き付けるまぶしい風が、Tシャツの袖をぐり抜ける。そうしてシャツの背中から出ていくためか、汗はかいたはなから乾かされていった。

コータの方はどうかというところ――

「見ろよ、子ブタ！」

ヤツはひょーやら、わー！ やらと、他の観光客が振り返るほどの奇声をあげて。ところどころで自転車をとめ、下の海を覗きこむ様子はまるで遠足にきた小学生のようであった。

記念撮影をする間も、機嫌のいいことこの上ない。

そんなふうにめいっぱいしゃがめると、来てよかったな、と思えて。ユカも、一緒にはじめてみたい気持ちになるのだった。

海を見下ろせば、橋のてっぺんから放射状に延びた線が、あやとりのような濃い影をゆらめかせていた。

ぎらぎらした太陽と、果てのない青空の下。海のと真ん中をつつばしるコータはTシャツの黄色をはためかせ、一点の道しるべみたいだった。

横からなぶってくる南風に髪をさらわれ、振り返りざま見せた笑顔はまぶしく輝いている。

「最高だなー！」

風にちぎられ、壊れたラジオみたいにしかなない声に、ユカはまけじと声を張りあげ「うん」と返した。

そうした瞬間に。ああ、いまがあたしの最高気温だ——とユカは思った。

ちょっと先をいく、背中をふくらませた黄色いTシャツ。

振り返ってまぶしそうに笑ったコータの横顔。

そして、うん！ と声を張り上げた自分。

それらすべてを、パシヤリと、心のファインダーに収めて。ユカはコータとふたりこのまま自転車を立ちこぎして、ぐんぐんと空へへぼっていける気がした。



コータの予約した民宿は島のはずれ。

便利のいい場所ではないけれど、夜にはライトアップされた橋が見えるらしい海のたもとにあった。

一泊二食付きで7000円だから、ユカたちにとってはきついお値段である。

でも、よその民宿とちがって、部屋で食事をとれるからくつろげる——というのがコータ談だ。

8畳ほどの和室に小さな机。

床の間には鑑賞用のミニひまわりが活けられ、障子窓から射すやわらかな陽が、掛け軸をあたたかく照らしていた。

それはそうと。

「では、ごゆっくりどうぞ」

ひとり部屋の説明を済ませてさがるおぼさんの言葉が、妙な意味をふくんでいるように聞こえるのは被害妄想だろうか。

また、その気持ちを助長させる意味深なエリアが襖の奥にあつて。さっきから視界に入るそこが、ユカの心拍数をいたずらに上げていくのだった。

「ごゆっくり、だって」

口の端をにやりと上げて、コートは気色悪い笑みを浮かべた。

「決まり文句だよ！ 特別な意味はないんだってば」

わざとぶっきらぼうに返すユカをよそに、ヤツはご機嫌な面持ちだ。下手な鼻歌を口ずさみ、お菓子、観光マップ、歯磨きセットと、修学旅行みたいなグッズを畳の上に広げていく。

その様子をちらちら監視しつつ荷ほどきをはじめた矢先、のっそり

と立ち上がる気配がして。

パツと振り返るがいなや、ユカは、コートが頭っからTシャツを脱ぐ瞬間を目撃してしまった。

「ひゃー！」

襲われる！——と身の危険を感じて叫んだ声は、喉のどこかに穴があいたみたいに情けないものとなった。

そんなユカを横目にヤツはふふんと含み笑いをもらして。

「バカめ。泳ごうと思ったただけなのに」

などとのたまう。片一方だけ上げた眉といい、口の端をねじまげた笑い顔といい、不敵極まりない。

「ま、期待させ損も悪いですし？ 子ブタちゃんがいちゃいちゃしたい、ってんなら、奥座敷まぐわいコースにもチェンジできますよ？」

「望んでませんから！」

「またまた」。本当は……あぁん、もう夜が待てない！ と思ってるくせに」

コータは恥じらいというものがないのか、AV女優顔負けの口ぶりと言って。ユカの視線もお構いなしに、デニムのジッパーをおろしていくのだった。

「思ってない！　ていうか、脱がないでよー」

ユカは抗議の声をあげ、手のひらで目を覆った。

すると今度は衣擦れの音が気にかかる。

視界が閉ざされているから尚更に、別の感覚が研ぎ澄まされるのだ。

ユカは指の隙間からコートタの生着替えを覗いた。

前かがみになった上半身と、腕のあたりのしなやかなライン。よく鍛えられた身体は、障子越しの陽を浴びて陰影をうすく落としていた。

脚から抜いていく所作がエロティックである。

「見てんじゃねえよ。このエッチブー子め！　ばればれだっつーの」

コートタは最初から泳ぐ気でいたのだろう。

デニムの下には膝までの海パン。黒地に白いテープの入った、一見ジャージに見えるタイプのだった。

「見てみるよ。この民宿、部屋の裏が海岸なんだぞ」

パン、といい音をたてて障子窓をあけ、ヤツは部屋に光を呼び込んだ。

誘う声にそろそろ手をずらせば、まぶしく白い世界がふたりを出

迎えていた。

縁側の奥には、青い朝顔。

生け垣いっぱい、いまが盛りと咲き誇っている。

次回、WEB版BLUE！最終回。

◇24 青空へこぐ自転車（後書き）

こんにちは、五十崎です。

次回最終回ということで、わたしの個人サイトにBLUE!のおまけページを作りました。

創作裏話みたいなものなんですけど、良かったら見てやって下さい。作者紹介ページから、わたしの個人サイトへ自動でジャンプできると思いますので！

それと本日7月9日、本作B*L*U*E*!が発売開始になりました。

全国の書店、又アマゾンなどのネット書店にて販売しておりますので、良かったら手にとってみて下さい。

宜しく願います。

最終話 はじかれる水、ブルー（前書き）

大変遅くなりました……すみません！

最終話 はじかれる水、ブルー

時計の針が大きくまわった夕暮れ時の海は、昼とはちがう表情をして波打っていた。

両腕をめいっばいに広げた遠い水平線と、夕風にあそぶパラソルのひだ。

海には端から崩れゆく波に挑む命知らずなサーファーたちがいて、いずれも赤味がかった空の下、黄昏の色に染まっていた。

ふたりは——という。一応水着には着替えたものの、泳げないユカである。

上からパーカーをはおり、大人しく波打ち際で砂遊びをしていたのだが。

けれどもそこはコートのことだ。

そんな地味な遊びやってられるか、ってことで。

頭からすっぽりと浮き輪をはめられ、ユカは、いつかコートが描いた落書きどおりの姿になり、無理やり沖の岩礁まで引っ張り出されてしまったのだった。

「こんなところまで来たら帰れなくなっちゃうじゃん」

ぶつぶつと不平をもらし、ユカは元いた海岸を振り返る。

ひどく小さく見える人の形に、心細さは増すばかりだ。

「大丈夫だ、って。このコートめが連れて帰ってさしあげますとも！」

軽々しい口をきき、コートは、ほら、と岩場から手を差しのべる。

ぐいと、引き上げられたはいいけれど、狭い岩礁はふたりがやっと座れるほどのスペースしかない。

ユカは口唇を尖らせ、しぶしぶ岩礁に腰を下ろした。

明るいうちに帰りたいのに——とチラ見するものの、ヤツのことだ。

どうせ簡単に帰る気などないにちがいない。

ヤツは隣に座るのかと思いきや人間座椅子のようにユカを抱えた。

そして嫌がらせなのだろうけど後ろから手をまわしてきて、肉屋の品定めよろしくお腹をつまみ、うまそうだだの、体脂肪率何%？だのと乙女心を傷つける。

「いじるのやめてよ！」

もう！——と吠え、ユカは悪さばかりする手をぺちりと叩いた。

が、ヤツはしれつとして、飼いブタちゃんの発育チェックだなどとはざく。その上、

「そもそもスケベなことをするために連れてきたんですから？」

と両手の指をばらばらに動かしてみせ、わざとらしく舌舐めずりをする。

まったく、なんてヤツだ。

ユカはふるふると震える口唇を噛み、浮き輪に指をめりこませる。

人が泳げないのをいいことに、こんな所にまで連れ出してきて。

絶対に触らせてなんかやらない。意地でも！——と狙われていそうな胸のあたりをガードしつつ、背中のコータをキツと睨みあげる。

けれど。

「うそだ、って。子ブタ、朝から元気なかったから気になってただけ」

そこにあっただのは、思っていたようなふざけた顔ではなくて。頭をなでられ、ユカはふりあげた拳のやり場に困ってしまったのだった。

気づいてたんだ。でも、なぜ？　と思ううちに、コータはさわさわと髪をすき、続くセリフを吐いた。

「子ブタ、やっぱり来るの嫌だった？ 旅行」

コータの声が振動となってつむじのあたりに響いてくる。

ためらいがちな声に、ヤツの自信のなさが透かし見えた気がした。

「そんなことはないよ、楽しみにしていたし。ただ――」

あせって否定したけれど。でも、その後の言葉をうまく繋ぐ自信がユカにはなかった。

親に、萌のところへいくと嘘をついたこと。

アリバイの協力を萌に頼み損ねたこと。

直接的な原因はこのふたつだ。

しかしユカをブルーにさせているのは、もっと根の深い部分で。それを口にしてしまうと、あきれられるんじゃないかと先回りして、胸の中に抱えたままにいるのだ。

ユカはあれこれと考えめぐらせた挙句、須賀のことを思った。

コータは須賀に対して、どんな心境を持っているのだろう。

自分にはない、あふれる才能を羨んだり、比べて凹んだりはしないのだろうか――と。

萌とユカの関係は、須賀とコータの関係に通じるものがある、と考

えたからだ。

「コート、須賀君のことどう思う？」

だから、聞いてみただけなのに。どうやらユカの一言は、思いもよらない意味をふくんで解釈されたいらしい。

「まさか、お前」

コートは髪をなでていた手をぴたりと止めて、いままでのずうずうしさから一転、こわごわと肩をつかんだ。

首をかしげ、ユカの顔を覗き込んでくる。

「子ブタ、いまだに須賀が好きだったのか？　ちがうよな？」

「え!？」

その――こちらを窺う目があんまりショックそうだから、なんだか、とんでもない失言をしてしまったと反省させられ。ユカはあたふたと取り乱し、上手いフォローも思いつかないまま、最後にはもうなるようになれと腹をくくった。

かなり情けない話だけれど、こうなってしまったからには仕方がない。

ユカは意を決し、言葉を選びながら萌とのわだかまりを口にした。

萌は、ユカの好きな人と親密になりたがること。

それが高じて同じ人を好きになり、そして選ばれるのは必ず萌であること。

そうなるのが怖くて、コータのことを秘密にしている、ってことを。

「――だからあたし、旅行のことも話せなかったんだ。昨日はそれで眠れなくて。すぐく卑屈でしょ？ 笑っちゃってよ、ホント」

言っているうちに自分で自分が嫌になってきて、ユカは口唇をかんだ。

友達にあるまじきいびつな感情。

それがわかっているだけに辛い。

いっそ、バカじゃねえの、と笑い飛ばしてくれたらいい。

そう思っておそろおそろ見上げたけれど、コータは笑いも、呆れもしてはいないようだった。

「須賀と俺との関係は、子ブタのとはちよつとちがうと思う」

コータは、ユカの浮き輪を取りあげ、それをぽんと高く放り投げた。

角度をかえながら落ちてくるのを、手を伸ばしてキャッチする。

「自転車ってさ、一緒に走る相手がいてこそタイムが縮むんだ。風の抵抗があるから逆にタイムは落ちそうなのに、不思議だよな。闘

争心、っていうの？ 相手を意識することによって、一人じゃ出せないタイムが出たりすんだよ」

「そうなの？」

「うん。たとえ須賀に勝てなくても、須賀のお陰で自分のタイムが縮んだ。ついていこうとして」

ユカは首をよじって、コートが投げては受ける浮き輪の軌跡を目で追った。

てっぺんに上がった瞬間、ビニールがきらきらと水をはじき、虹色のしぶきを飛び散らせる。

夕映えに染まった雲の流れに、そのまま乗っかっていきそうだった。

「だからさ、子ブタも同じに思えばいい」

「同じ？」

パシッ、といい音をたてて受け止め、コートはこちらを見下ろす。

潮風になぶられ、半濁きになった髪が、やわらかくゆれている。

穏やかな瞳には、戸惑い顔をした自分が映っていた。

「タイムがでないからわかりづらいけど、あの子がいるからこそいまの子ブタがあるんだ。――それにな、取られる！　っていうのは、俺の好みを無視していると思うぞ！」

だろ？ と、いたずらっぽく目をすがめた笑顔がまぶしくて、ユカは顔を伏せた。

「そっか……だよね、ごめん」

コータの言うとおりで。

なんて一方的な物の見方をし、卑屈になっていたのか。

ユカは背中に感じる心地よい温度に、泣きたいような気持ちになった。

髪の根元に響く声が、確かな愛情を感じさせる。

猜疑心に振り回されていた小さな自分が、ビニールにはじかれる水滴みたいにとっばらわれた気がした。

「それにしても寿命が縮んだじゃねーかよ。聞いてんのか、ブー子」

コータはふてくされた声をだし、顔をあげたユカのおでこをぺちりと叩いた。

「痛いよ、もう」

「お前、“あたち、やっぱり須賀君がいいんだブー”なんて言いやがったら命はないと思えよ。肉屋に売り飛ばすぞ」

おでこを擦って非難するユカに、コータは恐ろしいことを口走る。

だけれど、それもこれも全部、ヤツなりのやきもちなのだろう。

「はいはい」

ふたつ返事でいい加減に聞き流しながらも、ユカは、胸のあたりがほっこりとふくらんでくるのを感じた。

こんな何もない、ありふれた田舎町ではぐくむ平凡な恋。

嵐がくればきつと吹き飛んでしまうにちがいない、ありんこ同士の純愛物語みたいなものだ。

でも、神様——とユカは、南の空にまたたく一番星にむかって祈った。

この人と、ずっと一緒にいられますように。

なにものにも負けない、強い絆が結べますように、と。

BLUE！ 了

最終話 はじかれる水、ブルー（後書き）

大変ご無沙汰しています。作者の五十崎といいます。

本作は2008年の秋〜今年の春にかけて書いた作品で、本来なら50話まである長編恋愛小説です。

前作「らしく。」と同じく、出版社との契約により中盤までしか掲載できないことを深くお詫びいたします。

作者としては、なるべく後を濁さないよう、精いっぱい自然な形で終わらせたつもりではありますが、違和感がないか？　と言われれば嘘になります。

力足らずで申し訳ないです。

もしよろしければ、26話以降は本屋さんなり、図書館なりで読んでやって下さい。

さて、あとがきですが……。

この作品はわたしが初めて「書きおろし」の形で執筆したものです。

それまでは連載更新という方法で、読者さまから励ましの感想などをいただきながら書いていたわけで、そういう意味では大変思い出深いものになりました。

と同時に、書きおろしの厳しさを教えられた作品でもあります。

本一冊分ですからね、かな〜りしんどいです。孤独という面で（笑）それ以外にも文字数の規定があり、執筆中のわたしは常に文字数を気にしながら孤独と戦っていたように思います。

すべてが終わり、本も無事発売されたいまは、本当にホッとしています。

内容的には満足できない部分が多々ありますが、それは今後の課題として一つずつ消化できればいいな〜なんて思っています。

長くなりましたが、最後までお付き合い下さりありがとうございます！

またどこかでお会いできる日を楽しみにしています！

五十崎由記

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6096g/>

B*L*U*E*

2010年10月10日22時15分発行